# 宗方小太郎日記，明治 30～31 年

大 里 浩 秋

## 1. はじめに

本所報 No. 37 に「上海歴史研究所所蔵宗方小太郎資料について」を載せ，そこに宗方の明治 21 年の日記の一部を収録し，No. 40 に「宗方小太郎日記，明治 22～25 年」，No. 41 に「宗方小太郎日記，明治 26～29 年」を載せた。今号では，No. 41 の続きとして明治 30～31 年の宗方の手書きの日記を活字に起すとともに，解題をつけることにする。

宗方が書き遺した日記の大部分とその他の文章が現在上海社会科学院歴史研究所図書室（以下，歴史研究所と略称）に保存されている状況については，No. 37 で紹介したとおりであり，筆者は歴史研究所の好意で閲覧できたばかりか，日記のおよそ 20 年分をカメラに収めることができた。そこでそれら日記の内容を紹介すべく約 5 年分を活字に起してきたのだが，その作業が遅々として進まない。そして，この間また歴史研究所の好意で以前撮影していなかった後半 10 年ほどをカメラに収める機会があった。こうとなっては，ますます怠けるわけにはいかなくなった。可能な限り発表の機会を逃さずに日記の続きを活字にしていかねばと考えている。

前回までと同じであるが，お断りすべき事をいくつか記す。筆者の力不足で解読できなかった文字は今回もいくつかあり，文中では□で示した。また，日記中の人名や地名の記載ミスについては，直さずにそのままにした。さらに，原文のカタカナはひらがなに改め，漢字の旧字体は新字体に改め，適宜句読点を加えたが，人名の漢字は原文のままにした。私のこの解題中の原文の扱いも同様である。日記の解読と入力作業は，本学中国言語文化修士課程修了の増子直美さんに手伝ってもらった。

## 2. 明治 30 年 1 月から 12 月の日記

明治 30（1897）年の日記は，実は前年 29 年 9 月 1 日から書き始めてこの年の 1 月 31 日まで続いた一綴じと，2 月 1 日から 6 月 27 日，6 月 28 日から 10 月 17 日，10 月 18 日から翌年 31 年 10 月 16 日までをそれぞれ綴じた中に含まれている。ここではそれらを便宜上一緒にして 1 年分として，その内容から気になるいくつかの記述を取り上げて，コメントする。

この年の正月は漢口で迎え，1 月中に海軍宛ての報告を 3 篇書くとともに，前年 10 月に直接出向いて意見を交換した河南の胡書漁に手紙を出しており，2 月には胡から使いの者がたくさんの贈り物を届けに来て，その使いにまた胡への手紙を託して連絡を継続している様子が知れる。そして，帰国の経由地上海に 2 月 26 日に着くと，28 日には昼に李盛鐸（翌年には駐日公使になった），羅誠伯と「興亜の大事を議」し，夜には時務報記者の梁啓超らと「東方の時事を暢論し」ており，いずれも初対面と思われる彼らと議論することで，「日清聯合の事も在野の志士は皆之を熱望せり。故に両国政府の方針如何に係はらず志士互に相提携するは目今の急務也」と感じている。さらに 3 月 5 日には，時務報館の汪康年に会い，翌 6 日には帰国の船に汪が見送りに来ている。帰国前の短時間にあったこれらの人物，とく

に汪康年とはその後盛んに往来することになる。

なお，この時の上海滞在中，2度乙未会本部に出向いている。乙未会が結成されたのは乙未の年，明治28（1895）年の1月27日のことで，宗方が広島での創立会結成に参加していることはその日の日記に書かれており，同年10月22日にもその関連する会議に出ているのだが，その内容には触れていない。また，29年の日記には1度も乙未会の名前が出てこず，飛んで30年3月1日の日記で，上海におかれた本部を訪ねたことがわかるのである。と言って，そこを訪ねたとしか記していないので活動の実態を知ることができないが，歴史研究所に乙未会結成まもなく恐らくは28年2月初めに乙未会仮事務所が発行した『乙未会通告書』と題する印刷物が残っていて，最近それを読むことができたので，日記の内容からは離れるものの，この印刷物の内容中，主旨と規則をここで紹介することで，これまで知り得なかった乙未会という組織を結成するに至った経緯を確認しておく。

乙未会主旨

従来支那に遊ふ者其数少なからす。而して其目的異なりと雖大体の志に至ては皆各々期する処の事業を成就し，以て国家の富強を図らんと欲するに他ならず。然り而して其遊ふや，年を同ふすと雖地を異にし，地を同ふすと雖年を異にするあり。会々其年と地とを同ふするも亦た其業務を異にする等ありて，未た強固なる団体をなし親厚なる交を結ふ能はさりしは実に遺憾にして，皆之か必要を感せさるは無かりき。今や清国の亡状なる樽俎盟破て干戈相見に至れり。而して遊清の同志魚雁杳として通せす，蹤跡亦た茫として明ならさりしか。各其事業を就すの方便として習得したる清語の必要は端なく海陸軍より同志を請招して通訳其他の任務に当てしむるに至り，今日に及んて出征に従ふ者既に二百二十余名に達せり。是れ豈に天意にして人力の能くする処ならんや。然るに其従軍する者各々部属と方面とを異にし，其境遇相同師からさるにより，目視耳聞する処或は局部に精にして大体に粗なるの憾あるを免れす。且つ同志中戦死するものあり，功労を立つるものあり，向後益内外報道を要すへきこと多きを加ふ必然にして，之が通信往復の道なきは豈に恨事に非すや。於是乎益々団体を組成し連絡を通し親交を厚ふし，通信往復の機関を備ふるの必要に迫れり。若し夫れ終局後の事に至ては猶組織を改め団結を鞏固にし敏活の運動をなすを図らんとす。之か為めには同志相会して計議する処あるへし。今は只其焼眉の急に応して之を組織する而已。之を主旨とす。

発起人　宗方小太郎
緒方　二三
中野熊五郎
三澤　信一
白岩　龍平
前田　彪
野中　林吉

明治二十八年乙未一月

乙未会規則

第一条　本会は従来志を抱き支那に遊歴したるものを以て之を組織し乙未会と称す

第二条　本会は左の三項を以て目的とす

一，会員の親交を固ふし互に相連絡して永遠に其目的を達するを計る事

一，会員中目下出征中の者と在邦の者との間に於て通信を開き，諸般の便利を計る事

一，戦局の模様に由り内外会員の意見を総合し，支那に対する修好及通商条約等に付寤繳講究して将来の準備をなすを計る事

第三条　会員は先つ今回陸海空清語通訳官を以て之に充て，余は申込に従ひ加入せしむ

第四条　仮事務所を大本営所在地に置く
第五条　本会の事務は姑く発起人之を管理し，平和の後更に組織を改め役人等を設くへし
第六条　会員は少なくとも必す一月一回以上の通信をなすへし
第七条　会費は一ケ月金弐拾銭とす
第八条　本会は会員の通信報告及ひ本会の意見等を記載したる報告書を頒つへし
第九条　会員中戦死等ある時は，事務所より其父兄に通報を勉むへし
第十条　会員中戦死病死等ある時は，本会勉めて其伝記等を編輯すへし

内規
一　会員の書信中必要と認むるものは之を郷里に転送し，或は其写して会員に頒つことあるへし
一　戦況其他従軍中の報告は，差支なき限りは有力なる新聞に掲載すへし
一　大局に関する形勢（□□並に各軍の行動等）及朝鮮又は内国に於ける出来事の大体は随時之を報道すへし
一　会員中本会の名誉を毀損する者ある時は除名し，之を会員に報すへし
一　事務所には会員名簿寄付金名簿及会計簿を備置くへし
一　会員の移動は随時之を報告す

なお，この資料には他に「従軍通訳官名録」が載っていて，発起人を含む 223 人の名前が収録されている。

3 月 8 日に長崎に着いてからは，6 月 28 日までは出生地で実家がある宇土か熊本市に滞在した。その間多くの人に会い多くの手紙を書いているのは，それ以前の滞在時と同じであるが，この時の動きとして 3 点取り出しておく。1 つは，宇土に着いて病気療養中の父親を見舞いたいと願っていたのが叶わずに 2 月 28 日に亡くなっていたことで，宗方の落胆は大きかった。もう 1 つは，熊本市内に家を購入したことで，4 月 30 日に宇土から転居した。熊本で人に会っては宇土に帰る不便を解消するためであったろうし，経済的に新居を購入するだけの貯えが既にあったということでもあろう。さらにもう 1 つあげるならば，熊本滞在中 5 月 14 日に東次郎に会っていることである。この人物が幕末に南部藩家老を務め，明治 10 年代には芝罘の初代領事に就任しており，のち亜細亜協会に参加して，亡くなるまで中国問題に関心を持ち続けたといわれる東（南部）次郎（1835−1912）であるとすれば，宗方とこの時どんな話をしたかは興味を引くところである。

6 月 28 日に東京に向けて故郷を出発して 7 月 2 日に東京に着くと，25 日まで滞在してあちこちと要人を訪ねている。さっそく 3 日に海軍省に行ったのは，そこの嘱託を務める身として，各種の打ち合わせをしたということであろう。当時の嘱託費は，ひと月 100 円である。8 日に小村寿太郎外務次官を訪ねて「対清事業上に付き商量」したのは，その後の日記の記載によると，宗方が漢口で経営している『漢報』出版へのテコ入れを頼むためで，結果は外務省から 1500 円支払われることになった。他には，西郷海軍大臣，高島陸軍大臣，大隈外務大臣に会い，一時帰国中の乃木台湾総督にも会い，乃木とは「福州に対する件に付き熟議を為」している（後述）。このように政府・軍の要人にあって，中国事情を説明するとともに，自らの要望も提出して認めさせている様子は，中国問題を考える際の信頼するに足る人物として宗方が遇されていると感じさせるものである。

7 月 31 日に熊本に戻ると 10 月中旬に台湾に出発するまでそこに滞在し，10 月 22 日から 11 月 10 日の台湾滞在中は主に台北に居り，13 日に熊本に戻ると 27 日に急遽中国に向けて出発するまで滞在，30 日に上海に着いてからは山東省各地を転々と移動してこの年を終えるという目まぐるしい動きをした。

つまり，7 月からの動きもまた宗方の中国における調査能力が政府や軍に頼りにされ，民間においても宗方の中国理解の深さが頼りにされていたことを示しているといえる。

この間の注目すべきいくつかの動きを見るなら，熊本においては宮崎寅蔵（滔天）との交流が以前に増して密接に行われていることに気づく。宗方の日記には，宮崎は 8 月 4〜6 日と続けて宗方の自宅を訪ねて話をしており，その折宗方の知る中国在住の中国人と日本人を紹介していることが記され，また 8 月中旬宮崎が澳門に出かけ，9 月中旬まで澳門と広東各地の状況を視察して帰国したことを記している。この辺の動きを宮崎本人の記録に則して見ると，中国に出かける前に曽根俊虎の紹介で会った陳白から孫文なる人物が革命党の首領であることを告げられ，かつ陳白の友人何樹齢への紹介状を得て，何樹齢に会いに先ず澳門に行き，会えなかったので広州に向かい，広州で何樹齢ら孫文の同志たちに会っていろいろな情報を得たことを指しているのである（宮崎『三十三年之夢』「再び寝寐の郷国に入る」）。さらに，10 月中旬にも宮崎は宗方の自宅を訪ねることがあり，11 月になると，今度は手紙で「清国の亡命者孫文（逸仙）」が近々ひそかに熊本に来て宗方を訪ねたいと言っていることを伝えてきて，結局は 20 日に熊本県下荒尾の宮崎宅に呼ばれて孫文に会いに行くのである。今回孫文が宮崎の案内で熊本に来たのは，宗方が自分に会って「商量する所有らんと欲し」たからだと日記に書くのは，宮崎関係の記述には書いていない孫文の熊本行きの真相であるとも考えられる。宗方はこの時の孫文の印象を「大器に非ずと雖ども才学優豪邁果敢」で「天下を廓清するの志有り」と評価しており，翌年以降も宮崎と共に，あるいは単独にも会って意見を交している。

次に台湾滞在時についてみると，乃木台湾総督に会って，台湾統治に関する乃木の相談相手になると同時に，福州で前田彪（真）らが発行していた中国語新聞の『福報』について金銭援助を要請していることが注目される。7 月に東京で乃木と会った時にも同様の要請をしているが，乃木が台湾に来て現状を見たうえでアドバイスしてほしいと誘った機会を逃さずに乃木に訴え，ついには『福報』再興費として 560 円，さらに毎月 150 円の補助を得ることになった。日本の立場に立った中国語新聞を発行して中国世論への影響力を増すべく漢口で『漢報』を発行している宗方の意気込みが，『福報』再興にも発揮されたのであり，12 月 5 日の日記からは，名称を『閩報』に改め宗方と井手三郎，前田真の所有のもと近日中に発刊することになったとある。なお，宗方の手になった調査報告と思われる「支那に於ける新聞紙に関する調査」によると，大正初年にも台湾総督府の補助を受けて『閩報』が福州で発行され続けていることがわかる（『続宗方小太郎文書』）。

この時台湾に同行した井手とともに台北や基隆でかつて漢口楽善堂の活動に参加している高橋謙，山内嵓，七里恭三郎らに会っており，他にも多くの熊本出身者に会っている。つまりは，日清戦争に勝って台湾を植民地にした機会に宗方の知人が大挙台湾で各種の仕事についていることを知ることになる。また，台北滞在中に前年同地で亡くなった荒尾精の一周忌法会が北門外本願寺で営まれ，その席で後の京都帝国大学東洋史教授で当時は台湾日報主筆をしていた内藤虎次郎（湖南）に会っている。内藤は秋田の同郷石川伍一が日清戦争勃発直後に清国軍の動向を探るべく天津に留まって逮捕・処刑されたのを悼んで書いた略伝を，漢口楽善堂以来の同志で日清戦争時も同じく敵軍の情報収集をしていた宗方が書いた石川追悼文とともに『鹿友会誌』第五冊に載せているが，台北での出会いがおそらく初対面であろう。

さらに，宗方が宮崎の家で孫文と会ったのとほぼ時を同じくして，ドイツ軍が山東膠州湾を占領したとのニュースが届き，海軍嘱託としての直接の上司である安原からの電報が入った。それによると，宗方に中国現地に渡ってドイツ軍膠州湾占領後の事態について情報を集める任務につくよう，外務大臣，海軍大臣から要請があり，海軍内でもその件が同意されているとのことで，宗方は機密費 450 円を携えて急遽熊本を発ち，11 月 30 日に上海に着くと直ちに情報収集を開始している。この時も人脈が広く現地における調査聞き取りの経験が豊富であることが珍重され，宗方としてもその期待に応えようとした

のである。
　ここで，この年に宗方が海軍省に送った報告の日付けを日記から拾うと次のようになる。その題目が書かれているものはそれを加えて記す。
1 月 2 日―第二十二号，第二十三号，1 月 30 日―第二十四号，号外，2 月 26 日―第二十五号「清国大勢之視察」。

明治三十年

正月元日　積陰。朝東天を遙拝し賀正の意を表す。是日知己の清人交も来りて新禧を道ふ。
　夜桂氏の招邀に広恒信に赴く。緒方，折原等五名なり。是日高橋謙の信台北より到る。
　夜雨。
正月二日　雨。是日東京に第二十二, 二十三号報告を出す。熊本内田行に致書，家屋買取の事を嘱す。
正月月三日　雨。河南光州胡書漁に致書す（第二号)。夜緒方来訪。
正月四日　雨。是日北京井手素行に復書し，上海林正則に致書，松倉に百円交付の事を嘱托す。午前胡慶煥の長子候補知県胡藎臣来訪，其の父の書を携へ来る。
正月五日　雨天。下午李来訪。
正月六日　雨天。岳武穆の書に係はる石刻前後出師の表を購ふ。値三円。
正月七日　積陰，下午降霰。東京齊藤員安，上海白岩，沈文藻，実相寺，蕪湖井上等の信到る。夜飛雪紛々。岳忠武の書を展覧し，跋文一篇を作る。
正月八日　積陰，微雨。
正月九日　陰天。是日福岡高橋謙，東京斉藤員安に復書す。上海林正則，長城列の信到る。
　林正則に致書し，工部信局に托し送金の事を依願す。上海橋元祐蔵，工藤常三郎の信到る。上海高道，前田，古城，松倉列に復書す。夜東肥洋行に至り，十時半帰る。
正月十日　雪。日曜日。夜緒方来訪。
正月十一日　積陰。東京古島一雄，上海河本，林，近藤，長崎平野六郎等の信到る。林正則に復信す。
　是日皇太后陛下崩去。
正月十二日　陰，夜雨。是日上海前田彪，古城貞吉，重慶廖蓉初の信到る。
正月十三日　積陰，夜雨。上海白岩，東京安原二氏に致書す。安氏には領収書到らざるを以て之を促せり。午前東肥洋行に至り，夜帰る。
正月十四日　陰天。
正月十五日　陰天。上海白岩，前田に致書す。沙市永瀧久吉，横田，林曾登吉，上山良吉の信到る。直に之に復書す。夜緒方列来訪。胃痛甚，終夜不眠。
正月十六日　雨，夜雪。是日心気不舒。頭痛胃疼，半夜不成眠。
正月十七日　雪，晴天，半陰。日曜日。夜緒方来訪。
正月十八日　半晴。是日京都根津一，田鍋安之助，東京鳥居赫雄，金島，尾本，熊本内田友行，内田行，桑原信五郎諸氏の信到る。高橋謙台湾よりの信到る。上海白岩，松倉に　致書す。夜東肥洋行に至る。
正月十九日　晴。午前緒方来訪。是夜桂氏沙市輪船より沙市に赴く。
正月二十日　陰天。重慶本部岩彦，沙市永瀧久吉の信到る。
正月二十一日　承思来る。
正月二十二日　健晴。上海林正則の信到る。下午緒方来訪。夜藤森来談。共に茶楼に上り小坐，即帰る。

正月二十三日　陰。土曜日。上海林正則，東京齋藤員安，熊本内田行，妹佐久，家大人の信到。佐久より家大人病勢日に加はるの報あり。憂心忡々帰心如矢。熊本家大人並に妹佐久，内田行，上海松倉，林諸氏に復書す。
正月二十四日　陰。上海白岩龍平の信到る。緒方来訪。
正月二十五日　晴。下午楊子荃，其子及び呉直卿を携へ来訪。明和皆亦来訪。本日より興国州に赴くと云ふ。承思来る。
正月二十六日　陰。上海林正則氏より金百二十元を郵送し来る。北京河北純三郎列の信到る。上海林に復信す。沙市永瀧久吉に復信す（上海行沙市公信を投郵す）。重慶加藤義造の信到る。九江の訪事漆西樵来訪。
正月二十七日　楊開甲，其の父親の名片を携へ，黄橘一元を贈り来る。
正月二十八日　薄陰。黎明起床。著述に忙事す。
正月二十九日　雨。上海白岩，沙市桂二氏の信到る。
正月三十日　雨。是日第二十四号並に号外を安原氏に郵致し，且つ帰省届を出す。別に安原氏に私信一封を発す。沙市領事に武漢地図を郵送す。漢報是日を以て休刊す。
正月三十一日　雨。沙市領事館並に郵便局上山良吉の信到る。緒方二三来訪。

明治三十年二月一日起（六月二十七日止）
日記

二月初一日　陰天。是日沙市領事館より依頼の書信を上海領事館に転致す。上海林氏，金五拾一元を郵送し来る。林，勝木，井上三氏に致すの書信を工部より郵寄す。是日清暦臘月大晦日たり。夜東肥洋行に至り会食す。十二時帰る。
二月二日　晴。終日在家。清暦元旦なるを以て名刺を知人に分送し道賀す。是日より清国郵政局開弁。
二月三日　朝雪，少時快晴。上海松倉，白岩二氏の信到る。緒方，藤森二子来訪。
二月四日　晴天。午前上海白岩，沙市永瀧二氏に致書並に永瀧に武漢地図を郵送す。武昌蕭家巷に楊子荃子を訪ひ新年を賀す。中食後辞帰。後湖に到り一玩。
二月五日　晴天。朝李泉渓来訪。下午楊子荃，羅進夫来りて正を賀す。備酒饌款待子荃送別の詩数章を贈る。沙市郵便局上山の頼信を郵政局より発送，並に之を上山に報知す。
二月六日　晴天。午前周衡斎翁及び呉直卿来りて正を賀す。夜藤森来談。
二月七日　微雪。是日漢報発刊。
二月八日　微雪。
二月九日　陰。晩東肥洋行に至り談ず。
二月十日　晴天。小越平隆上海より来着。四川に旅行すと云ふ。東京鳥居赫雄，中西正樹，上海岡幸七郎の信到る。重慶加藤義造及び本部二氏並に廖鏡清に寄するの書を作り，小越平隆に托す。上海白岩，林二氏に致書す。
二月十一日　健晴。午前北越，藤森，楊開甲等前後来訪。下午胡藎臣来訪。之に洋饌を饗す。談話時を移して去る。晩緒方，小越来る。共に出て江干に散歩す。
二月十二日　晴天。午前李泉渓来訪。北京井手素行の信到る。直に之に復す。
二月十三日　陰天。晩小越来訪。
二月十四日　雨天。午前平山氏清，橘三郎二生来着。上海古城，松倉，高道，白岩，林正則の信到る。前田彪，勝木恒喜，白岩龍平，高木正雄の信又到。夜東肥洋行に至り談ず。
二月十五日　陰天。

二月十六日　陰天。下午上海林正則の信到る。予の帰国に付き東京より電報到来せりと云ふ。晩武昌楊子荃より蘇糖一封，其他二二品を贈り来る。夜雪。

二月十七日　陰天。是日上海白岩，古城，林に致書し，熊本内田行，家大人に発信，帰国を報ず。平山来談。下午東肥に至り平山をして武漢の風景を写真せしむ。晩餐後帰る。台湾尾上正連の信来着。

二月十八日　陰。夜雪。東京中西，鳥居，京都根津一，台湾佐野，高橋，平野，荒賀，尾上等に致すの書を作る。別に河南光州胡氏に寄するの信を認む。夜緒方来訪。大雪。

二月十九日　健晴。夜来の雪地を埋むる二寸許。

二月二十日　朝晴。午陰。午前七時江を渡りて武昌に至り周衡斎を訪ひ茶談。片刻共に出て李泉渓を双柏廟に敲き小談。辞別，胡藎臣を候補街に訪ひ，辞行途上轎に乗じ楊子荃を保安門内の蕭家巷に訪ふ。在らず，待つ少時帰来。郭厚卿亦来会。談話時を移して辞し帰る。是日熊本妹よりの信到る。家大人の病気頗急なりと云ふ。外に内田行，田鍋安之助，台湾荒賀直順の信到る。桂齊之氏沙市より帰来。河南胡氏に致す第三号書を藎臣に托送す。

二月二十一日　陰天。日曜日。早朝河南光州胡翁より五百の長程使者を派し，特に火腿一個，塩鶏二支，鶏卵百個，貢麺十斤を贈り来る。予の帰国に餞する也。外に要信一封到る。即ち雑貨数点を購ひ，蔵して一箱と為し，之に添するに第四号信を以てし来价に嘱して河南に贈致す。威海衛領事徳丸策三の信到る。夜桂氏の招邀に一品香楼に赴く。宴散じて東肥洋行に至り談ず。

二月二十二日　健晴。午前武昌胡藎臣の信到る。余に二千金を借らんと請ふ。力足らざるを以て之を辞す。李泉渓，周衡斎前後来訪。余の行を送り，各餞するに土宜を以てす。金石泉，官星堦亦た餞するに土宜を以てす。夜東肥洋行の招邀に赴く。予の帰国を餞する也。桂，緒方，小越，藤森，平山，橘，佐無田，柳原及び予の九人也。十時散ず。

二月二十三日　健晴。李泉渓来りて送る。下午楊子荃氏来りて行を送り並に対聯一副を贈る。呉直卿，郭厚卿各送詩あり。晩食後漢報館を出で，怡和洋行汽船瑞和号の官艙に搭ず。楊，官，桂，緒方，藤森，平山，橘，柳原，小越，佐無田諸氏来りて行を送り，八時辞帰。九時十分開船。

二月二十四日　朝雨。午前九時半九江に着す。廬山半峯積雪皚然如載白帽。磁器数点を購ふ。午前零時二十分九江開船。四時晩餐。夜過安慶。

二月二十五日　健晴。午前五時半蕪湖に達す。七時半開船，十一時南京を過ぐ。南琛外一隻の軍艦碇泊す。三時半鎮江に達す。五時半開船。天朗気清。京口の江山を縦観するを得たり。是夜船上梁，呉，曹諸人と談ず。皆有志之士也。

二月二十六日　陰天。下午一時船上海に達す。直に熊本屋に投ず。古城，松倉，勝木，白岩諸氏に会す。領事館に至り復命書清国大勢之観察一部を（第二十五号）東京安原氏に郵送す。外に家大人，内田行，東京中西，鳥居，台湾佐野諸氏に発信す。外根津一氏に一封を発す。東京佐々友房，鳥居赫雄，安原金次，熊本妹佐久，内田行，米原繁蔵の信到る。晩林正則を訪ふ。小談，帰る。夜白岩，古城，高道，松倉諸氏と会談す。勝木恒喜今晩上船，明日を以て帰国す。夜之を横浜丸に送る。岡，那部，多田，荒井列来訪。

二月二十七日　晴。朝白岩来談。下午近藤来訪。夜松倉，多田，高道，古城，白岩等と会食す。

二月二十八日　晴。午前林正則を訪ひ談話。時を移し中食して去る。広東路の新利洋行に至り，名士李盛鐸，羅誠伯二人と興亜の大事を議す。李は江西の名家にして榜眼出身にして翰林の名流なり。容貞頗偉，品学兼優，天下に志有り。夜時務報記者梁啓超，麦某等と四馬路一品香に会飲し，東方の時事を暢論し，九時帰る。梁本年二十四才弱冠挙人に挙げられ学術文章一世に冠たり。夜雨。

李，羅諸人の言に曰く，清政府が露国に依頼せしは国民の要望に副する者に非ず。実に廟堂一二権臣の妄為に出でたる者にして，即ち皇太后の意を奉承せる者なり。天子と皇太后との不和は確実にして疑ふべき無し。現に清国は上に在る者全く腐□し，下に居る者は無識蠢愚，言ふに足らず。只

だ中間の士子真に事を為すに足る。他日天下を動す者は必ず此の種族也。日清聯合の事も在野の志士は皆之を熱望せり。故に両国政府の方針如何に係はらず志士互に相提携するは目今の急務也。梁の言に曰く，中国の天下は満人之を破壊せり。国運を挽回せんと欲せば満人の羈袢を脱せざる可からず云々。

三月初一日　雨天。朝松倉氏を乙末会本部に訪ひ中食後帰る。夜白岩，古城，松倉，岡諸氏と会食す。

三月二日　半晴。午後山崎桂を領事館に訪ひ，小談。去て乙末会に至り，三時帰る。漢口緒方，桂，柳原列に発信。佐々友房氏に一書を認め，清国大勢観察草稿一册を合せて松倉氏に托し，佐々氏来着の日に交付せしむ。夜古城，那部，海津，高道来訪。高道は孟買，転任の事を命ぜられたりと云ふ。時務報館汪康年進士より特に招邀せらる事を以て之を辞す。

三月三日　晴天。午前新和洋行に至り姚賦秋を訪ひ，中食後帰る。下午郡島忠二郎来訪。昨日着せりと云ふ。橋元生亦来り敲く。山崎桂来談，之を留めて晩餐す。白岩，松倉，岡来会。

三月四日　晴天。午前橋元，高木二生来談。下午姚賦秋，白岩，松倉，郡島，高道等来談。之を留て会食す。

三月五日　晴天。午前沈文藻来りて別を叙す。下午時務報館に至り，汪康年進士を見る。浙江銭塘人，一代の高士なり。談論時を移して帰る。三時半林正則を訪ひ，小談帰る。下午林を訪。夜松倉，岡，多田，白岩，近藤，古城諸氏を招飲す。

三月六日　雨天。下午零時熊本屋を出で，西京丸に搭ず。古城，松倉，白岩，姚，那部，山崎，□本，林，多田，岡等知人来りて行を送る。零時半開船。高道竹雄同室たり。汪康年進士来りて行を送る。前田彪福州より来り，船上に相見交談片刻，即ち別る。白岩，古城等送詩あり。

三月七日　晴。

三月八日　晴。午前七時長崎に入る。八時半土佐屋に着す。熊本佐々友房及び家大人に電報す。東京安原金次氏に長崎着を報じ，上海松倉，白岩に一信を発す。午後三時半第三崇敬丸に搭じ，三角に向ふ。松浦有志太郎等十余人同室たり。十一時三角に達す。風雨大に至り，衣帽，行李尽く沾ふ。一時半小食，就寝。

三月九日　晴天。午前十時三角発。下午二時宇土に帰る。門に入りて始て家君二月二十八日に於て逝去の事を聞き失望落胆，並び至り満腔の悲傷，言状す可からず。只だ飲泣するのみ。佐々友房氏より使者を以て熊本会合を促し来るも，之を辞す。城山家君の塋墳に謁す。此の時感懐喩ふるに物無し。帰途先妣の墓に謁して帰る。中島裁之，宗方儀吉以下来訪。

三月十日　晴。早起城山の先塋を謁す。矢島篤宜来訪。午時内田岳父来問。下午井口，勝木来訪。是日上海，漢口，台湾，東京，京都，北京の各知人二十余名に家君の死を報ず。外に佐々友房氏に発信。

三月十一日　晴。午前佐々友房氏の電報到る。下午山田珠一来訪。弟亀雄台湾よりの信到る。直に之に復信，帰国を止む。熊本勝木の信到る。東京白須貞に復書す。東京安原金次の信到る。直に之に復す。

三月十二日　雨天。午前九時半安達謙造来訪。停車場に至り佐々友房氏に車中に会し其の洋行を送る。同車松橋に至り要事二三を談ず。山田珠一に長崎十八銀行にて為替券切換を托す。十二時半帰家。岡本源次の信到る。東京中西正樹の電報到。

三月十三日　晴。東京中西，福岡高道に発信す。熊本井芹徳平，東京鳥居赫雄の信到る。亀雄，中西に発信す。

三月十四日　雨天。午前米原繁蔵，岡本源次，葉室堪純，松倉親敬，村松岩彦，浅井，矢島，玉崎，上羽重，宮原等来訪。大江内田岳母，友義，外一氏来訪。

三月十五日　晴。柳原又熊の弟並に緒方三八氏等来吊。大坂深水十八，鳥居赫雄の信到る。

三月十六日　朝雨，午晴。午前内田友行氏来訪。熊本家屋の事略ぼ決定せりと云ふ。根津一の吊状到

る。香火料一円を封送し来る。成田錬之助の吊状亦到る。
三月十七日　晴天。北京井手三郎，呉凌秋，漢口柳原，桂，上海古城，岡，松倉，前田諸氏の吊詞到る。下午篠原来訪，台湾番布一反を贈る。
三月十八日　陰。午後雨。二番汽車にて行を携へ熊本に至り，内田岳父を訪ふ。中食後千反畑の家屋を一覧し，去て合資会社に至り三池，勝木二氏を訪ひ，第九銀行より金八百四十円を受取り，又た内田氏に帰り晩餐後宇土に帰る。東京海軍省より金二百円（四, 五, 二ヶ月分）並に伊集院五郎，安原両氏より香花料三円を送り来る。田鍋安之助，白岩龍平二氏より香花料贈り来る。東京斎藤，堤，熊本高木等の信到る。
三月十九日　雨天。東京伊集院，安原二氏に復書し，並に二百円の領収証を送る。白岩，田鍋，根津諸氏に復書す。
三月二十日　晴。福岡郡島忠次郎の信到る。
三月二十一日　漢口桂斎之，上海近藤丈太郎の信到る。宮原，藤原，矢嶋及び矢野諸房等来訪。
三月二十二日　晴。下午内君を携へ曲江の浜に散歩す。東京鳥居より詩稿一册を贈り来る。
三月二十三日　晴。熊本内田友行氏及び山田，高木に発信す。下午松田満雄来訪。晩餐後帰去。
三月二十四日　陰。上海佐々友房，松倉，河本，多田，漢口柳原，楊子荃等の信到る。尾越辰雄来訪。東京中西正樹の信到る。
三月二十五日　風雨。午前内田友義氏来訪。台湾古川権九郎の信到る。東京狩野直記の信到る。
三月二十六日　雨天。山田珠一の信到る。夜白岩龍平の信到る。林田晴義来訪。
三月二十七日　陰。是日先人の旧知法華寺に於て先人の追吊会を行ふ。贈るに素饌を以てし，自ら行て之に礼す。
三月二十八日　晴。東京林市蔵の信到る。
三月二十九日　雨。松倉親敬来訪。
三月三十日　朝雨，午晴。井口，矢野二生来訪。東京橋元裕蔵の信到る。津野一雄の信到る。
三月三十一日　晴天。二番列車より行を携へ大江に到り，終列車にて宇土に帰る。是日九州日々新聞社に山田珠一，高木正雄を訪ふ。上海佐々友房，松倉善家，岡幸七郎，漢口緒方二三の信到る。
四月一日　雨天。東京佐野直喜の信到る。是日桜花を西陵に看る。
四月二日　風雨。上海松倉に復信す。上海古城貞吉の信到る。直に之に復す。東京佐野直記，台湾高橋謙，中島真雄，津野一雄に発信す。
四月三日　　天。是日先人の三十五日法会を執行し，親戚故旧を招邀し素饌を饗す。台湾奥村金太郎の信到る。松田満雄来訪。
四月四日　晴天。午前志水元吾，井上平蔵来訪，之を留て中饌す。下午二時辞帰。
四月五日　晴。八時家を挙て光園寺に遊ぶ。少時遊玩の地，今昔の感殊に深し。古詩一篇を廟柱に題す。午時行厨を開け之を吃す。花下松陰を徜徉し，下午二時帰る。深水十八大坂より帰り来訪。塘林虎五郎亦来問せりと云ふ。晡時塘林貧児寮生徒三名を携て来訪。談話時を移して帰る。上海姚賦秋より詩数首，筆一枚を贈り来る。
四月六日　雨天。内田友行氏の信到る。東京中西正樹，熊本深水十八に発信す。下午漢口柳原又熊，北京井手素行，梶川重太郎，香月楼外，上海松倉，林正則，桂斎之等の信到る。夜門司より亀井英三郎の信到る。明日熊本に来着すと云ふ。
四月七日　晴天。下午安達謙造来り，別を告ぐ。明日より東上すと云ふ。亀井英三郎に熊本に発信す。
四月八日　雨。東京佐野直喜，鳥居赫雄，台湾岡次郎，林田道利の信到る。
四月九日　晴天。亀井英三郎の信到る。
四月十日　晴。白岩龍平の信到る。

四月十一日　晴。午前亀井英三郎，岡本源次，葉室堪純来訪，之を留て中餐す。内田友義，同信二氏亦来訪。井手理七郎亦来訪。
四月十二日　晴天。
四月十三日　晴。午前山田珠一，藤本親信来訪，之を留て中餐す。上海松倉親敬，漢口橘三郎，柳原又熊，胡薦青，大坂金島文四郎の信到る。
四月十四日　晴。下午奥村金太郎，林田晴義二氏来訪。奥村は昨日台湾より帰来せる者也。
四月十五日　風雨。台湾鳳山山内嵓，大坂深水十八の信到る。
四月十六日　晴。台湾荒賀直順，尾上正連の吊詞到る。東京海軍省の月額送金並に台湾山内嵓，平野二郎，本島，藤岡列より香典として金九円を郵送し来る。
四月十七日　陰天。台湾山内列並に東京白須貞に発信す。是日亡父君の四十九日たり。須磨田鍋安之助の信到る。
四月十八日　雨天。下午宇土各坊を巡り忌明の礼辞を述ぶ。東京白岩龍平に復信し，佐々より野村遞信大臣宛の添書を封送す。夜川野廉来談。
四月十九日　雨。下午奥村金太郎を訪ひ小談，帰る。夜川野廉の招邀に赴く。横田安止来会。寛談十時半辞帰。
四月二十日　健晴。三番列車にて熊本に赴く。大江にて中食。北千反町の宅地を一覧し，去て九州日々新聞社に到り山田，高木を訪ひ，去て合資会社に到り三池，井口等を敲き，晩鰻飯を吃し，会社に宿す。高木正雄来訪。
四月二十一日　陰，夜雨。午前佐々正之を新屋敷町に訪ひ小談。去て大江に帰り，七時の汽車にて宇土に帰る。東京安達謙造，片山敏彦の信到る。
四月二十二日　晴。心気不舒。大坂白岩龍平，台湾高橋謙の信到。
四月二十三日　晴。上海山崎桂に致書。片山身上の事を依頼す。松倉に致書。買物を依嘱す。
四月二十四日　積陰，下午風雨。八時十五分行を伴ひ塩浜に至り田畑若松の家を訪ふ。午食後帰る。途中松橋に下車し，志水元吾を敲く，在らず。小坐の後二時四十分の汽車にて宇土に帰る。東京片山，島田数雄，中西正樹の信到る。
四月二十五日　晴。
四月二十六日　晴。井口忠次郎来訪。
四月二十七日　晴。東京片山敏彦に復書す。熊本に致書，明日曾游会出席を辞す。北京井手三郎，漢口柳原，重慶本部の信到る。
四月二十八日　陰。晩川野廉来訪。旧識諸氏の送別の宴に嵯峨屋に赴く。予の熊本に移転するを餞する也。来会者は細川子爵。川野廉。芦田鶴太，玉崎，太田，岡川，佐方，森田文哉，宮原，矢島の十名也。九時帰る。熊本曾游会山田珠一，高木，藤本列より電報を以て予の出席を促す。返電之を辞す。東京鳥居素川の信到る。
四月二十九日　陰。朝細川子爵邸に至り叙別。去て旧知を歴訪し別を叙す。晩奥村金太郎の招邀に赴く。福州前田彪の信到る（海軍省白須貞に転宅を報知す）。
四月三十日　晴天。是日家具を整頓し，家を挙て熊本に移転す。
五月一日　晴。朝井口，藤本来訪。近隣の数家を歴訪し，転宅の挨拶を為す。午前木村弦雄氏を訪ひ，談話時を移し，去て西川，山田，浅山諸氏及び済々黌に内藤，野田，岡本，池邊外数氏を見る。合資会社に至り，福永銀行より金六十円を受取り，午時帰宅。晩松田満雄，岡本源次，葉室諶純，毛利篤来談。小飲後帰る。
五月二日　雨天。日曜日。下午井口生来訪。五時済々黌岡本，葉室列の招邀に赴く。毛利篤来会。快談十時に至て帰る。土屋員安岡山よりの信到る。土屋本姓は齊藤新に土屋氏に入贅し，近々津山中学校

長に任ぜられし者也。
五月三日　晴。白岩龍平大坂の信到。池邊源太郎来訪。
五月四日　晴。上海松倉，東京片山の信到る。片山に復書す。夜葉室諶純，藤原由雄来談。
五月五日　晴。北京井手三郎，上海古城，宇土管の信到る。北京井手，漢口柳原に致書。須磨田鍋，大坂白岩に復書す。松田来訪。
五月六日　半晴。午前井口忠次郎来りて別を告ぐ。本日より上海に赴くと云ふ。合資会社に至り，井口の行を送る。漢口緒方，藤森に致すの信書を依托す。深水継雄宅に至り，昨夜火災の見舞を為す。帰途鎮西館に山田，安達を訪ひ，午時帰る。台湾高橋謙の信到る。下午葉室，池畑来訪。葉室と共に米原繁蔵を訪ふ，在らず。去て松田満雄を建部に敲く。晩餐後帰る。途中再び米原を訪ふ。閑談時を移して辞帰。夜風雨。
五月七日　朝雨，午晴。下午大江に至り内田岳父を訪ふ。三時帰る。
五月八日　晴。下午葉室の寓に岡本，永野，池邊等と会し，鶏を割て食ふ。八時帰る。
五月九日　晴。晩米原，矢島，奥村金来訪，之を留て晩餐す。
五月十日　晴天。上海工藤常三郎，大坂白岩龍平の信到る。
五月十一日　雨。
五月十二日　葉室諶純来訪。
五月十三日　晴。浅山知定，松田満雄二氏前後来訪。
五月十四日　晴天。朝山田九郎来訪，東次郎昨夜台湾より来り，余に会見を求むるの意を伝ふ。即ち本夕相会するを約す。牧相愛来訪。東京安原金次に発信。上海松倉より来信。北京井手氏より蜜棗一箱を贈り来る。東次郎，山田九郎来訪。快談三更に至り帰る。
五月十五日　雨天。午前東次郎を通町塗師屋に訪ひ小談。去て東肥会社に至り中餐後帰る。
五月十六日　晴天。日曜日。二十七，八年戦役に継ぎ台湾に出張し軍務に服し，功績少なからざるの故を以て賞勲局より金二十円を下賜せらる。岡本，葉室，矢島来訪。夜大江に至り，九時半帰る。
五月十七日　晴。東京片山敏彦，白岩龍平，須摩田鍋安之助の信到る。
五月十八日　陰。夜米原繁蔵を訪ひ小談，帰。
五月十九日　晴。松田満雄来訪。近日中清国に航するに付き，予の添書を乞ふ。即ち漢陽馮敬安，武昌楊子荃二氏への信並に柳原又熊宛の一封を托す。岡本源次来り，明後日済々黌にて一場の談話を為さん事を請ふ。
五月二十日　陰。台湾高橋謙の信到る。北御門松二郎来談。
五月二十一日　晴。済々黌の恩賜金紀念会の招邀に応じ出席。生徒，職員に向て一場の談話を為し，下午五時鎮西館の同黌祝宴に赴き，十時帰る。北京井手素行の信到る。
五月二十二日　晴。午前東肥会社に至り，福永銀行より金四十円を受取て帰る。葉室，篠原来訪。白岩龍平の信到る。東京白須に致書。晩米原と岡本源次を訪ひ，十時帰る。内藤儀十郎，井芹経平来訪。
五月二十三日　陰天。午後二時県知事大浦兼武を訪ひ小談，帰る。晩会食す。夜雨。
五月二十四日　晴。東京鳥居，片山に覆書す。
五月二十五日　晴。葉室来訪。軍令部四，五二ヶ月の手当三十円送り来る。
五月二十六日　晴。午前勝木来訪。漢口柳原より河南光州梁啓元，重慶廖鏡清の書信を平山氏清に托し送り来る。柳原，胡，上海井口，松倉の信到る。漢報館の官星堦病死せりと云ふ。上海松倉より織物，点心，鴨卵等を贈り来る。晩出て東肥洋行に至り平山列を訪ふ。大坂中島真雄の信到る。漢口柳原に発信。
五月二十七日　陰。大坂中島真雄に復書す。下午大坂白岩龍平の電報到る。来月二三日頃熊本に着すと云ふ。夜葉室，米原，武藤虎太来談。十一時帰。雨。

五月二十八日　雨天。葉室来談。
五月二十九日　晴。晩米原を訪ひ小談，帰る。
五月三十日　晴。東京片山，鳥居の信及び中島新一の信到る。鎮西館の寄附金残額四十円の中五円を給す。
五月三十一日　晴。東肥合資会社に至り，人に托し郵便為替を受取る。藤本，勝木を誘ひ，鰻飯を食ふ。夜井芹経平，西川良樹前後来訪。
六月一日　午前東肥合資会社に至り人に托し賞勲局よりの賜金弐十元を受取り，帰途九州日々新聞社に至り浅山，山田諸人と談じ，四時帰る。夜大江に至り，十時帰家。
六月二日　晴。片山敏彦の弟来訪。橋元祐蔵来訪。
六月三日　午後四時白岩龍平来着。晩餐後白岩と東肥会社に至り，九時帰。
六月四日　陰。午前八時白岩上海に向て去る。夜葉室を訪ふ。毛利，山尾，永野等来会。雨を阻てられ十時帰家。
六月五日　大雨。下午二時鎮西館の旧友会に臨む。会者二十余人。下午八時散ず。
六月六日　晴。下午葉室，塘林前後来談。
六月七日　晴天。是日先君の百日忌辰たり。妹を宇土に遣はして香火を供せしむ。井手三郎天津より信到る。本月十一日長崎に着すと云ふ。中島新一の信到。
六月八日　晴。東京岸田吟香の信到る。下午東肥洋行に至る。松倉善家上海より帰着。四時帰宅。東京片山敏彦の信到。
六月九日　晴。牧相愛来訪。
六月十日　晴天。午前松倉，勝木来訪。中餐を供す。下午共に合資会社に到り，夜九時帰る。葉室来訪。
六月十一日　晴。夜米原繁蔵を訪ひ明日の田原行を約して帰る。
六月十二日　晴天。午前五時米原を誘て池田駅に至り上車。松倉に会し，六時十一分木の葉駅に着し，駅長村松と立談。歩して田原坂上に至り，済々黌生徒一行の来着を待つ。少焉，池邊源太郎，葉室等生徒を引率して到る。池邊特に余輩の為に，七本の柿台場激戦の古址に同伴し丁丑の戦事を談ず。池子は当時此の塁を守りし者，説明，指点，光景宛然睫眉の間に迫り，身砲煙弾雨の中に在るが如く，快殊に甚し。城市郎以下諸氏の墳有り。池邊等一行は生徒と共に吉次，木留に向ひ，予と米原，松倉は木葉駅に折回し，村松岩彦の寓にて中食し，三時半の汽車に搭じ帰熊す。長崎井手三郎，漢口柳原，東京片山の信到る。
六月十三日　雨。宮崎寅蔵，井手三郎の信到る。上海白岩並に井手に覆書。井手は昨日帰郷せりと云ふ。永野金来訪。
六月十四日　雨天。終日在家。夜津田一雄より其の兄の訃を伝へ来る。
六月十五日　陰。午前津野坪井に訪ひ，吊儀を述ぶ。午後松倉来訪。四時半津野の葬儀に赴く。井手，白岩の信到る。漢口柳原に発信。夜済々黌に生徒七人来訪。
六月十六日　晴。晌午井手三郎，松倉，勝木来訪，中餐を饗す。四時葉室来訪。井，葉と出て坪井に至り，井手と唐人町に赴き，十時帰る。山内嵓赴台の途次神戸より致書。
六月十七日　晴。午後井手来訪。晡時帰る。
六月十八日　晴。下午商業学校長東氏来訪。予の臨校を請ふ。片山敏彦東京より帰り来り訪ふ。岡本源次亦来会，晩餐を饗す。齊藤員安津山よりの電報到る。予が上京の期を問ふ。
六月十九日　晴。紫藤猛への吊詞及び井手に致書。齊藤，田鍋に発信。牧子来訪。
六月二十日　晴天。台湾木下賢良に致書。本田生に身上の事を托す。漢口緒方二三に致書。毛利篤来訪。牧相愛茶二包を贈り来る。

六月二十一日　晴。夜葉室と米原繁蔵を訪ひ，九時帰る。
六月二十二日　晴。午午片山敏彦来訪。晡時去る。夜井手，松倉，片山前後来訪。十一時帰る。
六月二十三日　晴。朝東肥会社に至り井手，松倉に会し，片山の招邀に洗馬某亭に赴き洋饌を吃して会社に帰り，井手を誘て新聞社及び木村邦舟翁を訪ひ，去て毛利篤に抵り岡本，葉室等と会し，晩食後帰る。高木正雄，山田珠一来訪。井手終に宿す。
六月二十四日　晴。朝食後井手帰郷里。上海岡幸七郎，須磨田鍋安之助等の信到る。下午熊本商業学校に至り，其の請に応じ日清貿易談を為す。生徒百六十名，松崎市長，佐々虎及び県属二人来聴。終りて茶菓の饗を受け，三時帰宅。井芹，津野等来訪せりと云ふ。
六月二十五日　晴。下午より鎮西館に至り済々黌生の為に一場の清国時事談を為し，帰途岡本の処に至り，九時帰る。土屋員安の信到る。
六月二十六日　晴。午前第九銀行，福永銀行より金員を受取り，十一時帰る。永原虎雄来訪。共に出て津野一雄の招邀に赴き，八時帰る。白須貞の信到る。
六月二十七日　晴。宮崎寅蔵の信到る。山田九郎来訪。午前東肥会社に至り，下午鎮西館の同窓会に赴き，六時帰宅。井手三郎来宿。上海桂斎之に致書。

明治三十年六月二十八日起
日乗

六月二十八日　陰。朝佐々干城，護城綱雄来訪。八時井手氏と池田駅に至り二番列車より上京の途に就く。池邊源太郎，牧，平山等来り送る。下午三時半門司に達し，石田に投ず。晩食後尾の道行吉野川丸の上等室に搭ず。五時半開船。
六月二十九日　陰。午前六時半尾の道に達す。濱吉旅館に投じ，入浴後朝食を了はり，八時十七分の汽車に乗じ，午後五時須磨駅に着す。田鍋安之助来迎。晩食後井，田二氏と浜海に散策し，敦盛の墓に展し，青松白沙の間を彷徉し，微雨を冒して帰寓。
六月三十日　雨。午前八時十五分田鍋に別れ上車。神戸に至り，午前十時再び汽車に乗じ，十二時半京都に達し，縄手三条の小川亭に投ず。午後雨を冒して高見廣川翁を紫野大徳寺に訪ひ，閑談時を移して帰る。成田錬之助来訪。夜十一時中島真雄大坂より来訪。談話深更に及び就寝。
七月一日　雨。午後成田来訪。四時中島，井手二氏と麩屋町の八新亭に至り，鴨水の鮮を割て飲む。七時帰寓。八時中島に別れ，七条に至り八時四五分の汽車に搭ず。
七月二日　雨。午後三時十九分新橋着。四時半神田連雀町に佐々木に投ず。夜鳥居赫雄来談。
七月三日　陰。午前海軍省に至り，伊東軍令部長，伊集院，河原両大佐及び安原少佐以下諸人に面し，談話時を移て帰る。午後菊地謙譲，中西正樹，島田数雄等来訪。
七月四日　晴。午前八時上車。麻布竜土町に至り安原氏を敲き，寛話時を移し，帰途牛込赤城神社清風亭に中西を訪ひ，二時帰る。晡時狩野直記，池邊吉太郎，鳥居，小笠原等来訪。晩池邊の招邀に不忍池中の湖心亭に赴き，飲啖時を移して帰る。高橋謙の信豊前より到る。
七月五日　晴天。高橋に復書。外に家信一封を発す。午前中西正樹来訪。下午牛込に堤敬を訪ひ，去て鳥居素川を敲き，晩食後帰る。明朝八時西郷氏より会見の照会あり。
七月六日　晴天。午前七時半上車。西郷氏の官宅に至り会見す。談話時を移し，去て海軍省に至り，十時帰る。下午亀井英三郎来訪。夜田野生来訪。
七月七日　雨。終日在寓。福州前島に致書。福報買収の件に付き之が調査を為さしむ。
七月八日　雨。朝上車。霞ヶ関に至り小村外務次官を訪ひ，対清事業上に付き商量を遂て帰る。途中川上操六氏を敲く，在らず。名刺を留て去る。晩福島安正氏より饗応の案内あり，六時牛込矢来町の同

氏宅に赴き，快談時を移し，九時帰寓。軍令部安原氏より樺山内務大臣の言を伝へ，一両日中其の官邸に於て相見ん事を照会し来る。留守中尾本，鳥居，島田，守田等来訪せりと云ふ。

七月九日　雨。朝当局三四氏を廻訪して帰る。下午新橋，中西，黒崎等来訪。夜鳥居，尾本来訪。

七月十日　陰。午前八時川上中将を麹町に訪ひ二三の要事を商量し，十一時帰寓。堤敬太郎，中西正樹等来訪。宇都宮太郎の信到る。家信一封を郵寄す。

七月十一日　陰。日曜日。下午吉田清揚，水谷彬来訪。家信並に漢口柳原及び安慶楊氏の書に接す。漢口柳原に復書し，漢報の件に付き運動の概略を報ず。夜林市蔵来訪。菊地謙譲来り訪ふ。

七月十二日　晴。午前高島陸軍大臣を訪ひ要談を逐げ，去て海軍省に至り，十一時帰る。鳥居，井手二氏と上野公園外の岡野に至り，中食を吃し，谷中初音町の全生院に至り荒尾精の墓に展す。

七月十三日　雨。午前黒崎生来訪。下午白須を訪ひ，去て宇都宮太郎を赤坂仲の町に敲き晩饌の饗を受け，九時帰寓。

七月十四日　雨。午前九時大隈外務大臣を其の官舎に訪ひ，談話時を移して帰る。大隈風采野鄙市井の徒の如し。然れども議論風生識見頗る取る可き者有り。之を要するに畢に大臣の器に非ず。下午白須生来訪。之に晩餐を饗す。

七月十五日　雨。午前岸田吟香を銀座に訪ひ，十時帰る。午後鳥居，伊佐，小山，黒崎諸人来訪。宇都宮太郎の信到る。

七月十六日　雨。午前千葉県警部長丸山重俊来訪。十余年前の旧知なり。湯地丈雄来訪，盛に元寇の始末を談ず。篤志にして熱心なる，真に感ず可きなり。宇都宮に復書し，田鍋に一信を発す。

七月十七日　晴。高橋長秋，丸山重俊二氏来訪。午前高島陸軍大臣を敲き，去て海軍省に至り安原を訪ひ，十二時帰る。一時新納大佐の饗に赴く。三時帰る。國友重章，中西正樹，尾本寿太郎，堤，鳥居，伊佐，小笠原，島田，湯地，伊東正基等前後来り訪ふ。之を留て晩餐す。漢口緒方二三の信到る。

七月十八日　陰。伊東正基来訪。庄内の年少有為の士也。予に質すに対清の方策を以てす。則ち大要を挙て之に示し，尚ほ一年余の修養を積ましむ。湯地氏の嫡子某来り。余が為に撮影す。下午守田愿来訪。別後相見ざる十余年，之を留て晩餐を饗す。島田数雄亦来会。夜池田，鳥居来談。漢口桂齊之の電報到り，一事件を依頼し来る。守田愿，武田賢三発狂の事に付き予に出資救済の道を謀る。即ち東京及び熊本の両地に於て武田の知人を説き，各の応分の義捐を為さしむるの良法たるを告げ，直に之が部処を定む。

七月十九日　陰天。午前八時半海軍省に至り，六月より十月迄五ヶ月間の手当金五百円を受取て帰る。中西来訪。午後三時四谷坂町に至り，亀井英三郎の饗応を受く。井手，鳥居，堤，池田亦来会。高橋謙，牧相愛，葉室の信到る。清浦司法大臣より予に面会を求め来る。

七月二十日　陰天。午後南金六町に至り歯を療す。夜鳥居来談。是日大江，牧，宇都宮，白須へ発信す。朝堤敬太郎来り，本日より熊本に帰省の事を告げ，別を叙して去る。

七月二十一日　陰天　午後白須，水谷，中西，鳥居，狩野，池田等来訪。留めて共に晩餐す。中西留宿。是日午前八時乃木台湾総督を帝国ホテル内に訪ひ，福州に対する件に付き熟議を為す。総督切に予に勧むるに，台湾に航し現在の形勢を視察し，然る後清国に遊ぶを以てす。乃木氏を辞し芝城山町に清浦司法大臣を訪ひ，談話時を移して帰る。

七月二十二日　晴。太田敬孝，深水，田鍋，葉室，高橋に発信す。正午海軍省に至り外務省と交渉の事を弁ず。晩国友重章の案内に応じ牛込の同氏宅に赴き，晩餐の饗を受け，九時帰る。是日午後熊本の第九銀行に金三百円を為替す（株式会社第三銀行より）。鑄方徳蔵来り訪ふ。

七月二十三日　天。午前七時小村外務次官を訪ひ別を叙し，去て西郷海軍大臣を敲き別を告て，軍司令部に至り伊東中将，伊集院，河原等諸氏に面して帰る。下午四時白須貞を訪ひ，外務省より受取るべ

き一千五百円を銀行為替にて送る事を依頼して帰る。晩伊東正基，鳥居赫雄，池田末雄，鑄方徳蔵，林市蔵，湯地等諸人前後来り訪ふ。

七月二十四日　晴天。是日玉川舟遊の約有り。在京の知友，予が帰県を餞する也。七時四十四分飯田停車場より上車。市ヶ谷にて鳥居，蓑田，亀井，鑄方，池田，狩野，島田，小笠原諸人と会し，国分寺を経て立川駅に下車し，板屋に投じて小憩。一行十一人服を改め多摩川の辺に到り漁者数人を雇て鮎魚を捕へしむ。少焉，数十尾を掌し来る。即ち命じて膾と為し或は之を油炸し，之に加ふるに野蕨山肴を以てし，河畔の涼亭に円座し，且つ飲み且つ啖ひ，清興頻りに動く。食の前後游泳数番を試み，午後四時板屋に帰りて小憩し，四時四十四分立川に於て上車帰途に就き，市ヶ谷，牛込各駅にて諸友に別れ寓所に帰る。時七時也。高嶋義恭，守田愿，白須貞，小野藤太等前後来り訪ふ。中西正樹より海上権力史論一部を贈り来る。漢口桂氏より電報有り。

七月二十五日　晴天。朝國友重章来訪。七時半濱田医学博士を訪ひ体格の検査を受く。濱田曰く，完好にして一点の病機を留めず云々。尾本，鳥居，中西来訪，之を留て中食す。宇都宮，高島に致書。又た漢口桂に電報の答書を発す。山根虎之助，林市蔵来訪。五時半寓所を発し新橋に向ふ。亀井英三郎，尾本寿太郎，鳥居赫雄，林市蔵，黒崎恒次郎，池田末雄，小笠原，伊東正基等来り送る。狩野，井手及び國友老媼同行たり。六時二十分諸友に別れ上車，新橋を発す。

七月二十六日　晴。午後一時京都に達す。狩野，國友二氏此地にて下車す。大坂停車場にて深水十八に邂逅し，車を同ふして赤石駅に到る。田鍋安之助来り迎ふ。相共に車を命じて衝濤館に至り投宿す。晩鯛魚の溌剌たる者を割て下物と為し，団座小酌す。窓前海を隔て淡路島に対す。布帆点々晩風を孕み碧波微茫の間に出没し，風光佳絶心襟為に洗ふが如く，快適言ふ可からず。十一時就寝。

七月二十七日　晴。午前八時四十五分停車場に至り田鍋，深水に別れ車に上る。狩野直喜に会合す。午後二時尾の道を過ぐ。狩野此地にて下車す。四時半広島に達し，大手通三丁目中野方に投宿す。晩山文船亭に至り鮎，鰻を食ふ。此地の名産なり。

七月二十八日　晴。午後三時広島を発し，宇品に至り，中野支店に小休。五時半江洲丸に搭じ宇品を発す。

七月二十九日　晴。午後一時二十分門司に達す。三時汽車に乗じ箱崎駅に到り不老館に投ず。館は松林蓊欝の間に在り，閑邃迷寂涼気人を襲ふ。晩村松忠彦を招て会食す。

七月三十日　晴。午前七時半不老館を辞し，箱崎神社に謁し，停車場に至り，八時三分の汽車に乗ず。午後一時池田駅に着す。車中三沢，合志，宮崎，蓑田等に邂逅す。

七月三十一日　晴。午後堤敬太郎，牧相愛，葉室，篠原等前後来訪。午後武田賢三を救ふ事に就き鎮西館及び九州日々社に至り，浅山，山田諸人と商量して帰る。夜山田珠一来訪。

八月初一日　晴。午前高木正雄，毛利篤，尾藤某，葉室等来訪。晩堤敬太郎を招て会食す。米原来会。漢口桂，東京白須の信到る。東京小村外務次官並に乃木台湾総督に致書す。

八月二日　晴。夜安達謙造来訪。

八月三日　晴。午前木村弦雄氏を訪ひ，去て支那店に至り中食後帰宅。牧相愛，葉室等来訪。漢口緒方二三，柳原又熊，福州前田彪等の信到る。

八月四日　晴。奥村金太郎，白須貞に発信す。堤敬太郎来り別を告ぐ。本日より帰京すと云ふ。午前松倉，勝木，宮崎寅蔵来訪。九時松倉，勝木二子と上車。水前寺伊佐の別荘に赴く。来会する者浅山，池邊，毛利，葉室，深水，伊佐，野田，島田，平山，高木，三宅，狩野，藤本，仝等十九人也。午後八時散し去る。留守中高橋謙，豊前より来訪せしを以て直に人を遣はして之を招く。談話十一時に至て帰る。

八月五日　晴。朝宮崎寅蔵，高橋謙，松田満雄等来訪。共に出て水前寺碧水楼に至り飲む。黄昏高橋，松田を伴て帰る。平山生亦来訪，談話十一時に及んで帰る。井手三郎の信到る。鳥居素川の信到る。

是日午前堤敬太郎東京に帰る。武田賢三への義捐金二十円八十銭を托し守田愿，鳥居赫雄に送致す。
八月六日　晴。午前七時草葉町鳳鳴館に高橋謙を訪ひ，八時其の帰郷を送りて春日駅に至り別る。帰途合資会社に松倉を敲き小談，帰る。晡時宮崎寅蔵来訪，予を通町静養軒に招邀す。談話時を移して別る。宮崎不日清国に航するを以て予の紹介を乞ふ。即ち姚，梁，戴の三名及び古城，白岩，速水等に添書す。是日東京守田愿に致書し，武田に関する義捐金の事を報ず。井手三郎に復書す。
八月七日　晴天。午前宮崎来り，別を告ぐ。十一時寅蔵を池田駅に送り，帰途池邊源太郎を訪ひ小談，帰る。晩津野一雄，永原虎雄来訪。
八月八日　晴。午前東肥会社に至り，午後帰宅。
八月九日　晴。終日在家。午後外務省より漢報保護金の中一千五百円海軍々令部より送致し来る。即刻之が領収証を郵致す。
八月十日　雨天。朝田畑若松来る。午前合資会社に至り，転じて松倉善家の宅に赴き，二時帰る。深水十八大坂より帰来。外務省より送金一千五百円を商業銀行より受取り，其中上京以来の運動費百七十八円を控除し，残額一千三百二十二円を福永銀行に預け，別に私金四百二十円を同銀行に寄存す。晩食後帰宅。小野藤太東京より来訪せりと云ふ。
八月十一日　雨天。午前七時半内人を携へ宇土に至り法華寺，寿量寺，城山の祖塋に展し香燭を供す。陰暦于蘭盆会に属するを以て也。帰途親戚朋友二三家を廻訪し，下午一時の汽車に乗じて帰る。車中緒方二三，井口忠次の清国より帰るに邂逅す。漢口柳原列に致書し，張之洞が漢報に対する運動を阻止するの策を授く。黄昏矢島篤政来訪，新たに台南より帰来せる者なり。晩合資会社に至り緒方列を訪ひ，十時帰る。上海白岩より西湖の藕粉二連を贈り来る。
八月十二日　晴。午前岡本源次来訪。晩小野藤太来談。
八月十三日　晴。午前高木正雄，内藤儀十郎，小野藤太等を歴訪して帰る。池邊源太郎，狩野直記，葉室堪純等前後来訪。晩尾藤来訪。
八月十四日　晴。午後東肥会社に至り髪を理して帰る。上海白岩龍平に発信す。夜毛利篤来談。赤石田鍋，東京白須の信到る。
八月十五日　晴。早朝大江に至り，朝食後帰る。午前奥村，井手二氏来訪，中餐を供す。松田満雄亦来る。午後三時井手，松田と出て鎮西館の同窓会に臨む，会する者六十人。八時帰る。小野藤太来談。
八月十六日　晴天。午前矢島篤政，井手三郎来訪。中食後共に出て岡本を訪ふ。四時帰る。
驟雨大至。是日赤石田鍋安之助に金拾円を送る。
八月十七日　晴。終日在家。
八月十八日　晴。午前井手，奥村，葉室来訪。午後矢島を研屋支店に訪ひ，去て合資会社に至る。八時半辞帰。安原金次の信到る。直に之に復す。宮崎寅蔵長崎より寄書，澳門に直航の事を報ず。
八月十九日　晴。川野廉の信到る。井手三郎の信到る。夜海軍兵学校生齊藤某来談。十一時帰る。
八月二十日　晴。午後研屋支店に小野，矢島を訪ひ，去て合資会社に至り，福永銀行より田鍋に送致せし金十円を受取て帰る。井手，川野に復信す。夜三角中島真雄の電報到る。明日熊本に着すと云ふ。夜半大雨滂沱。
八月二十一日　雨。是日船小屋入浴の筈なりしも中島真雄来熊の電報有りしを以て之を延期す。東京白須貞に発信す。午後二時中島真雄来訪，八重山，琉球を経て帰来せる者也。相共に上車，通町静養軒に至り閑静の一亭に就き晩餐す。清談時を移し，去て合資会社に至り，又た出て中島の旅館明新館に赴き，十時帰る。東京守田愿，鳥居赫雄，明石田鍋安之助の信到る。
八月二十二日　晴。午前八時半内人を携へ池田駅より上車。中島真雄春日より来り会す。正午羽犬塚駅に達す。中島を誘ひ船小屋に至り樋口軒に投ず。晩鶏を割き，鮎を烤り小酌す。
八月二十三日　晴。朝中島真雄京坂に向て去る。武藤虎太来談。

八月二十四日　雨。涼気可人。武藤虎太を玉振館に訪ひ小談，帰る。
八月二十五日　晴雨無定。東京山根虎之助の信を熊本より郵送し来る。東京鳥居赫雄，山根虎之助に発信す。
八月二十六日　雨。矢部川の水大に漲る。
八月二十七日　雨。旅館主人及び浴客某，予の書を乞ふ。書して之に与ふ。
八月二十八日　晴。午前八時三十二分船小屋浴場の旅館樋口軒を辞し，羽犬塚駅に至り三番下り汽車に搭ず。十二時池田着，上車。千反畑の宅に帰る。古城貞吉，白岩龍平，柳原又熊清国よりの信到る。荒賀直順台湾よりの信，中島真雄大坂よりの電報到る。昨夜小窃家を窺ひ，志を得ずして去れりと云ふ。夜山田珠一，緒方二三来談。赤石田鍋安之助，東京白須の信到る。騎兵少尉月本猪介来訪。
八月二十九日　雨天。午前宇土に赴き法華寺，城山の先塋に謁し，五丁目正栄寺に至り旧友会に臨む。是日少時の数学教師たりし森田翁を招邀す。会する者，芦田，川野，米原，玉崎，上村，上村，矢島，宮原，蓑田，浅井，原，草野等十七人也。席上揮毫詩賦の催しあり。夜八時に至て散ず。八時四十分宇土駅にて上車，熊本に帰る。
八月三十日　陰天。午後篠原来り文章の改刪を乞ふ。晩葉室来談。
八月三十一日　晴。漢口柳原より河南光州胡慶煥の信を転送し来る。午後米原を訪ひ，宇土銀行に預け置きし金弐百円を受取り，紺屋町支那店に至り金六十円を福永銀行に預け返る。是日予乙末脱厄の紀念日たり。晩小餐を具し，家中欒団会食す。
九月一日　晴雨無定。午後松倉，平山，金子華来訪。之に晩餐を饗す。
九月二日　晴雨無定。下午津田静一氏を訪ひ，談話時を移し，去て支那店に至る。晩松倉の東道にて緒方と開陽亭に至り洋饌を喫し，九時帰る。深水，護城等来訪せりと云ふ。
九月三日　晴天。午前白岩龍平，井手三郎に致書。午後緒方二三，護城□雄来訪。晩松田満雄来訪。
九月四日　晴天。午前三角本田齊に亡弟の負債中三円を郵便小為替にて返償し，法華寺に一円を郵送し，身延法主布教費の喜捨と為す。大坂中島真雄の信到る。直に復す。東京白須より月額（八月分）十五元を送り来る。之が領収書を発す。夜緒方二三，米原繁三来談。
九月五日　雨。午後上林町五松庵に於て故藤城，武藤，右田三子の招魂祭を挙行す。神官二人来て祭事を掌る。来会する者三子遺族の外，浅山知定，井手三郎，山田珠一，毛利篤，緒方二三，松倉，松田，深水，牧，平山，森，池部，池畑，井口，勝木，余の十六人也。余同氏に代りて祭文を朗読す。午後七時式終り席散ず。支那店に至り，九時半帰る。鳥居赫雄の信到る。
九月六日　晴天。午前井手，深水来訪。井手と木村弦雄翁の病を問ふ。気息奄に朝夕を計らず。憑枕謂て曰く，請て今日を以て永訣とせん，只だ国家の為に益す努力あらん事を祈るのみと。交談少時別を叙して帰る。塘林虎五郎来訪。正午塘林，井手，深水三氏を留て会食す。午後福永銀行より預金九拾円を受取る。
九月七日　晴。午後林立夫来訪。東京安原金次の信到る。是日藤崎神社の祭典を挙行す。
九月八日　晴天。午後齊藤邦雄外一名来訪。海軍省より杭州速水一孔に送る物品を小包にて送り来る。
九月九日　晴。篠原来訪。
九月十日　晴。海軍々令部高橋に小包郵便物の領収証を送る。杭州速水一孔に致書。午前支那店に至り緒方，松倉諸人を訪ひ，午後三時帰る。是日長妹佐久，菊池川口氏との縁談成り結納の贈有り。晩小宴を開く。
九月十一日　晴天。黎明起て藤崎宮の御幸を拝観す。午前支那店に至り松倉を拉して帰る。夜岡本，葉室，進藤等大酔して至り，座談少時にして去る。岡山土屋員安の信到る。
九月十二日　晴雨無定。午前岡本源次来り台湾行の事を告ぐ。午後井芹経平来訪。
九月十三日　陰天。夜雨。午後支那店に至り緒方，松倉等と会し，晩食後帰る。

九月十四日　雨天。高橋謙台北より，宮崎寅蔵東京より，深水大坂よりの信到る。宮崎は澳門，広東各地の情況を視察し事を以て帰朝せるもの也。矢田部某，牧相愛来談。夜真藤義雄，米原繁蔵来談。宮崎に覆書す。

九月十五日　陰。午前支那店に至る。松田亦来会。乃木台湾総督より電報にて予が渡台の期を問ひ来る。直に返電，来月中旬起程を以て答ふ。三時帰宅。篠原，牧来訪。

九月十六日　晴。台湾乃木総督に発信す。神戸白岩龍平の信到る，本月十日上海発にて帰朝せりと云ふ。井手三郎に発信。夜松倉善家来談。

九月十七日　陰雨。午後葉室来談。

九月十八日　晴天。朝中西正樹威海衛よりの信到る。塘林虎五郎来訪。是日長妹佐久，菊池川口氏に嫁す。午後一時岳父母と共に之を伴ふて上車，菊池に至り菊栄館に投じ，夜八時結束成り，妹を送て正観寺河口氏に至る。合□の式終りて宴席開け，十一時半岳父と共に菊栄館に帰る。

九月十九日　晴。朝正観寺に展す。菊池武光の祠堂也。河口氏に至り中食後別を告げ，一行車に乗じて帰途に就く。午後四時千反畑の宅に帰着す。毛利篤来訪。是日長崎より福島安正の電信到る。明後日門司に着すと云ふ。

九月二十日　雨。終日頭痛。朝山田九郎，井手三郎前後来訪。山田は近日より台湾に赴くを以て別を告げ，井手は福島に会合の為め門司に赴けり。午後久留米戸田義男来訪。赤石田鍋安之助の信到る。

九月二十一日　雨。朝木村弦雄翁を吊唁す。十九日黄昏逝去せりと云ふ。支那店に至り，上海林正則に致すの信並に杭州速水一孔へ海軍省よりの送品及び書状一通を勝木恒記の上海に赴くに托送す。夜十時井手三郎門司より帰来，留宿す。

九月二十二日　雨。松田満雄来訪。午後三時井手と木村翁の柩を送りて西岸寺に至る。会葬者甚多し。井手留宿。是日海軍省安原に致書す。

九月二十三日　雨。朝井手と支那店に至り，午後四時帰る。留守中儀我保太郎，矢島篤，内藤儀十郎等来訪せりと云ふ。台湾金包里高橋謙，東京宮崎寅蔵の信到る。夜儀我保太郎来訪。

九月二十四日　雨。

九月二十五日　晴。朝新聞社に至り，宇野に預け金百八十円の中三拾円を受取り，去て唐人町に至り物品数点を購ひ，支那店に入りて小談，帰る。是日台湾に在る亀雄に肌着，毒消丸を小包郵便にて送る。月本少尉来訪。

九月二十六日　雨。正午鎮西館に至り，岡本源次の台湾行を餞別す。会する者七八十人。心気不佳を以て黄昏帰宅。夜狩野直記の東上を送るの詩を賦す。之を本人に贈る。

九月二十七日　雨。午前支那店に至り，晌午松倉，井口を誘い，広町にて鰻飯を喫し，松倉と岡本を訪ひ，晩葉室堪純の宅に会食す。岡本，成田定，真藤義雄等来会。九時帰る。

九月二十八日　陰。漢口柳原又熊，東京井手友喜，篠原由雄の信到る。晡時葉室来訪。

九月二十九日　雨。

九月三十日　晴。午前支那店に至り小談，帰る。井手三郎の信到る。妹マル来る。

十月一日　健晴。是日隈府河口より炭十二俵を贈り来る。

十月二日　快晴。午前東京宮崎寅蔵，守田愿の信到る。是日午後四時妹婿河口介男其の母堂及び内人と共に来る。賓主合して十人筵席を設け相懽す。　時宴散ず。河口氏夫婦留宿。

十月三日　晴。午前井手，緒方，松倉来訪。是日岡本源次，津田静一二氏台湾に渡航す。午前二時河口氏夫婦並に母堂隈府に帰去す。三時支那店に至り井手，緒方，松倉に会し小談，帰寓。

十月四日　半晴。午後台湾高橋謙，佐野直喜に本月下旬渡台の事を報ず。晡時大江に至り出水神社祭典の花火を見，九時帰る。東京白須より月額十五円を郵致し来り。直に之が領収書を発す。

十月五日　雨。午後支那店に至り理髪す。黄昏山田と共に帰る。大坂深水十八より鉄冷鉱泉二瓶を贈り

来る。
十月六日　晴。大坂深水に致書す。午後松倉来訪。夜米原，高木前後来談。
十月七日　陰。
十月八日　晴。午前緒方，松倉，井口来訪，中餐を饗す。
十月九日　晴。午前古庄韜来訪。明日より上京すと云ふ。九時出て支那店に至り，中食後松倉，井口と花園山の頂に上り，四時支那店に帰り，晩食後辞帰。宮崎寅蔵東京よりの信到る。
十月十日　晴天。午前月本生来訪。午後出て山田珠一，葉室諶純を訪ふ，在らず。岡山白岩龍平，東京池田末雄の信到る。東京安原に致書す。
十月十一日　晴天。午前宮原義雄来訪。中食後帰る。午後緒方二三，山田珠一来訪。
十月十二日　朝雨，午晴。午後井手，米原前後来談。漢口柳原又熊の信到る。武昌自強学堂日本語教師に聘せられたりと云ふ。
十月十三日　晴。朝本田，井口来訪。出て支那店に至り，午食後店員一同並に井手，松田等数人と共に撮影し，晩食後帰る。宮崎寅蔵来り待てり。談話時を移して去る。是日外務省の出資に係はる金員中より五百円を福永銀行より受取り，中三百円を緒方二三に貸附す。
十月十四日　陰天。朝威海衛中西正樹，東京池田末雄に復書す。海外旅券一枚海軍省より郵送し来る。旧旅券を軍令部に返納す。台南矢島篤政の信到る。下午緒方，松倉，井口来訪。
十月十五日　晴。午前支那店に至り，午後帰る。中島井手三郎より村祭の酒肴を贈り来る。夜松田満雄来訪。
十月十六日　陰。午前宮崎寅蔵，可兒長一，松倉善家来訪。東京海軍省より十一月より明年正月迄三ヶ月の報酬三百元を送り来る。直に之が領収証を発す。安原金次，白須貞二氏に致書す。晩大江に至り別を告ぐ。留守中毛利，葉室，高木，米原等来訪せりと云ふ。
十月十七日　晴天。島田数雄来談。朝上車，出て支那店に至り第九銀行三百円の為替証書を渡し，藤本より現金三百元に引き換へて帰る。東京安原金次の信到る。午時葉室来訪。内田岳父と広町に至り鰻飯を吃す。台北佐野直喜の信到る。漢口桂，柳原二氏に発信す。少年江崎嘉蔵及び高木，米原等来訪。

明治三十年十月十八日起（台湾往復並に熊本，上海，芝罘，膠州，即墨，上海，漢口，上海，漢口，上海，漢口，上海，熊本）

十月十八日　晴天。朝井手氏結束して到る。九時半両人車を駆て池田駅に趨く。十時二十分の汽車に搭ず。浅山知定，毛利篤，葉室，高木，緒方，松倉，井口，島田諸氏来り送る。元島正礼と同車たり。午後六時半門司に達し，石田屋に投ず。深水十八在焉。九時深水，徳山に向て出発す。
十月十九日　晴天。朝井手，元島二氏と門司の海辺に散策す。寓に帰れば成田定在り。朝鮮に航する者也。高瀬の人池田某来訪。午後二時横濱丸に搭じ，上等室に入る。此地より基隆に至る。船賃二十弐円也。三時出港。海波平穏。
十月二十日　晴。七時出床。五島点々，已に背後に在り。八時右舷二小島を望む。五島の西端にして帝国の版図西に尽くるの頭也。船客男女老幼無慮六七百人。
十月二十一日　微雨。海濤瀬茫，一物の目を遮る者無し。
十月二十二日　雨。六時床を出つれば西南二三の小嶼を望む。波濤漸く高く船体揺盪す。八時半船基隆口に入る。湿雲山嶽を罩め風光模糊として披かず。満船の客争て船を下る。雑踏殊に甚し。十一時小船を僦て税関碼頭に上陸す。風濤甚猛く驟雨頻りに至り，衣袂悉く沾ふ。土人二名を雇ひ基隆街の日新館に投ず。満街泥濘行歩頗る艱む。午後二時半留守宅及び台北佐野直喜に電報を発す。四時高橋謙

突然来り訪ふ。曰く，君渡台の報に接し帰任の期を緩ふし待て今日に至れりと。談話暮に及んで去る。謙現に金包里弁務署長たり。明日を以て任所に帰ると云ふ。惜い哉，有為の一奇才をして僻邑の小吏に駆用し，其の手足を制して大に伸ぶる能はざらしむ。台湾治績の挙がらざる此の一斑を見て全豹を窺ふべき也。晩餐後入浴更衣。燈下詩を賦して自ら遣る。

十月二十三日　晴天。午前九時日新館を出で，九時四十分の汽車に乗じ台北に向ふ。車中乗客蟻集，身を容るるの地無し。角田海軍少将に邂逅す。角田氏曰く，乃木総督数日前より頻りに君の来るを待てりと。十一時十五分台北停車場に達す。佐野直喜，吉田，竹崎，岡田，井原等来り迎ふ。上車，東門佐野，古川二氏の宿舎に投ず。少焉古川氏帰来。午後三時乃木総督を訪ふ。喜迎，一二事を談じ，明朝再会を約して去り，大稲埕六館街に至り，角田少将を敲く。角田酒を出し歓待す。曰く，総督南支那に対する方略に付き総て君の来着を待てり云々。談話時を移し，辞して岡田晋太郎，井原，的場等の寓所に赴き小談。岡田の帯道を以て井深仲卿を訪ふ。喜ぶ事甚し。暮時辞し出つ。岡田予を一旗亭に饗せんとす。腹痛を以て辞し，夜寓所に帰る。古川，佐野，井手等と山口武洪を訪ひ，談時を移して帰る。

十月二十四日　快晴。八時乃木総督を其の官舎に訪ひ，福州に対する件を商量し，去て七里恭三郎を訪ふ，在らず。因て台湾新報社に至り主管木下新三郎に面し，清人陳少白の所在を問ふて帰る。岡田晋太郎，内田英治来り訪ふ。台北弁務署長七里恭来り訪ふ。此人の談に拠れば，台北城内外を通じ戸数六千，人口四万中内地の移住者五千人有りと云ふ。本田嘉種来り訪ふ。本人は此地国語学校の教授たり。晩山口武洪の案内により艨艇街協記酒館に至り支那料理を食ふ。会する者山口，古川，佐野，本田，井手及び予也。帰途本田の寓に至り小談，帰る。熊本留守宅，東京安原，熊本葉室及び江崎生に致すの信を認め，明日佐野直喜の帰県に托せんとす。

十月二十五日　晴天。午前七時佐野直喜を送りて停車場に至る。帰途山田九郎を北門内の酒舗に訪ひ小談，帰る。徳田生来訪。是日鳳山山内嵓，南投荒賀直順，台南岡本源次，矢島篤政，基隆平川常義に発信す。午後稲田初太郎，竹崎，本田嘉種，外国語学校教授某，青木喬等来談。五時谷信近，乃木総督の使として来訪。福州に対する件に付き経費出処に苦み居る旨を告ぐ。予之を郤けて共に深く語らず。晩在台北熊本人の有志者より案内を受け，大稲埕千秋街の一閑地に会合す。松田某，松原平次，吉田某，稲田初，蓑田，吉田敬蔵，外七八人支那料理の饗を受け，八時辞帰。

十月二十六日　晴。朝青木喬来り，明夕清涼館に於て在台北の学友会並に他の有志者相会し，予を招待して一場の談話を聴かん事を望み，予が閑暇の有無を問ふ。即ち之を諾す。井深彦三郎来訪。予と井手と台湾楼に導き中餐を饗す。松本亀太郎北投より来り訪ひ，談話暮に及んで帰る。夜山田九郎来訪。

十月二十七日　晴天。午前七時乃木総督を其の官舎に訪ひ，福州の事に関する用務を商量し，略ぼ要領を得て帰る。帰途角田少将を海軍部に敲き，談話時を移し，入浴して帰寓す。淡水本田清人に発信，之を台北に招く。本日総督との交渉にて福州に毎月百五十円つつ補助の事は決定せしも，再興費の一条総督府に余金無き為め頗る困難なれども如何か法を設け支出する事にせんとて，乃木氏も大に心配せり。是夜在台北学友会員の重なる者，予を大稲埕の清涼館に招待し盛饌を設けて饗応す。会する者谷信近，井深彦三郎，青木喬，岡田晋太郎，甲斐靖，吉原洋三郎，栗村顕三郎，中野熊五郎，七里恭三郎，内田英治，岡本忠平，有泉朝次郎，八木某の十三人にして，御幡雅文，草場謹三郎は事故を以て来らず。此の諸人は皆予の旧知及び後進の士にして，曾て清国に在留せし者也。酒間交も予に向て清国の雑事を問ふ。宴酣にして吟詩する者あり，剣舞する者あり，豪興頻りに動く。後芸妓数人来り絲竹管弦歌舞並び起る。予頗る心に悦びず。蓋し志士を待つの道にあらざれば也。然りと雖も諸氏が予を遇するの情誼は，則ち感ずべきのみ。九時半辞出す。清涼館は台北一等の旗亭にして，淡水河に臨み観音，大屯の諸峯，其の前に当り，近水遠山，墟落点綴，修篁帷の如く其の間に連り，眺望佳絶

の処なり。

十月二十八日　陰天。午後角田少将，井深，岡田等を歴訪して帰る。蓑田甚之允，到津某，七里，青木等来訪。是日午後三時前高等法院長高野孟矩に対し，総督は警察力を用ひ其の官舎を退去せしむ。熊本留守宅に発信す。

十月二十九日　晴。熱気殊に甚し。単衣を纏ふも尚ほ発汗の淋漓たるあり。午前角田氏を海軍部に訪ひ，去て内務部長杉村濬を敲き，福州一件を商量す。杉村見識褊浅鄙俗にして語るも足らず。数語を交へて辞出す。夜七里恭三郎の饗に赴く。白井新太郎来会，談話三更に及んで帰る。是日本田清人，山口判官来訪。四時総督を訪ひ小談，帰る。予の此の地に入てより台湾新報及び日報の両新聞頻りに予が経歴を紀述す。曰く，日清戦役の大功者として天顔に咫尺せし人なり。曰く，東肥の志士として清国通の首領として，将た日清戦役の有功者として世に知られたる宗方氏は横浜丸にて来着したり。曰く，台湾先遊者として台湾割譲の条約文を起草し，第一の諭告文を作りしは宗方氏なり云々。

十月三十日　晴天。午前総督府に出頭す。午後吉島俊明，本田嘉種来訪。三時北門外本願寺に至り，荒尾精の一週忌法会に臨む。式終りて，茶話数刻して散じ，城壁外を散歩し，東門を入りて帰る。郊外秋色充分。山村竹落風趣殊に佳なり。是日法会席上木下賢良，草場謹，御幡雅文，大川愛次郎，日報主筆内藤虎次郎等に面す。会する者三十人許。顧ふに去年二月荒尾と上海に別るるに臨み後来を約せし事少なからず。何ぞ図らん，此の別れ永訣と為りて終天相見る事を得ざるに至らんとは。嗟々，一片の侠骨空く一小孤島に葬り，堂々の志をして曽て其の十一をも施すに及ばざらしむ，可惜也。夜山口武洪を訪ふ，在らず。

十月三十一日　月曜日。晴。七里恭三郎，井原真澄，谷信近，木場秋造，草場謹三郎，木下賢良等来り訪ふ。

十一月一日　微雨。朝角田少将を海軍部に訪ふ。福州一件に付き俄かに異説を立て，因循軽率語るに足らず。袂を払て去り，夜総督乃木氏を敲き即決を促す。氏曰く，確諾，万一府内の機密費欠乏し一時支出し能はざるの場合には予の俸給を以て之に充てんと。決心頗る堅し。因て別を叙して帰る。余渡台以来静かに総督府の情況を観るに紛々擾々統一する所無く，総督の命令も往々にして行はれず。之に加ふるに幕僚属吏互いに相猜疑し排擠已まず。其の弊害の伏する所容易に刷新の功を挙げ難し。中央部已に如此，地方の事推て知るべきのみ。嘆ずべきの甚しきもの也。

十一月二日　晴。予本と是日を以て起程基隆に下り，三日出帆の釜山丸にて帰県の事に決し居たれども，少く事情ありて十日の横浜丸に延期せり。朝谷を大稲埕に訪ひ小談，帰る。途中台北弁務署に七里を訪ひ，十時帰寓。是日熊本留守宅に発信す。中島真雄，松本亀太郎に発信す。

十一月三日　細雨。是日天長聖節たり。早起齋戒遥拝を行ひ，家鴨を割き酒を酌し佳辰を祝す。回顧去年是日河南光州より帰途倉埠の船中聖節を迎へ，今年是日海南の孤島に在り，身世飄蓬感何ぞ堪へん。入台以来昼夜を別たず，寒暖計八十二三度の間を昇降す。単衣を着けて静坐するも尚ほ流汗の背を沾ふすを覚ふ。午後甲斐靖，徳田弘策来訪。夜台中県知事村上義雄氏，予を淡水館に邀へ晩餐を饗応す。酒間時事を快談し，九時帰る。此人素朴精悍能く大体に通ず。台中の治績頗る見る可き者あり。蓋し全島地方官中の巨擘なり。

十一月四日　晴天。入浴理髪。午後本田清人淡水より来訪。其の身上の事を托す。即ち台中県知事村上氏に添書し本人の事を依頼す。

十一月五日　晴。午前井深仲卿来訪。午後七里恭三郎来談。是日総督府より福報再興費五百六十円を領収し，毎月百五十円つつ補助の約成る。夜古川，井手二氏と山口武洪を訪ひ，相携へて本田嘉種を艨艅新起街に訪ひ，茗を吃して帰る。

十一月六日　晴天。午前木村信二来り訪ふ。是日北投松本，東京中島，安原に発信す。午後学友会より予の臨席を求め来る，事を以て辞す。野田正，吉田敬三等来訪。五時より山口武洪の招きにて晩餐を

饗に赴き，八時半帰る。
十一月七日　陰天。日曜日。午前青木喬来訪。
十一月八日　雨天。午前総督府に至り，去て井深を建昌後街に訪ふ。清涼館にて中餐の饗を受く。帰途吉田を訪ふて帰る。夜谷，七里，本田，栗村，岡田等前後来談。七里送別詩一章を贈る。
十一月九日　雨天。是日詰朝起床，行李を収拾し，七時三十分に基隆下り一番汽車に搭ず。井手同行たり。古川権九郎，岡田晋太郎，栗村顕三郎，内田英次，七里恭三郎，野田正，吉田敬三等来り送る。水返脚，七肚の二停車場を過ぎ，九時基隆に達し，日新館に投ず。煙雨溟濛。午後一時井手仙台丸に乗じ福州に向ふ。之を埠頭に送りて別る。台北七里，古川，東京安原に発信す。夜徳田生及び平川常義来訪。平川現に基隆倉庫会社長たり。夜半降雨如覆盆。
十一月十日　雨天。午前徳田生来訪。平川常義書を病院より寄せて別を送る。午後一時暴雨を銜て横浜丸に乗ず。端舟激浪の間に掀蕩し，危険殊に甚し。甲板上の上等室に入る。午後五時開船。怒濤船体を呑吐し動揺定まらず。暈気頻りに催す。
十一月十一日　陰。心気佳ならず。三食皆艙房にて弁じ食堂に出でず。
十一月十二日　海上。
十一月十三日　快晴。早起島嶼の点々たるを望む。甲板上高橋安爾，大庭某，木村某等と談ず。正午を過ぐる半点鐘，船漸く門司に達す。川卯に投じて中食を了はり，熊本留守宅に発電し，午後一時五十分の汽車に乗ず。山田九郎同行たり。夜十時池田駅に達す。直に車を賃して帰る。帰れば則ち内人将に分娩せんとし苦悶堪へざるものの如し。心窃かに無事を祈り，以て鶏鳴に至る。
十一月十四日　快晴。午前一時内人女子を産出す。清子と命名す。朝篠原生来訪。午後鎮西館に浅山氏を訪ひ一二事を談じ，去て支那店に至り松倉，藤本等を敲き，晩餐後帰る。宮崎寅蔵の信到る。
十一月十五日　晴天。午前山田珠一を訪ひ小談，帰る。本田氏来訪。台湾古川権九郎に発信し，鎮西館基本金十円の領収書を送る。妹佐久菊池より帰寧。午後津野一雄を訪ふ，在らず。葉室に抵り小談，帰る。夜米原繁蔵来談。
十一月十六日　雨天。朝林市蔵を安政橋通りに訪ひ，菓子一盒を具して其の母堂の逝去を吊す。福岡に在りて演習視察中の鳥居赫雄に致書す。是日熊本市役所に女子出生の届を為す。夜竹原，内藤，佐々三家に出産の事を報ず。
十一月十七日　晴天。午前宮崎寅蔵の信到る。清国の亡命者孫文（逸仙）近日熊本に潜み来る由を報じ，同人来着せば相携へて余を訪問すべしと云ふ。山田珠一来訪。夜米原を訪ひ，宇土奥村伯母に給与する金四十円を托し，談話時を移して帰る。
十一月十八日　晴天。午前田畑若松夫婦来訪。午後脇山逸馬来り，武田賢三救助の件に付き商量する所あり。夜内藤儀十郎氏来訪。
十一月十九日　晴天。午前支那店に至り松倉，藤本等と鴨を食ふ。林市蔵を訪ひ，談話時を移て帰る。夜津野一雄来訪。岳忠武出師表二巻を借て去る。東京中島真雄の信到る。菊池川口介男来る。
十一月二十日　晴。午前脇山逸馬来訪。京都田鍋安之助，玉名宮崎寅蔵の信到る。孫逸仙宮崎の寓に来着せしに付き，予の来遊を請ふ。孫は清国革命党南方の首領にして，曾て兵を広東に挙げんとし，事敗れて英国に逃れ居たるものなり。
独逸軍艦清国膠州湾を占領し水兵六百名を上陸せしめ，国旗を揚げ祝砲を放ち，同湾守備の清兵二千を放逐したりとの電報あり。
松田満雄来訪。鎮西館安達謙造より明日同志招魂祭の案内状を送り来る。事を以て辞す。午後二時二十分池田より上車。長洲駅に下車し，車を駆りて荒尾村に至り，宮崎寅蔵を訪ふ。清国の亡命人孫文（逸仙）に会見す。孫は昨年九月兵を広州府に挙げんとし，事敗れて英国に遁れ，清国公使館に囚ふる所となりしも，其の国事犯亡命人たるの故を以て英政府にて受取り，其の保護の下に生活し居た

るに，突然本年九月を以て我国に渡来したる者なり。姓名を変じて山中椎と曰ふ。此次予に面会して商量する所有らんと欲し来熊せる者なり。孫今年三十一才，大器に非ずと雖ども才学兼優豪邁果敢にして天下を廓清するの志有り。膝を交へて東方の大事を論じ，鶏鳴に到る。孫喜ぶ事甚し。

十一月二十一日　晴。午前孫等と快談。午後二時別を告げ歩して長洲駅に至り，四時五分の汽車に乗じ，熊本に帰らんとす。偶ま軍隊輸送の為め汽車時間変更し，八時にあらざれば発車せず。車站内に枯坐し待て八時に至り汽車に乗ず。高木正雄の演習地より還るに邂逅す。九時半池田駅に達す。上車，帰る。鳥居赫雄，松田，松倉，米原，葉室等来訪せりと云ふ。東京安原，高橋両人の電報あり。

十一月二十二日　晴。朝鳥居を林市蔵宅に訪ふ，在らず。去りて支那店に至る。途中鳥居，林の花岡山より帰るに出会す。両人に約するに後刻会合を以てし，去て支那店に至り，海軍々令部高橋副官に返電し，旅行差支無きを報ず。松倉と相携て鳥居を敲き帰る。鳥居，林，松倉，小笠原等前後来会。午時四人を伴ふて通町に到り鶏飯を食し，再び鳥，林，松三子を拉して帰る。高木，米原，葉室来訪。五人を留めて晩餐を共にす。六時鳥居の帰京を池田に送る。東京安原より電報あり，二十七日長崎会合を約し来る。松田満雄，佐野直喜の信到る。松田は大坂に赴けり。

十一月二十三日　雨天。午前葉室，毛利来訪。午後出て安達謙造を訪ひ小談，帰る。夜江崎生来訪。是日福州井手三郎，上海勝木恒喜の信到る。

十一月二十四日　雨天。終日在家。行李を整頓す。軍令部木村，神戸安原二氏より電報到る。晩津野一雄来訪。是日東京中島真雄，白岩龍平，台湾高橋謙，威海衛中西正樹，玉名宮崎寅蔵等に発信，渡清を報じ，且つ独逸が膠州湾占領の東方の大局に至大の影響を及ぼす可きを論じ，我党志士の奮励を要すべきを警告せり。鳥居赫雄の信到る。

十一月二十五日　晴天。午前右田喜七郎来り，頻りに保険を勧誘す。予元来如此事を悦ばず。雖然右田に対するの交誼上不得已之を諾す。即ち三十年の養老保険五百円を申込む。大江及び佐々，内藤，済々黌，浅山，新聞社，支那店に至り辞行す。福永銀行の預金中より金百円を受取て帰る。午後五時旧友相集り，予が為に送別会を開く。会する者浅山知定，池邊源太郎，井芹経平，安達謙造，津野一雄，葉室諶純，深水亀齢，真藤義雄，三宅光雄，毛利篤，板井廉男，牧相愛，湯川寛猛，久野丈太郎，松倉善家，藤本親信，米原繁蔵，篠原由雄，高木正雄，永野金十郎の二十人也。十時散帰。

本月十三日独逸軍艦三隻山東膠州湾に進入し，十四日を以て水兵六百人を上陸せしめ，該地駐防の総兵章高元に対し艦隊司令官より十四日午後三時より起りて，二十四時間内に其の駐防兵を女姑労山の外に退却せしめん事を命令し，且つ其の退却の際は兵士は軍銃の外各自の私用品のみを携帯し，他の物品は一切持ち去る事を禁じ，若し以上の命令に服せざるときは直に敵兵と見做し砲撃すべきを厳達せり。是を以て章は其の所部を引率し青島の後面に退きたり。独逸兵は是に於て占領の目的を達し，祝砲を放ち，国旗を揚げしとの電報あり。其の占領は本月一日山東省袞州府に在る羅馬カトリツク教の会堂，賊の為に破ぶられ，宣教師二人殺されたるを以て之が賠償の為なりと伝ふ。又た一説には，独人は膠州を占領し，清廷に向て袞州事件の損害要償として銀六十万両並に軍艦派遣費を要求し，又た地方官を処罰する事，行害者を処刑する事，及び天子の親筆に係はる教会堂の扁額を要求したり。

十一月二十六日　晴天。午前内藤儀十郎，井芹経平，牧相愛，奥村傳来り，別を叙す。午後松倉善家，葉室諶純，尾原亮太郎，江崎嘉蔵等来訪。夜島田数雄，安達謙造来り別る。佐々干城氏の信到る。是日在長崎安原氏と電報往復する，両三回に及ぶ。台湾古川権九郎，京都田鍋安之助に致書す。

十一月二十七日　晴雨無定。予是日を以て家を辞し，剣を杖て渡清の途に上らんとす。午前五時半上車，家門を出つ。内田岳父来り送らる。六時池田発長崎行の汽車に上る。牧相愛，篠原由雄，井口一彦来り送る。午前十時鳥栖に達し長崎行の汽車に換坐す。佐賀，武雄を経て早岐に至り，小汽船に移り海上を航する。三点半鐘の久しき時津の一小碼頭に上陸し，腕車を賃して道之尾に出で，六時二十

分の汽車に乗じ，七時長崎に着し車を駆りて本博多町の土佐屋に投ず。晩食，安原を上野屋に訪ふ。同氏曰く，独逸が膠州湾に占領事件起りてより我外務省は其の占領の目的永久に在るか将た一時に止るかを詳かにし然後之に対する方針を確定せんと欲し，貴君の渡清を煩はし充分の観察を請はん事を希ひ，過日外務大臣西郷海相を訪ひ，頻りに君の出張を望まれんを以て軍令部長も同席して之に賛成を表し，即ち外務，海軍の両大臣及び軍令部長より特に予（安原）に命じて君を長崎に迎へ此の内意を伝へしむ云々。予之を諾す。因て安原氏は明日を以て直に東京に帰り，予が承諾の旨を復命する事となれり。是日安原氏より機密費として四百円を受取る。

十一月二十八日　風雨。午前暗号電報を編成して安氏に交付す。午後安原氏来り送る。三時土佐屋を出で，神戸丸に搭ず。六時開船。風濤頗大。船中土井伊八，梶川重太郎に邂逅す。

十一月二十九日　晴。風濤甚大。

十一月三十日　晴。正午十二時船呉淞口に入り潮を待ち錨泊す。午後三時半進航。五時半上海に達す。車を駆りて東和洋行に投宿す。夜梶川氏と食を共にし快談す。十一時姚賦秋，勝木恒喜等来訪。

〇本日午後四時半上海領事館に達せし電報に拠れば，英国艦艇広東の虎門を占領せりと云ふ。此事英国領事にも電報ありと云ふ。

〇昨晩上海駐劄独逸総領事，運送船リユウモン号にて各種の材料を装載し，各営の用意を為し，膠州湾に向て出発せり。

〇上海に在る西人等は這次膠州の事を以て所謂支那分割の端緒を開きし者となせり。

〇英国の意思は，膠州湾の占領は英の商務に害無きを以て故障を入るるの必要無しとするも，若し山東全省を奄有するか或は三沙湾を占領するが如き有らば決して黙過すべからずと云ふに在り。

十二月一日　陰。午前勝木，佐無田，米良，河本等来訪。米良に托し日本紙幣四百円を銀貨に兌換す。勝木，佐無田を留て中食す。是日午後左の電報を東京に発す。

英国広東の虎門を占領するとの風説あり。又た独逸の膠州湾占領は永久の見込なり。

午後古城貞吉，橋元外二三人来訪。河本生を留て晩餐す。夜河本，梶川二氏と四馬路を散歩し，大東彩利洋行に至り姚賦秋を訪ひ会談。姚と共に朝鮮人成岐運を訪ふ。前の外部大臣なり。予は河南光州人と称して彼に面し，日本に対する感情如何を試む。成頻りに露国を厭忌し日本に依附するを以て長計と為す。談話時を移して帰る。是日午後四時邦服を脱し清服に改む。梶川来談。

十二月二日　晴天。午前勝木を訪ひ，熊本より依托されし漢口行の物品を托送し，熊本留守宅への書信を投函し，勝木，梶川二氏と上車。時務報館に至り古城に面し，汪康年進士に贈る日本刀一柄を托す。土井伊八来訪。午後勝木を訪ふ。適々藤森茂一郎漢口より来着。桂斎之の信到る。日本服二点を明日帰県の佐無田生に托す。是日勝木に金百七十円を貸附す。夜姚賦秋の晩餐会に赴く。朝鮮人成岐運，泳翊閔芸楣，外一人及び余なり。七時半帰る。古城，勝木，藤森，佐無田，米良等来談。半夜東京への報告を作る。

十二月三日　陰天。午前梶川，河本来談。午後東京へ報告を郵送し，外に熊本浅山，宮崎に発信す。工藤常三郎来訪。小田切領事を訪ひ，談話時を移して帰る。

〇露，仏，独合謀，支那分割の意あり。露は東三省直隷を，仏は福建を，独は山東全省を占領せんと伝ふ。

〇独逸の要求中第一，第二，第五の三ヶ条は清国にて其の求に応ぜんとす。已に英，露，仏三国に仲裁を依頼せりとの説あり。

午後工藤常三郎来訪。晩藤森，勝木，佐無田を招き会食す。七時時務報館汪康年進士来訪。予と馬車を同ふし四馬路の某酒楼に上り洋饌を喫し盛に当世の務を論ず。此人支那内に於て別に新国を創立するの意あり。予と殆ど其の見る所を同ふす。快談十時半に至り散ず。

十二月四日　晴天。是日早朝梶川氏江浙交界に游歴す。午後勝木，藤森等を訪ふ。是夜招商局海□，新

楽二船北行の定日なるを以て之に搭ぜんと欲せしに，此の二船は天津封河の期切迫せるを以て芝罘に寄港せずと云ふ。因て已むを得ず明後日の牛荘号に乗ずる事に決す。夜英界に散歩し八時帰る。

十二月五日　雨天。終日在寓。福州井手三郎，前島真の信到る。福報の名称を閩報と改め，予及び井手，前田三人の所有と為し清人黄乃裳を主筆に聘し，近日中より発刊すと云ふ。

十二月六日　半晴。午前河本儀平来訪。午後出て勝木を訪ひ，四時去て河本を敲き暮時帰寓。夜池田，古城，土井，那部来訪。是日熊本留守宅，東京安原に発信す。小田切領事を訪ひ小談，帰る。是夜牛荘号に乗ずる予定なりしも，明夕にあらざれば開かずと云ふ。

十二月七日　晴天。午前六時梶川氏南遊より帰来。熊本宮崎寅蔵の信到る。予是夜牛荘号に搭じ芝罘に赴かんとす。行李を整頓す。暮時宮坂来訪。夜梶川氏と会食す。勝木，藤森等来訪。十時太古洋行の牛荘号に搭ず。明日午時にあらざれば出帆せずと云ふ。不得已東和洋行に折回す。姚賦秋，河本儀平，那部武二来訪。

十二月八日　晴天。午前十一時梶川氏に別れ，太古洋行の牛荘輪船に搭ず。正午開船。

十二月九日　晴。四望汪洋一物の眸に入る無し。夜黒水洋を航す。寒月一輪波浪花を生ず。郷園の情に堪へず，二絶を口占す。

客恨者□又復新，我生豈合老風塵，一輪黒水洋頭月，同照空閨独夜人。

其二

二十年心事奈難灰，湖海飄蓬任去来，只剰吟魂一片在，半篷風雪入煙台。

十二月十日　夜来風雪。激浪船を動かし心気殊に佳ならず。午後二時半船芝罘に達す。直に上陸，領事館に至り，領事田結氏及び船津，高垣，大杉等の諸氏に面す。領事曰く，先日外務大臣より電報にて貴下の此地に来遊有るを報ぜられたり云々。小談，高橋旅館に投ず。林正則，越山等に面す。越山は天津より来り，林は昨日膠州より帰来せるものなり。夜領事より晩餐の案内あり。林，越山及び領事館員一同と之に赴く。十時辞帰す。

十一月十二日　晴。晩高木，船津，大杉等の領事館員を招饗す。

十二月十三日　晴。是日熊本留守宅，上海古城，東京安原に発信す。午後二時林正則上海に帰る。晩領事館高垣氏の晩餐会に赴き，十時帰る。

独逸は膠州湾の占領を本年より起りて向ふ九十九年間を継続するの意あり。已に告示文を発し，此の年限間土地の売買を禁ぜり。

総兵章高元は独人より退去を命ぜられし時，山東巡撫に宛て独人の詭計に陥りしを以て速に数営の兵を送れと打電せしが，其の電報独人の為に獲られ，章を以て敵意有る者と為し，直に拘留して捕虜と為せり。現に滄口に在り。

即墨，膠州一帯の電報局は皆独人の管領に帰し，其の検閲を経るにあらざれば打電を許さずと云ふ。

青島の高武軍中営を以て軍門衙門と称し占領軍司令部を置き，独の艦長蔡なる者巡撫と号して此に駐し，民政を掌る。

十一月二十七日邦人青島に赴く途上独逸の陸戦隊四百五十人許山砲三門を引き来るに会せり。

十一月十七日より十九日迄の間に陸戦隊は舟にて両度膠州に赴き，同地を引き渡すべしと強迫せり。

十二月三日に於ける青島の錨地に在る軍艦は四隻にして，運船二隻あり。青島桟橋の側倉庫あり，諸品を貯蔵す。又た湾内に「コルモラレ号」を望見す。

即墨県には十一月二十八日より独兵舎営す。

膠州，十二月二日三日独兵舎営。

麦園，支那の青島を退きしもの露営の地なり。十一月二十七日独軍より一時間内に退去を命ぜられ

列を乱して退き平度州に走れり。

十二月十四日　陰天。微雪。夜張四来る。之に酒銭二元を与ふ。前年予此地潜伏中奔走の労を取りし者也。

十二月十五日　陰天。朝飛雪紛々。

今回膠州事件の起因たる独逸宣教師二人の殺されたるは山東曹州府鉅野県にして，被害の日は十一月一日夜間なり。山東巡撫李秉衡が未だ此の事件を上奏せざるに，独逸公使は已に湖北漢口滞在中此の電報に接し，直に総理衙門及び自国政府に電報せり。而して独逸駐劄の清国公使許氏よりも此事件を以て総理衙門に電告したり。政府は是に於て事の重大に関するを知り，巡撫李に電命し，速に公を乗りて査弁せしめ，此の事件落着の後を待て新任巡撫張汝梅と交替し，四川総督の任に赴くべきを厳命せり。然るに十一月十三日午後，独逸軍艦三隻突然膠州に進入し，翌十四日早朝出師提督自ら兵を率て上陸し，該地駐劄の総兵章高元に照会し，今より三時間を期し諸般の準備を整へ，四十八時間以内に全軍を挙げて女姑山，労山以外の地に退去を厳命し，一人に付き随身の行李□に銃一挺を携へ去るを許し，若し此の命に遵はざれば直に敵軍と見做し，非常の処分に出づべきを告達せり。是に於て章高元は十一月十五日に其の部下を提げて青島を北に距る四十里，滄口麦園一帯の地に退きしが，同月十九日に至り又た独逸人の為に再び遠隔の地に退去を命ぜられ，限るに一時間を以てせり。此に因て章は直に山東巡撫に発電し，進止を問ひ併せて事変を報じ援軍を請ひしが，其の電報独逸人の獲る所となり，明かに敵意を有する者と為し之を滄口に捕へ，一回旗艦に引致の後再び滄口に護送し，一民屋に禁錮せり。巡撫李秉衡は此の変報に接するや大に驚き，夏辛酉部下の現兵五営及び新たに曹勇五営を招募し，膠州に赴援せしめん事を上奏し，且つ自ら罪を引て処分を請ひ，並に章高元が独逸人の強迫に辟易し，朝命を待たず擅に其の駐在地を退きし，性惰の処置を弾劾したるに，政府は李巡撫に厳訓を下し務めて軽挙暴動を戒められたり。

明後日人あり威海衛に赴くを以て該地に在る中西正樹に致書し，此地に来会を促し，外に高橋藤兵衛に一書を致す。夜田結領事並に船津を領事館に訪ひ，談話時を移して帰る。

上海申報本月七日着の英京電報を転載して曰く，独逸陸続兵を清国に調遣し，四千五百人を以て率と為す云々。該報又曰く，独兵已に膠州に在て開戦したり。曾て俘虜となり居たる章高元を縦て帰去せしめたり。又た曰く，従来独人の使用に係はる禅臣洋行の龍門輪船は今回之を□く，更に汕頭号を雇ふて運送船と為せり。

十二月十六日　晴。是日護照を領事館に請求す。夜煙台山を一周す。寒風如刺。

十二月十七日　晴。船津来訪。領事館より護照を送り来る。旅行用の衣服其他諸品を購ふ。

十二月十八日　晴。漢口桂齊之，福州井手三郎，上海時務報館汪康年に致書す。夜市中を徜徉す。船津来談。

本日午前章高元，青島撤退の兵四営を率ひ当芝罘を距る西方山後八清里の石灰窰に来り。暫く此処に駐紮の計を為す。

登州府駐防の兵三営を進めて平度州に駐紮せしめたりと云ふ。

十二月十九日　晴天。午前少しく雪降る。是日東京安原氏に発信。二, 三件を報告す。熊本留守宅よりの書信到る。夜郵便局長高垣より晩餐の案内あり，越山と共に赴く。九時半帰る。飛雪撩乱，衣帽皆白し。

十二月二十日　大雪粉飛，午後に至て晴る。地上堆白一尺許。船津，高垣来談。

十二月二十一日　晴。高橋藤兵衛威海より帰来。中西正樹の信到る。齊藤力三郎氏威海より来着。予明日を以て膠州湾に赴き形勢を視察せんとす。夜行李を整頓す。

十二月二十二日　微雪。午前四時起床。朝食を吃し従者孔書武を従へ騾轎に乗じ芝罘を発し，膠州湾に向ふ。独逸占領軍の実勢を探知するが為なり。夜鉄口に宿す。

十二月二十三日　晴。三金店に宿す。
十二月二十四日　晴。水溝頭に宿す。
十二月二十五日　霊山に宿す。
十二月二十六日　滄口に宿す。
十二月二十七日　晴。青島に赴き視察を終はり，滄口に帰り宿す。
十二月二十八日　晴。是日を以て帰途に就く。霊山に宿す。
十二月二十九日　晴。水溝頭に宿す。
十二月三十日　晴。沙河に宿す。
十二月三十一日　積陰欲雨。是日明治三十年盡日たり。鉄口に宿し夜を守る。陋屋寒燈感慨四集，除夜詩一首を得たり。

## 3. 明治 31 年 1 月から 12 月の日記

明治 31 年の日記は，前年 10 月 18 日から 31 年 10 月 16 日までの一綴じと，10 月 17 日から 12 月 31 日までの一綴じに含まれている。

前年 11 月下旬にドイツ軍膠州湾を占領したという情報を得て，その状況の視察を命じられて急遽中国現地に飛んでから，12 月末に調査を一段落させて芝罘経由，1 月 14 日に上海に着いた。その後漢口に行き，さらに上海・漢口を往来して 8 月中旬に帰国するまで，ドイツ軍に関する情報を始め，他地での情報を芝罘・上海・漢口から海軍あてに盛んに報告している（後述）。芝罘から向った先の上海では，以前と同様たくさんの日本人に会っているが，そのうちで注目したい人物として，小越平陸と山田良政を挙げておく。小越の名はそれ以前の日記にも登場しているが，山田は 1 月 26 日の日記に初めて記され，「海軍の嘱託にて北支那に赴く者也」とある。小越については同 28 日に芝罘に向けて出発したと書くものの，小越と山田の関係についての記載はない。しかし，4 月 20 日の日記には，中西正樹からの情報として小越，山田等が旅順を偵察中にロシア人に捕まり，しばらくして営口に放逐されたようだと書いている。この辺の事情を確かめようと例えば『東亜先覚志士記伝』下巻の列伝を見ても，小越についてはその頃の動きとして，明治 31 年 4 月より 5 月にかけて「最初の満洲旅行を試み」云々とあるのみであり，山田については宗方の記述に重なる動きに触れる記述はない。山田は，孫文の信頼を得て恵州事件に参加して戦死したことが現在とくに記憶されていると思われるが，それ以前の行動を含めて彼の全体像が今後一層明らかにされる必要があろうし，その際には宗方の日記も一定の情報提供の役割を果たすに違いない。なお，4 月 5 日の日記には，3 月 26 日に清朝政府が旅順・大連を 25 年間ロシアに貸与することにしたとの情報を書いているが，小越・山田のこの時の旅順行きは，その情報に関連した動きであったのであろうか。

2 月初めに漢口に移動してから会っている日本人としては，宇都宮太郎に注目したい。2 月 8 日の日記に「朝宇都宮太郎来訪。陸軍大尉にして事を以て此地に留る者なり」とあり，11 日に宇都宮が帰国の途に就くまで連日会っている。この時何を語り合ったかは不明であるが，それ以前の日記にも登場し，それ以後にも交流が続いているので，2 人の交流の中身を探ることで，陸軍内で中国への関心が高くアジア主義者と称される宇都宮の中国観に，宗方がいかなる影響を与えたかを検討する必要があろう。その際，宇都宮の日記は明治 32 年以前はないこともあって，宗方の日記が役立つことがあると思われる。ところで着いたばかりの漢口で対応に追われたのは，漢報館従業員の入れ替えを行うことであった。2 月 10 日に税関役人が来て，「新聞紙発行に付き漢報と合同を求」め宗方は拒絶したとあり，2 月から 3 月にかけて数人の解雇を実施し，交代補充を行っている。解雇の理由は，主筆の胡の場合は責任感がなく「予の不在中非道の行為有りしを以てなり」と書いているが，これが他の解雇にも共通した理由であったのだろうか。宗方が漢口にいないことが多いからには，中国人従業員の管理が行き届かな

いのは行き届かないことであり，人を換えてうまくいくものでもない。宗方は外務省から前年 1500 円を得て体制の強化を図ろうとしているのであるが，それでもうまくいかない様子はその後で確認することになろう。

3 月中旬井手三郎が漢口に来ると，同月末に上海にもどり，井手が 4 月初に帰国するまで行動を共にしている。その間に『対支回顧録』によると，宗方は井手と相談して「清国人心の大に我が日本に帰向する勢あれば，此際日清両国有志者の，交通機関に供する為め，同文会創立の事を計画し」，宗方は中国に留まって「該国の有史に交渉し」，井手は東京に帰って中西正樹，白岩龍平らと相談して計画を練り，6 月には近衛篤麿を訪ねて賛同を得て創立にこぎつけている。宗方の日記にはこの間の事情を具体的には記していないが，「同文会設立趣意書」（『近衛篤麿日記』付属文書，『東亜同文会史』所収）やそれに付された参加者氏名を見る限り，宗方が日頃つき合っていた漢口楽善堂以来の人物，さらに乙未会に参加している人物が多数おり，宗方の考えが色濃く反映された組織になっていることがわかる。

3 月末に上海に戻ってまた 4 月末に漢口に移るまでのひと月間には，注目すべき動きがいくつかある。一つは，汪康年と何度か会っていることで，4 月 9 日と 11 日の日記には会った際に宗方が語った内容が記されている。宗方は湖広総督張之洞と湖南巡撫陳宝箴は「天下の重望」であるから，大義をもって説得し支援者に取り込むべきだと考え，さらに「清国時事話片」十二則（これが何を指しているか不明）を示しつつ，「時機を窺ひ義兵を挙げて，湖南，湖北，江西，四川，貴州並に広東の一部を連ねて占拠を行ひ，以て一国を建立する」ことを主張している。それに対して汪は調子を合わせたようであるが，具体的にどんな考えを対置したかは記していない。但し，このような会話を交わす相手としてその後も顔を合わせていったのは確かである。なお，4 月 15 日の日記に「我政府が速かに浙江，福建の二省を清国に要求し外国に譲与せずとの言質を取」るべきだとの内容を，海軍省の安原に送ったと書いているが，その報告を見るとまさに汪に語った内容が記されている。その部分を引用すると以下の通りである。「此際務て清国有志家の心を収攬し置き，他年時機到来の節，此の輩を助けて別に一国を開かしめ我国は陰に陽に之を助長し，属国若しくは保護国の位置に置く事後日の為め極て必要と存候。若し福建，浙江の沿海部我有に帰せば，支那の有志を助けて右二省と隣接せる江西より起り，湖南，湖北，貴州，四川の五省を挙げて一新国を開立せしめ度ものに御座候。」宗方が中国人に働きかける真の意図が述べられているようで，まことに興味深い報告である（明治 31 年 4 月 15 日付け報告，『宗方小太郎文書』）。

二つは，4 月初めから中旬まで欧州に向う途中上海に寄った福本日南と何度か会っており，「亜細亜会」創立に関する相談をしたことである。福本は上海に来る前に東京で三宅雪嶺，陸羯南，池辺吉太郎らと会合して，中国問題に関する「具体的団結案が出」ており，まもなく「東亜会」の創設となったが，その創設する以前に上海で宗方ともこの組織に関する話をしたものと思われる。三つに，4 月 22 日に文廷式，江標等が「興亜会」創立の件で宗方との交渉を申し込んできたことがある。ここでいう興亜会は，日本で明治 13（1880）年に結成され，その後アジア協会と改名したが，この年（1898 年）に中国人間に上海アジア協会創設の動きがあり，そのメンバーの多くが宗方と交流があったことから，この時の文廷式らの宗方への働きかけになったものと思われる。

次に，4 月 30 日に漢口に戻ってから 6 月下旬にまた上海に向かうまでに起こった出来事で興味を引くのは，沙市事件である。5 月 10 日の日記に拠れば，その日沙市領事から電報があり，9 日に「匪徒の為に領事館を焼かれ，館員皆恙無し云々」と伝えてきた。翌 11 日にも情報が入り，匪徒とは酒に狂った湖南人が「水手と闘ひ与憤を鼓して」税関，日本領事館その他に火をつけ，「勢甚危険」だった。その後 14 日に沙市領事館員一同が漢口に避難してきて事情が一層分かり，そこで海軍部あての報告書を書いている。それによると，きっかけは税関の門番が一湖南人が放尿したのをとがめて殴打して頭部をけがさせたことに湖南人の仲間が集まって抗議して，少額の治療費を払うだけで追い出されたことか

ら，翌日また大挙して押しかけついには放火するに至った。宜昌から清国兵200名が派遣されたことで，暴動は事件発生3日目には鎮定された。この事件は「宿謀有りて然るにあらず」，「若し今回の事件を藉りて口実となし，不当の要求を試み，独，露，仏，英等諸暴国が清国に対する酷虐なる手段と同轍に出るが如きあらば，却て我が懐柔の本旨に戻り，帝国の威武を失墜する者」だと宗方は主張している（報告第三十四号，『宗方小太郎文書』）。沙市は日清戦争の勝利で日本租界を開くことを清国に認めさせた4地のうちの1地である。従来，重慶，杭州，蘇州3地に開いた日本租界が何れも発展しなかったにもかかわらず，それ以上に発展せずに終わった租界と言われてきた沙市の租界で起こった暴動である。明治29年に租界を開設してわずか2年にして起こったこの事件は，租界の発展を目ざす日本としては出鼻をくじかれるに充分な事件であったに違いない。『外務省警察史』中の「在沙市領事館（未定稿）」には事件に関する永龍久吉領事の報告が数篇載っているが，それらを宗方の日記中のこの事件に関する記載と一緒に読むと，より具体的な日本人の動きがつかめそうである。

6月28日に上海に着いてから7月7日まで滞在した後また漢口に戻り，8月16日まで滞在してまた19日に上海に着き，その後27日に帰国の途に就くが，その間の出来事にはここでは触れない。以後は熊本と東京を往来する形でこの年を過ごすことになり，日中間を巡る多くの出来事への対処を迫られている。それをいくつかに絞って見るならば，以下のようになる。一に，9月24日熊本にいる宗方のもとに東京から電報が届き，「二十一日清国西太后再び万機を摂政するの上諭を発し，同時に皇帝の崩御を発表せり」と伝えてきた。いわゆる戊戌政変といわれる事件に関する情報である。この情報には間違った内容を多く含んでいたのであるが，宗方は熊本在住の井手三郎や佐々友房等と意見交換し，自らの日頃の中国理解を踏まえて東京の海軍々司令部に「支那政変に関する意見書」を書いた。その後，今回の北京政変の詳細を徐々に知るようになり，中西正樹から康有為を日本に保護することに可否を問い合わせてきた時には，それは「対清政略に害有るを説き，宜く之を英人の手に委すべき」との意見を海軍安原に伝えている。そして，10月下旬に上京すると，康有為の来日を迎えて宿泊先に会いに行き，そこにいた唐才常ともども話をし，唐が湖南で義兵を挙げる準備をしているので日本も兵を出して応援してほしいと語ると，康も頻りに援助を乞うたと日記に記している。唐はまた同じく湖南人の畢永年と一緒に訪ねてきて，やはり湖南の行動への支援を頼み，さらに康とともに来日した梁啓超にも別個に会うと，「談論黄昏に至る」まで話しこみ，「頻りに予に説くに湖南の急を以てし，速に援助の策を定めんことを乞」うた。彼らに対して，宗方はいずれにも「之を慰藉し暫く隠忍せしむ」という対応を取っている。この対応も上で見た4月15日の海軍あて報告に記したような考えに基づいていたのであろう。また，康有為らに会ったのと前後して孫文とも何度か顔を合わせているが，何を話したかは記していない。二に，宗方の上京直後に同文会内の話し合いが持たれ，10月24日には東亜会の犬養毅，平岡浩太郎らと会って「我同文会並に東亜，東邦協会，亜細亜協会等の大合同を謀」り，11月2日には東亜同文会結成の大会に参加した。この会の機関紙『東亜時論』第一号「会報」には，東亜会と同文会の合併の流れを述べて，そこで10月27日に両会の関係者が集まって協議したと記しているが，宗方の日記に照らせば24日の間違いであろう。宗方にとっては，孫文に会い，康有為，梁啓超，唐才常らに会う一方で，西郷海軍大臣を始め海軍司令官の幹部と会って持論を展開しつつ，東亜同文会結成にも参加したことになる。

ここで，明治31年中に書いた海軍への報告の号数と日時を日記から拾うと次の通りである。
1月3日―臨時第三号の一，二，4日―号外信，8日―臨時第四号，2月13日―第二十六号，3月1日―第二十七号，3月15日，21日にも報告しているが，何号か判明せず。4月13日―号外信，15日―何号か判明せず。26日―第三十号，5月2日―第三十一号，11日―第三十二号，16日―第三十三号，23日―第三十四号，日付け不明（27日頃）―第三十五号，6月20日―第三十六号，7月6日―第三十七号，19日―第三十八号，29日―第三十九号。

明治三十一年

正月元日　陰。鉄口駅に新年を迎へ，午後四時芝罘に帰る。夜田結領事，齊藤力三郎，平原へ膠州湾の実況を話す。東京伊東海軍々令部長に膠州湾独乙占領軍実況を電報す。威海衛中西に電報にて帰着を報じ，其の来遊を促す。熊本留守宅の信，東京白岩の信二通，中西正樹の信，古城貞吉の信，安原金次の信来着し居れり。

正月二日　晴。是日終日在寓，報告を作る。正午旅宿主人より領事館員一同並に余等同寓者を饗す。会者田結領事，高垣，船津，大杉，川上，齊藤，越山及び余也。夜領事を訪ひ年頭を賀し，酒談時を移し，高垣，船津二氏の処に小坐，帰寓。報告を作りて四更に至る。

正月三日　晴。午前報告成る。直に之を郵送す。則ち臨時第三号の一，第三号の二の二封なり。客月下旬露国軍艦五隻旅順口を借りて之に拠る隠約の間占領の意味を含有せり。英国亦た舟山に拠れりとの説あり。東方の風雲益す急。

正月四日　晴天。是日上海汪康年に致書し，其の日本行の期を緩ふし，予の上海に帰るを待たしむ。熊本内田岳父並に留守宅に発信す。東京安原氏に号外信を発す。候補知府楊福璋に面し平度の兵数並に旅順，膠州の事を探聞す。

正月五日　陰。午後中西正樹威海より来着。晩共に船津及び田結領事を訪ふ。諸氏予輩を留て晩食す。八時辞別。楼を下るの時過て梯子より堕ち，後頭，左肩，左肋を痛撲し，一時殆ど気息を絶つ。領事，中西，船津，大杉等看護大に至る。歩して帰る。

正月六日　晴。領事館諸氏来問。予床上に静臥し，傷を養ふ。

正月七日　晴。午後田結領事来訪。

正月八日　晴。東京安原に第四号信を発す。福州井手の信到る。夜楊福璋を招邀す。

正月九日　晴。領事館員来訪。

正月十日　晴。夜田結領事を訪ひ，別を叙し，雄談夜更に及んで帰る。船津，高垣来訪。齊藤，中西，越山等と今古を暢談し，一時寝に就く。領事より明日中餐の案内あり。

正月十一日　晴天。予将に是日を以て芝罘を辞し，太古洋行の武昌輪船にて上海に帰らんとす。早行李を収拾す。船の出帆明日に延びたるを報じ来る。正午田結領事の中餐会に赴く。三時帰る。田結氏来訪。

正月十二日　晴。午後二時中西，齊藤，越山，楊福璋諸氏と分袂し，高□号を出で，船板に乗ず。知友諸氏送りて海岸に来る。一別，河梁の情に堪へず。高橋藤兵衛，船津辰一郎武昌輪船に来り別る。上等船室に搭ず。上海に至る三十五円也。午後四時十五分出帆。海波平穏。

正月十三日　晴。風静にして波平かなり。同船の上等客西洋人男女五人と予の六名のみ。

正月十四日　雨。午後一時半，船呉淞口に入る。三時太古碼頭に着す。上陸，玉の家に投ず。勝木を招き晩食す。夜林正則並に小田切領事を訪ひ，芝罘領事館より依頼の書信を交付す。古城貞吉の信を勝木より領収す。

正月十五日　雨天。芝罘田結領事，越山，齊藤，船津，大杉，川上，高垣諸氏に発信す。午後円山来訪。芝罘船津より依頼の金子を交付す。

正月十六日　陰。午後出て大東新利洋行に至り，姚賦秋を訪ひ，談話時を移して帰る。是日井口生漢口より来着。夜勝木，井口来談。

正月十七日　陰天。午前勝木来訪。午後橋元来談。晡時河本訪来る。之を留て晩食す。夜宮坂，多田，高木，井口等来訪。

正月十八日　晴天。午後成田安輝来訪。本日の便船にて来着せるもの也。今晩の大井川丸にて漢口に向ひ，然後四川に入り一年間該地に留り，終に西蔵に遊び，大に為す有らん事を期する者也。談話時を

移して去る。蓋亦快男児なる哉。夜井口生来り別を告ぐ。本夕を以て漢に帰ると云ふ。出て其行を送る。

正月十九日　晴天。是日午時台湾総督乃木氏，山口武洪，在台北学友会員一同，吉田，竹崎諸氏に発信す。此外佐々友房，内藤儀十郎，浅山知定，安原金次，河口介男並に熊本同窓会員諸氏及び留守宅に致書す。

正月二十日　晴。午前勝木，河本来訪。午後名尾千里，橋本某並に小越平陸来訪。小越は本日漢口より帰着せるもの也。安藤虎男来訪。晩四馬路に散歩し，帰途勝木を訪ひ，小談，帰る。

正月二十一日　晴天。午前新聞社員對馬機，池田某，勝木等来訪。午時林正則より中食の案内あり。午後大東新利洋行より招邀。会する者小田切領事，永井郵船会社支店長，小田郵便局長，西村天囚，山田寒山，松林孝純，小越平陸，吉田某，松本某及び予の十人にして，姚賦秋，河本磯平，之が主人たり。酒詩応酬，十一時に至て散ず。是日蘇州片山敏彦の信到る。熊本山田珠一，高木正雄に発信，膠州湾事件落着の事を報ず。

清国政府は九十九年間（法語にて永久を意味す）膠州湾の青島附近一百清里の周廻区域を独乙に貸与し，且つ宣教師被害の賠償其他一切の費用として二十二万五千両を独乙に償ひ，又た独乙が清国内地に在りて七ヶ処の教会堂を建設する事をも許諾したり。

独乙は青島を以て英の香港に於けるが如く自由貿易港と為すの計画あり。

正月二十二日　陰天。是日清暦元日たり。芝罘越山の電報到る。東京より予の手当金，芝罘に宛て来着せし事を報じ来る。郵船会社支店長永井久一郎より明後夕宴会の案内状を送る。

正月二十三日　陰天。心気不佳。午後小越来訪。夜林正則の饗に赴き，八時帰る。

正月二十四日　晴。是日郵船会社より晩餐会の案内を受けしも心気佳ならざるを以て之を辞す。午後小越，多田，橋元等来訪。橋元，多田二生を留めて晩食す。夜橋本，名尾二人来訪。是楽善堂実相寺より安慶楊子荃の書信を転致し来る。

正月二十五日　晴天。午前勝木来訪。福州松倉の電報到る。晩在上海の学生橋本，宮坂，名尾，伊東，早田，田村及び小越の七人を招き晩食を饗す。

正月二十六日　晴天。午前山田良政，東京安原の信を携て来訪。海軍の嘱託にて北支那に赴く者也。林正則来訪。片山敏彦蘇州より来着。勝木の処に至り中食す。午後小越，吉田等来訪。晩片山を招き小飲。夜名尾生来訪。

正月二十七日　晴天。芝罘越山寛，熊本内藤儀十郎に発信す。午前名尾生，橋本等来訪。午後那部，小越来訪。

正月二十八日　晴天。午後片山，勝木と河本の招邀に赴く。九時帰る。林正則来訪。是夜小越平陸芝罘に向て発す。九時半片山，勝木来る。酒を命じて飲み，午前三時に至る。暴飲無節沈酔淋漓，殊に人をして堪へざらしむ。是日河本の寓より帰途不図梶川重太郎に邂逅す。昨日神尾光臣と共に来着せりと云ふ。

正月二十九日　晴。午後梶川を東和洋行に訪ひ寛談。時を移して帰る。今夜神尾氏と共に漢口に赴くと云ふ。蘇州河畔に至り片山敏彦の蘇州に帰るを送る。

中央鉄道の資本金白耳義国より借用の約成り，本年陰暦二月十五日を期し総弁盛宣懐上海を発し，漢口より北京に至る迄予定の中央鉄道全線を踏査すと云ふ。

正月三十日　陰。午前平戸人本澤謹蔵来訪。十時松倉善家福州より来着。井手，前田，中島真雄等の書信に接す。晩松倉来訪。

正月三十一日　晴。福州井手，前田，中島真雄等に復書し，並に時務報館汪康年に一書を致す。橋本，名尾二生来訪。名尾生，吉田松陰松下村塾の柱面に題せし書を携へ贈る。午後松倉と小田切領事を訪ひ，談時を移て帰る。海軍中佐島村に邂逅す。希，土の戦況を視察して帰る者なり。晡時橋元生来

訪。本日蘇州より帰来せりと云ふ。

二月一日　晴天。午前汪康年進士来訪。深水十八亦た大坂より来着。午時汪氏並に深水を誘て東和洋行に至り会飲す。午後三時半散ず。熊本池邊源太郎，河口介男の信到る。小田切領事より明日晩餐の案内あり。夜名尾，橋本，宮坂等来訪。

二月二日　晴天。午前 汪康年に致書，明日の招邀を辞す。今夜漢口に赴く事となればなり。午前姚賦秋を訪ひ辞別す。午後山田良政，宮坂，松倉，吉田等来訪。夜小田切領事の晩餐会に赴く。九時辞帰。十時大井川丸に搭ず。深水，松倉同行たり。河本，橋元，橋本，宮坂，山田，米良，栃原，吉田，勝木等来り送る。

舟山には目下英国東洋艦隊旗艦センチユリヲン以下軍艦三隻（合四隻）水雷艇一隻並に清国兵船超武号有り，碇泊す。

二月三日　晴。午前五時開船。

二月四日　雨。朝鎮江を過ぐ。

二月五日　陰。

二月六日　夜十時漢口に達す。東肥洋行に小休。十一時漢報館に入る。桂，岡等と談じ，午前二時就寝。

二月七日　晴。朝来衣物を購ひ室内を整頓す。館内の諸人交も来りて安を問ふ。午後金嶋，柳原，緒方，深水，松倉等前後来訪。夜東肥洋行に至り，十一時帰る。

二月八日　陰。朝宇都宮太郎来訪。陸軍大尉にして事を以て此地に留る者也。午前宇都宮と桂を訪ひ，午時帰る。午後松倉来訪。桂より晩餐の案内あり。八時梶川重太郎，宇都宮二人を訪ひ，談話十時に至て帰る。

二月九日　晴天。午前清人数名来訪。午後東肥洋行に至り，晩桂齊之の留別会に一品香に赴く。会するもの宇都宮，梶川，松倉，深水，緒方，橘，金嶋，岡，柳原，外商船会社員三人，及び書生二名也。八時散ず。帰途東肥に至り十一時帰る。

二月十日　晴天。午前松倉，柳原来訪。午時楊開甲，郭某来訪。開甲近日安慶に赴くを以て其の父子荃氏に致すの書を托す。午後二時東肥に至り，桂，宇都宮，松倉，緒方，橘，井口，岡，柳原外三四人と会食す。十時帰る。是日税関文案曹邦彦来訪，新聞紙発行に付き漢報と合同を求む。予之を拒絶す。

二月十一日　晴天。午前宇都宮太郎，桂齊之来りて別を告ぐ。本夕を以て此地を発し帰朝する者なり。晩宇都宮太郎，桂齊之の帰国を鄱陽輪船に送り，八時握手相別る。東肥洋行に至り，十時帰る。宇都宮等同道にて武昌自強学堂稽査姚以下三人の武員並に瞿道台の猶子日本に赴けり。是日李泉渓，蕭香蓉，金某，楊開甲等前後来訪。

二月十二日　晴天。午前九時柳原，深水，松倉，橘等と江を渡り武昌に至り自強学堂内の柳原の寓室にて中食し，学堂を一覧し，去て蛇山曾国藩の祠堂に遊び，帰途再び柳原の処に小憩し，四時東肥に帰り，談話十時に及で帰館。上海河本磯平の信到。

二月十三日　陰天。日曜日。午前商船会社より中食の招きあり。事故を以て辞す。東京に第二十六号報告並に熊本留守宅に致すの書を作る。是日雇員宦誨之を解雇す。岡幸七郎を是日より漢報館に招き留まらしむ。

二月十四日　雨天。昨日認むる所の書信並に大坂鳥居赫雄に寄するの信を投郵す。午前深水来訪。午後五時東肥に至り松倉善家の上海に帰るを送る。林正則，小田切万寿之助，河本磯平，勝木恒喜等に致すの書信を托す。梶川，緒方等と談じ，十時帰る。

二月十五日　雨天。是日上海河本磯平，芝罘高垣徳次，上海姚賦秋の信到る。河本は上海にて乙末会機関として雑誌発行の案を立て，予の賛成を求め来る。暮時商船会社の晩餐に赴く。十時帰る。

二月十六日　雨天。河本に上海に復書す。是夜漢報館主筆胡履福を解雇す。其の職務を曠廃して責任を重んぜざるのみならず，予の不在中非道の行為有りしを以てなり。退職を命ずるの時之に金十五円を給与し帰京の旅費に充てしむ。夜東肥に至り，十時帰る。

二月十七日　雨天。是日より漢口通信員黄山逸客を招て暫く主筆房編修の事を助けしむ。

二月十八日　雨天。午後柳原来訪。晩商船会社に至り，九時帰る。是日小使張用を解雇す。

二月十九日　雨天。福州井手三郎，上海河本磯平の信到る。晩神尾大佐より晩餐の案内あり。柳原と共に赴く。九時帰る。

二月二十日　雪。午前緒方来訪。夜岡と東肥に至り，十時帰る。腹痛。

二月二十一日　雪。上海宇都宮太郎，桂齊之，松田満雄の信到る。晩神尾大佐来訪。腹痛稍劇，悪寒□催。

二月二十一日　積雪，皚然。上海河本に致書し紙料の代価を問ふ。午後神尾氏来訪。是日羽臣を聘して主筆房の事を助けしむ。晩沙市領事永瀧より山階宮王妃殿下本月十七日薨去に付き三日間宮中喪仰出されたる旨を報じ，漢口居留民一般へ通知方を依頼し来る。即刻之を在留者一同に転達す。安慶楊子荃の信到る。夜洋街に散歩し，帰途商船会社に至り小談，帰家。

二月二十三日　新晴。是日沙市領事永瀧に復書す。夜商船会社の案内あり，其の社宅に於て松林伯龍の講談を聴き十二時帰る。

二月二十四日　晴。沙市永瀧の電報到り，山階宮王妃薨去云々の前報は電信局の誤りにて，王妃にあらず山階宮殿下の薨去なる事を報じ来る。因て之を居留民一同に通知す。午後梶川重太郎来訪，本日上海に下り，二週の後再び来漢すべしと云ふ。夜東肥に至り　梶川等に別れ，十一時帰る。

二月二十五日　晴。東京白岩龍平，熊本河口介男，上海松倉善家の信到る。上海河本磯平に致書す。午後同氏と洋街に散歩す。

二月二十六日　陰。土曜日。是日大坂鳥居赫雄，東京白岩龍平，熊本河口介男並に家信を附郵す。豹皮一枚を深水十八の帰県に托し留守宅に送る。外に宇都宮太郎，橋本齊次郎に一封を致す。晡時深水十八来り，別を叙す。上海松倉に復するの信を托す。夜深水を江寛輪船に送り，九時帰る。緒方，井口来訪。

二月二十七日　陰。沙市領事永瀧の書到る。芝罘高垣，越山，威海衛中西，福岡高橋謙に致すの書を作る。中西，高橋には張之洞の聘に応ぜん事を勧誘す。重慶領事館員高橋橘太郎，外一名来訪，本日来着せりと云ふ。

二月二十八日　晴。朝陸軍大尉齊藤勝力三郎来訪。芝罘にての先約を踏み，帰国の途次来游せる者なり。中食後齊藤を伴ひ船を僦て漢陽に遊び，晴川閣，大別山，白牙台を巡覧し漢水を下りて帰る。晩小飲。橘，井口来訪。夜東肥に至り，九時帰る。是日先考の一周年忌辰たり。謹慎を守り家居せんと擬す。偶々齊藤千里道を枉げ前約を踏んで来り訪ひ，明夕の大井川丸にて上海に折回せんとす。於是地主の誼を尽し東道を以て任ぜざるを得ず，蓋し不得已也。只だ東天を遥拝し先考の神霊に黙訴し追懐の情に堪へず，稍然久之。

三月一日　風雨。午前岡氏に齊藤を伴ふて武昌に一遊を依嘱す。予事を以て往くを得ず。午後館中に於て齊藤を餞す。緒方来会。六時齊藤を江干に送るに，風雨甚猛江声如吼，舟子惧れて船を出さず。往返逼促数次の後漸くにして発す。是日齊藤の帰申に托し，東京安原への報告（二十七号）並に高橋謙に致すの書を上海着の即日附郵を依頼す。夜東肥に至り，十時帰る。

三月二日　雨。午後井口生来訪。福州中島真雄，井手三郎，上海勝木恒喜の信到る。

三月三日　雨天。夜東肥に至る。

三月四日　雪。晩東肥に於て石原の帰国を餞す。十一時帰る。

三月五日　熊本留守宅，高木正雄，台湾井原真澄，篠原由雄の信並に上海時務報館汪康年進士，安慶楊

掌教，沙市横田三郎，上海梶川大尉の信到る。是日商船会社石原に磁器三種を贈り餞別と為す。晩石原の留別会に一品香に赴き，九時帰る。橘三郎，井口忠来談。

三月六日　陰寒。心気不佳。

三月七日　陰，夜雨。台湾七里恭三郎の信到る。晩石原市松を大井川丸に送る。

三月八日　陰。上海河本磯平の信到る。

三月九日　晴。上海時務報館汪康年に復書す。去年是日余熊本の郷里に帰着し始て家君の死を知る。追懐往時感何堪。

三月十日　晴。夜緒方二三，橘三郎来談。十二時半辞帰。

三月十一日　雨天。土屋員安，桂齊之，宇都宮太郎等の信到る。夜東肥に至り，十一点鐘帰館。

三月十二日　雪。土曜日。朝沙市領事永瀧久吉来訪，只今来着せりと云ふ。午後柳原来訪。夜永瀧来談。

三月十三日　快晴。東京軍令部，上海井手三郎，熊本篠原の信到る。井手は月の七日福州より上海に着し，痔疾の為に困し居ると云ふ。夜緒方，橘，岡等と永瀧を「ホテル」に訪ひ，十一時帰る。

三月十四日　陰天。朝梶川大尉，船津辰一郎来訪。今朝到着せりと云ふ。上海井手，松田，熊本山田珠一，葉室諶純の信到る。午後永瀧領事来訪。夜梶川を訪ひ，十一時帰る。

三月十五日　快晴。早朝井手三郎上海より来着。福岡高橋謙の信到る。近日職を休め帰郷せりと云ふ。金島文四郎，船津辰一郎，緒方二三，李泉渓，井口，梶川重太郎等来訪。東京安原に報告を出す。熊本留守宅，篠原由雄，角田少将等に致書す。夜梶川の招邀に一品香に赴く。十時帰る。

三月十六日　快晴。是日副主筆范仲卿，賬房査汝成の二人を解雇す。夜永瀧，梶川，船津，井口等来訪。井手と出て神尾光臣を訪ふ，在らず。是日芝罘越山寛，小越平隆，熊本宮崎寅蔵，安慶楊子荃等の信到る。越山，小越より旅順に於ける露国，青島に於ける独逸の近状を報じ来る。

三月十七日　風雨。永瀧来訪。

三月十八日　陰。朝汪康年来訪。今日到着，直に湖南に赴くと云ふ。茶話後相携て神尾，梶川等を訪，晌午帰る。夜永瀧の饗に一品香に赴き，九時帰る。是日張壽民を雇て賬房の事を掌らしむ。

三月十九日　晴。是日予在漢口邦人全数を一品香楼に饗する筈なりしも，神尾よりの相談にて今夕は之を同氏に譲り，予は明晩に延ばせり。午前神尾光臣を訪ふ。銭恂亦来訪。談話時を移て帰る。柳原来談。晩神尾の饗に一品香に赴く。席将に散ぜんとする時汪康年，銭恂が隣室に一席を設け神尾，船津，梶川，井手，緒方及び予を招く。小飲後神尾，梶川，飛松，湯本，河合，船津等を送りて江寛船上に至り別を叙して帰る。楊子荃の信安慶より到る。

三月二十日　雨。早朝李泉渓，新主筆尹仲韓を伴ひ到る。午時館内に於て酒席を設け会飲し尹，張二人を館員に紹介し，且つ今日解雇の主筆范鋭及び賬房査汝成を送るの意を寓す。范には船資として銀十元を贈る。六時漢口居留の邦人を一品香に招き饗す。来客は沙市領事永瀧，商船会社森，金島，外二人，東肥洋行緒方，橘，井口，浅井，東益洋行福島，及び井手，岡の十二人也。九時散ず。東肥に至り談移時而帰。

三月二十一日　雨。是日上海郵便局田村，並に神尾光臣，外国新聞捷報館に致書。東京安原に報告を発す。

三月二十二日　雨。永瀧来訪。是日松田満雄，栃原孫蔵来る。本日上海より到着せりと云ふ。夜井手，岡と東肥洋行の晩餐に赴く。永瀧亦来る。十時散ず。

三月二十三日　陰。午前永瀧来訪。午後井手と出て松田，栃原を星記桟に訪ひ小談，帰る。夜井手，岡と商船会社に至り，十時帰る。

三月二十四日　快晴。午前橘三郎来訪。午後井手と洋街に散歩す。夜東肥に至り，十時帰る。

三月二十五日　健晴，春色大に動く。是日井手，橘二氏と江を渡り武昌に至り，先つ黄鶴楼に上り，後

自強学堂に至り柳原を訪ふ。中食後東文学堂を一覧し柳原を辞し，保安門内蕭家巷に李泉渓を敲く。小飲，辞帰。東京安原の信到る。夜緒方，橘，井口等来訪。共に出て永瀧久吉を沙市輪船に送り，九時別を告げ帰る。

三月二十六日　晴。是日予，井手と共に上海に下らんとす。行李を収拾す。松田，栃原来訪。柳原又来る。東京白岩龍平，熊本留守宅の信到る。午後七時井手と共に天龍川丸に搭ず。柳原，岡，緒方，橘，井口，金嶋等来り送る。八時四十分開船。

三月二十七日　晴。午前九江を過ぐ。

三月二十八日　晴。午後南京，鎮江を過ぐ。漢口を発してより船中素行と唱和し，長短十首を得たり。

三月二十九日　雨。正午船上海に達す。松倉氏来り迎ふ。豊陽館に投ず。河本，勝木，田邨等来訪。大坂鳥居赫雄の信到る。

三月三十日　雨天。午前多田，橋本，河本等来訪。夜林正則，對馬樣，小田桐勇輔，橋本某，米良，石崎，勝木等来訪。是日勝木より百二十円を借り，此中百円を井手に交付す。時務報館梁啓超に致書す。

三月三十一日　陰天。午前宮坂来訪。蘇州荒井甲子之助の信到る。是佐世保角田少将に致書し，其の児子清国遊学の件に付き云々す。熊本留守宅に致書。外務省の補助金中より四百円を支那店に入金を命ず。但し漢口の同支店にて該金員を受取るが為なり。東京安原に致書す。林正則来訪。午後船津辰一郎，名尾千里，橋元等来訪。熊本篠原由雄の信到る。本日来着の瀬上生携へ来る。

四月初一日　晴天。午前井手と上車。時務報館に至り，梁啓超，汪康年等を訪ふ。梁は天津に赴き，汪は湖南より未だ帰らずと云ふ。帰途姚賦秋を訪ひ小談，帰る。郵便局に至り，昨日認むる所の書信を発す。小田切を訪ひ立談，辞帰。午後那武，汪司直，池田等来訪。晩井手，松倉，多田，橋元，勝木等と会食す。是日熊本留守宅の信到る。

四月二日　雨天。午前六時半井手を送りて長門丸に至り，七時半開船，別を叙して帰る。熊本学生江崎嘉蔵に発信す。午後福本誠来訪。近日便船を待て欧洲に漫遊すと云ふ。談話時を移して帰る。本澤謹蔵蘇州より来訪。多田亀毛亦到る。夜小田切領事の晩餐会に赴く。福本誠，小田貴雄，小野某，吉田順蔵，北代成業，並に予の六人にして，小田切夫婦主人たり。快飲十時に至て散ず。

四月三日　陰天。日曜日。神武天皇祭。是日上海居留民中の重なる者，桃花を竜華寺に賞せんとす。予，事を以て行かず。名尾，高木等前後来訪。

四月四日　晴。熊本宮崎寅蔵の信到る。東京安原に発信す。姚賦秋より味蕣園の午餐会に臨せん事を請ひ来る。故有りて，之を辞す。那部，林来訪。晩松倉氏と領事館に至り船津を訪ひ小談。去て對馬機を訪ふ，在らず。又た去て語学研究所に至り課業を一覧し，安藤の処に談話し，十時帰る。是日林正則を訪ふ。

四月五日　晴。午前福本誠を東和洋行に訪て帰る。午後田村の蘇州行を老閘に送る。晩瀬上生漢口に向て発す。岡幸七郎に致すの書二通を托す。中西正樹威海衛よりの信到る。旅順，大連湾に於ける露国の近状を報じ来る。東京安原に発信し中西の書を転致す。中西報道の要領左の如し。

三月二十六日午前十時北京政府は旅順駐紮の宋慶に電命して云ふ。旅順，大連両地を以て向ふ二十五ヶ年間露国に貸与せり。宜く速に全軍を営口，田庄台の方面へ退くべしと。

露兵は当日直に上陸。其数歩兵千二百，騎兵二百なり。而して黄金山上高く国旗を掲げ軍楽を奏し，市街の内外を運動して兵威を示し，又た七隻の軍艦は満艦飾を為し楽を奏しつつ港外に遊弋せり。

露艦の旅順に在るもの七隻，大連湾に在るもの三隻。

宋慶帯ぶる所の清兵は二十七日より撤退を始めたり。宋は軍艦福靖に搭じ，二十八日営口に退きたり。

又た露兵の大連湾に上陸したるは歩兵一千二百名。此中七百人を同地に留め，三百を貔子窩に派し，二百は今正に金州に向ひつつあるものの如し。

占領区域は普蘭店より金州半島以南とあり。

四月六日　晴天。午前福本日南，勝木，對馬等来訪。午後北代成業来り訪ふ。晩東肥に至り談ず。是夜林正則の処に於て軍艦筑紫の軍医浅井の診察を受く。

四月七日　晴。午前森井国雄来訪。多田，沈文藻二氏亦来談。午後北代成業の為に福州，漢口両地への添書を作り之を本人に付す。夜松倉氏と出て陳列所に至り，那部を訪ひ小談。去て楽善堂に至り，実相寺貞彦を敲き，九時帰る。

四月八日　雨天。午後青森人小田桐某来訪。晩船津辰一郎来り，前富に於て晩餐を饗す。

四月九日陰天。是日大坂鳥居赫雄，熊本宮崎寅蔵に発信し，外に熊本山田珠一，高木正雄，葉室諶純，毛利篤，藤本親信，古城貞吉に致すの書を作り，本日帰県の石崎生に托す。別に留守宅に宛て書信及び紫泥焼茶器四個，茶盅十個，糖菓四盒を石崎に托送す。午前石崎を神戸丸に送りて帰る。午後汪康年来訪。一昨日湖南より帰来せりと云ふ。共に立国の要務を談ず。予問て曰く，湖広総督張之洞，湖南巡撫陳宝箴の二氏は天下の重望なり，我徒宜く説くに大義を以てし，之をして我用と為す事を為す時に於て甚だ便益多からん，足下此意有りや否。汪曰く，陳，張二氏，眼前我用と為らざるも時機愈会するの日に当りては，或は連轆並馳共に力を中原に致すべきなり云々。四時汪氏と福本日南を訪ひ，小談帰る。夜松倉氏と對馬，小田桐二人を訪ふ，在らず。

四月十日　晴天。午前福本日南来訪。共に出で小田切を訪ひ，亜細亜会創立の事を商量して帰る。午後吉田順蔵，山口某来訪。晩英界に散歩す。

四月十一日　晴。漢口柳原，岡，緒方三氏に致すの書を作り，市原，牛嶋等の西上に托す。岡には時計一個を送り，請ふには二百円の為替券を封送し，漢口の「バタヒルド」会社より此の金を受取り，中百二十円を上海勝木に滙送し，八十円を緒方の手に預り置かん事を依嘱せり。午後姚文藻を訪ひ小談。去て汪康年を時務報館に敲き，清国時事話片十二則を交付し，並に清浦奎吾，松平正直二氏への紹介状を与へて帰る。清浦，松平二氏，将に此地に来らんとするを以て也。汪に与へし話片の大要は，時機を窺ひ義兵を挙げて，湖南，湖北，江西，四川，貴州並に広東の一部を連ねて占拠を行ひ，以て一国を建立するに在り。之に関する方法手段を列挙せり。帰途福本誠を東和に訪ふ。今朝の来問に答ふる也。談話時を移て帰る。池田某来談。市原，宝妻，牛島三生，今夜漢口に赴く，来て別を叙す。夜天龍川丸に至り，三生並に北代成業の西上を送て帰る。

四月十二日　晴。午前對馬機来訪。午後沈文藻，香月梅外前後来訪。香月は昨日北京より来着せりと云ふ。之を留て晩餐を共にし，東肥に至り小談，帰る。

四月十三日　晴。午前河本磯平来訪。是日臨時便船あり。東京安原に号外信を発す。午後汪康年来訪，時事を談じて去る。沈文藻来る。用煩を以て見ず。森井国雄，小田桐某来訪。熊本留守宅の信並に東京齊藤力三郎，熊本篠原由雄の信到る。夜小田桐，對馬等を訪ひ，談話十二時に及んで帰る。

四月十四日　晴。朝山根虎之助，河本磯平来訪。山根は昨日の便船にて来着せるもの也。午後橋元生来訪。芝越山寛より旅順口，大連湾両地に於ける露人の現況を詳報し来る。蓋し楊福璋，田山良吉二人，該地に出張して調査せるもの也。越山の報告を漢報館に転送す。

四月十五日　晴天。熊本留守宅並に井手三郎，東京白岩，熊本篠原由雄に発信す。外に東京安原に報告を送り，我政府が速かに浙江，福建の二省を清国に要求し外国に譲与せずとの言質を取り置く事の必要を警告せり。午後香月梅外来訪。夜對馬機来談，十二時帰る。

四月十六日　晴。午前河本磯平来談。午後日清共学堂に至り山根虎の助，安藤，香月等と談じ，五時帰る。

四月十七日　微雨。午前福本誠来る。共に出て友永に至り，山根，對馬，松倉，池田，小田桐，勝木，

香月，河本，安藤，森井等と会し歓談す。午時会飲興高未亟，五時に及んで散ず。六時吉田順蔵の招邀に杏花楼に赴く。会する者，諸井，船津，勝木，福本及び予也。九時辞帰。是日熊本井手三郎，福州前田彪，蘇州荒井益，時務報館汪康年等の信到る。夜宮坂，橋元，高木三生来訪。

四月十八日　雨。正午汪康年より中餐の案内あり。四馬路万年春に赴く。会する者，汪，張，福本，河本，姚及び予の七人也。三時辞帰。晩食後東和洋行に至り，福本誠を訪ひ，別を叙す。其の明朝を以て欧州漫遊の途に上るを以て也。談話十時半に及で帰る。

四月十九日　雨天。午後東肥に至る。井口忠次郎在り，本日漢口より来着せりと云ふ。上車，姚文藻を訪ひ小談，帰る。夜井口を訪ひ，十時帰る。

四月二十日　晴天。熊本篠原生の信，藤本親信の信，威海衛中西正樹の信到る。中西の書中小越平陸，山田良政等旅順偵峯中露国人の為に捕へられ漸くにして営口に放逐されたりと云ふ。夜日清英語学校に至り小談。去て對馬機を訪ひ，栃原等数人と談じ，十一時帰る。是日荒井甲子之助蘇州より来り訪ふ。

四月二十一日　晴天。午前森井国雄，荒井甲子之助，沈文藻等来訪。午後東京安原，大坂石原市松，高橋謙，漢口岡の信到る。中町某，欟原孫蔵来訪。晩食後小田□雄を訪ふ，在らず。

四月二十二日　晴天。福州前田彪，熊本留守宅，井手，篠原，東京宇都宮，芝罘越山，中西等に発信す。午時沈文藻と虹口広東酒館に至り中食す。午後橋本生来り，別を告ぐ。本日蘇州に赴くと云ふ。吉田順蔵より晩餐の案内あり。五時之に赴く。六時前任御史文廷式，湖南学政江標等より興亜会創立の件に付き予と交渉せん事を望み，日新里李寓に於て会見を申込み来る。吉田宅より上車四□所謂日新里を尋ぬれども得ず。不得已帰寓。夜多田，井口来訪。

四月二十三日　陰天。土曜日。午前香月梅外の帰国を送る。大坂深水，佐野二氏への書信を托す。

四月二十四日　陰。午後牧巻次郎，竹下某来訪。三時姚文藻の饗に四馬路某楼に赴く。校書林宝珠，何飛雲等来り，琵琶を弾じ謡曲を奏す。故丁汝昌の遺子丁幼廷亦来会。五時帰る。夜実相寺貞彦，中町某，名尾，高木，井口等来訪。

四月二十五日　雨天。午前丁幼廷の為に芝罘領事田結氏への添書，並に威海衛中西への書を作り之を与ふ。蓋し幼廷の此行，故丁提督の財産の威海，旅順に有るものを処分するが為なり。午前上車。時務報館に至り汪康年を訪ふ，在らず。名刺を留めて姚賦秋を敲く。柬して文廷式を招く。至る江西の人文天祥の後裔と称す。前任御史曽て皇太后を諫め，李鴻章を弾劾し忌諱に触し，官を罷めらる当世の名士也。年歯四十余亦快人なり。時事を痛論し，三人中食を共にして帰る。午後森井，橋元，永原，井口等来談。夜小田桐，池田，米良，宮坂等来訪。

遷都の議又た内閣に起る。其の予定地は保定，山西，陝西三地なりと云ふ。

米国，西班牙二国玖巴の事に依て決裂を生じ，米国艦隊の東洋に在るものは一時香港に集中し呂宋を取らんとするの勢を示せり。呂宋海岸の燈台は（一ヶ所を除く）本月二十三日より点燈せざる事を公示せり。

英領香港も米西二国交戦の為め中立を布告せり。

四月二十六日　陰天。午前船津辰一郎来訪。熊本留守宅並に井手三郎，東京安原に報告及び機密費決算，外務省補助金決算書を送る。晌午汪康年来訪，時事を談じ刻を移て去る。沈文藻，對馬機来訪。午後雨。上車，日清英学舎に至り安藤，河本諸人に告別し，去て楽善堂，瀛華洋行，領事館，東肥，林正則等に告別して帰る。那部，小泉二生来訪。是夜予商船会社の大井川丸より漢口に漢口に帰らんとす。明日清浦奎吾，松平正直二氏，上海着の報に接せしを以て汪康年，文廷式等への紹介状を送り，之を松倉に托す。夜河本，勝木，橋元，米良，對馬，安藤，実相寺，栃原，宮坂，小田桐，多田，森井，永原，中地，松倉等十五人送り来る。一書を作り安原に致し，新任我国駐劄公使に内定せし梁誠の事に付き外務省に交渉し，其の日本駐劄公使たる事を拒絶せん事を依托す。梁姓は露国崇拝

者の一人にして，他日不利有らん事を恐れて也。是夜豊陽館席上往日福本日南の西遊を送るの韻を重押し，来送諸子に留別す。詩に曰く，半夜燈前別恨催，今吾此去幾時回，一江春雨蕭条夕，万般愁□入向来。

四月二十七日　晴天。午前二時開船。十時通州を過ぐ。十二時江陰対岸露砲台一座を新建しつつあり。安式砲七門に排列す。大なるもの三門，口径二十□知許，小なるもの十五□許，遠望目測其詳を得る能はず。七時前圖山関を過ぐ。八時鎮江に泊す。煙月半江三山夢の如く，金山の搭燈瓜洲の漁火，夜景言状す可からず。昔人の詩に曰く，潮落夜江斜月中，両三星火是瓜洲。風景宛然。

四月二十八日　健晴。七時半船過東西梁山間。十時至蕪湖。午後四時四十分大通を過ぐ。山嘴白色の搭あり。一水山下に沿て内地に入る。左方遥一峯鉅歯の如きを望む。其状甚奇，或は是れ安徽の名山黄山ならん。夜十時半過安慶。

四月二十九日　春雨蕭々。午前十時九江に達す。両岸の積翠煙雨を帯び風趣佳絶，吟魂飛揚す。午時事務長より西饌の饗あり。午後一時武穴を過ぐ。三時半，半壁山，田家鎮の辺を過ぐ。両岸風色殊に佳絶たり。六時四十分左岸有一山，高三百尺，臨江如削，翠色欲滴。ワンリン山是なり。此処江流極険，行少許左岸一市鎮あり。石堡と□人戸八十許。大冶鉄山運輸鉄道の終極たり。江滸碼頭を設く。此より鉱石を小汽船に積み漢陽鉄廠に運送する也。黄石港は此の上流八里の地に在り。

四月三十日　晴天。午前七時船漢口に達す。直に上岸漢報館に入る。松田，緒方二氏前後来訪。金島久四郎亦来問。晩東肥洋行に至り談ず。十時帰る。緒方氏に上海勝木より借りし百二十円を返却し，残額八十円の中五十円を受取て帰る。

五月初一日　晴。熊本留守宅の信並に小女清子の真影を贈り来る。佐野直喜より其母堂の逝去を訃報す。晡緒方，井口，橘，市原諸人来訪。晩松田満雄を星記桟に訪ふ。

五月二日　晴。午前岡，井二氏と江を渡て武昌に至り柳原の病を問ひ，中食後李泉渓を訪ふ，在らず。江を渡て帰る。是日東京安原，熊本佐野直喜に致書す。東京白岩龍平，上海河本磯平の信到る。河本よりは信封，信紙一束を寄贈し来る。夜市原，牛島，瀬上，宝妻等来訪。

五月三日　午前周衡斎来訪。上海清浦奎吾，松平正直両氏の信到る。熊本井手，篠原，内田岳父，上海勝木の信到る。午後松田満雄来訪。夜東肥に至り談ず。

五月四日　微雨。午前松田と仏国領事ドートルメール氏を訪ひ，十一時帰る。午後郭厚卿来訪。晩松田を星記桟に訪ふ。

五月五日　雨天。

五月六日　雨。午後四時清浦奎吾，松平正直二氏を招商局碼頭に迎へ，東肥に至り，談話夜に及んで帰る。上海松倉善家の信到る。夜李泉渓来訪。

五月七日　晴天。午後橘来訪。晩清浦，松平二氏を一品香に招邀し支那料理を饗す。九時散ず。柳原来宿。

五月八日　晴。熊本井手三郎，福陵新報社，安慶楊の信到る。午後松田満雄来訪。明晩此地を発し上海に下ると云ふ。五時松田，岡二氏を誘て広恒信に至り洋饌を饗す。

五月九日　陰。午後木野内成徳来訪。張之洞の訳官として来れるもの也。上海小田切領事，對馬機，松倉，河本，勝木，吉田順蔵，林正則諸氏に致すの書を作り松田氏に托す。又た外字新聞社への新聞紙代三円を松倉に托し交付せしむ。東京安原金次，福岡高橋謙二氏に致書す。晩松田満雄の上海に帰るを送る。夜清浦，松平二氏を敲き，談話深更に及んで帰る。

五月十日　晴。午後藤森茂一郎来訪，本日来着せりと云ふ。内人の書信一封並に其の贈品煙竹並に点心等を携へ来る。二時沙市領事永瀧より電報到る。曰く，昨九日匪徒の為に領事館を焼かれ，館員皆恙無し云々。同時に税関並に招商局蔓船も焼却せりと云ふ。夜清浦，松平二氏を訪ひ談じ，晩餐を共にし八時二氏を送りて太古洋行の大通輪船に至り，九時半別を叙して帰る。

五月十一日　雨天。沙市来電に曰く，九日午後湖南人酒狂い，為に水手と闘ひ予憤を鼓して税関長舎宅，税関，招商局，怡和洋行，税関官銀号，招商局躉船，日本領事館，洋務局，並に民舎に火す，勢甚危険。道，府，州，県均く已に沙市に到る云々。是日安原に沙市の変を報ず。午後橘来訪。夜東肥に到り談ず。

五月十二日　微雨。夜藤森来訪。

五月十三日　晴雨無定。午後東京宇都宮太郎，台湾七里恭三郎の信到る。

五月十四日　晴。午後四時沙市領事館一同快利輪船にて来着。迎て九日の変状を問ひ詳悉する事を得たり。

五月十五日　陰晴無常。午後柳原又熊，小野村武昌より来訪。夜永瀧，並に横田等を小波楼に訪ひ，九時帰る。

五月十六日　陰天。是日東京安原に沙市の変を詳報す。宇都宮太郎，並に内人に復書す。森井国雄上海より来着。晩森井を送りて竜川丸に到り，帰途東肥を敲き，十時帰る。上海松倉に致書す。

五月十七日　陰。午後横田三郎，永瀧久吉，金島文四郎，黄坤甫諸人前後来訪。晩横田三郎と招商会社を訪ひ，十時帰る。

五月十八日　晴。午前十一時帝国軍艦高雄来着。午後一時岡，緒方等と行て軍艦を訪問し，艦長，士官諸員に面して帰る。夜藤森，市原来談。

五月十九日　雨。午前井口来訪。午後岩越書記生来訪。橘三郎来訪。夜東肥を訪ふ。

五月二十日　雨。午後緒方二三来訪。上海勝木の信到る。晩高雄艦長来り訪ひ，談話時を移て去る。

五月二十一日　雨。安慶楊子荃に致書し，並に五言古詩一章を贈る。是日福州前田彪，熊本井手三郎の信到る。

五月二十二日　雨。日曜日。木野村成徳，柳原又熊武昌より来訪。熊本江崎嘉蔵の信到る。東京より，六月より九月迄四ヶ月間の手当四百円を送り来る。午時海軍士官某，横田三郎，松平福綱，野口某等来訪。夜横田三郎を小波楼に訪ひ，十時帰る。

五月二十三日　雨天。是日東京安原に報告を送る。晩東肥を訪ひ，九時帰る。

五月二十四日　雨天。午後緒方二三来訪。予が寄存金四百元中より二百元を借らん事を望む。之を諾す。森井国雄上海よりの信到る。津山土屋員安に復書す。夜商船会社を訪ふ。

五月二十五日　雨。午後濱崎生来訪。永瀧領事，大原大尉，橘三郎，緒方，木野村等前後来訪。東京宇都宮，齊藤両大尉より羊羹二盒，京都根津一より海丹一壺を贈り来り，外に大原食品数点を贈る。根津，橋本の信到る。夜横田三郎を訪ふ。

五月二十六日　陰。大原武慶，永瀧久吉二氏を訪ふ。午後海軍士官七人来り訪ふ。夜東肥の諸生六人来談。東京梶川大尉，鋳方少佐等の信到る。

五月二十七日　半晴。午前金島文四郎，余が為に為替金三百十五円を銀行より受取り来り，交付す。午後安慶楊子荃，上海汪康年の信到る。汪よりは湖南巡撫陳宝箴の子陳伯厳並に鄒沅帆二人に致すの書を送り来る。余が湖南游の先客を為す也。午後三時総督張之洞上海より折回武昌に着す。沙市事件の為め政府が電報にて其の上京を中止し，武昌の任地に復帰すべきを以てせしに因る也。

五月二十八日　朝暴雨。晩商船会社を訪ふ。

五月二十九日　晴。大坂深水十八，佐野直喜，上海松田満雄の信到る。柳原来訪。午後東肥に至る。夜帰る。

五月三十日　晴。横田三郎，金島，今西等来訪。京都根津一に返書す。天津国聞報館に致書す。

五月三十一日　晴。午前金島来訪。午後藤森，井口来訪。晩東肥を訪ふ。

六月初一日　晴。東京宇都宮太郎，梶川金太郎，橋元齊次郎，齊藤力三郎，小澤徳平，鋳方徳蔵等に返書す。

六月二日　雨。朝高雄艦長小倉鋲一郎来訪。午後上山良吉来談。軍艦愛宕二時到着。晩東肥を訪ふ。
六月三日　晴。午前軍艦愛宕を訪問す。夜商船会社に抵る。
六月四日　晴。横田三郎来訪。晩月に江干に歩す。涼爽人を蘇せしむ。是河口介男の信到る。佐久一男一女を分娩せりと云ふ。
六月五日　晴。海軍士官某来訪。夜江頭に散歩す。月色頗好。
六月六日　晴。午後永瀧領事，上山良吉，横田三郎等来り別を叙す。今夕沙市輪船にて沙市に赴くと云ふ。上海汪康年に復書す。上海松倉善家の信到る。夜沙市領事館員一行を沙市号輪船に送り，九時別を叙て帰る。緒方，橘，井口等来談。
六月七日　微雨。午後軍艦愛宕艦長成川揆，大尉殖田謙吉，大主計遠藤和平等来訪。談話時を移て去る。上海松倉に復信す。
六月八日　半晴，熱甚。是日東京海部，福岡高橋，熊本宮崎，篠原，上海森井等の信到る。午後高雄主計某，並藤森来談。
六月九日　晴。是日軍艦高雄の依嘱により本地道台瞿廷韶に照会し，艦員十数人漢陽製鉄所並に槍砲局に到り，縦覧の便利を与へんことを請求す。商船会社支店長森常太大坂より帰り海苔一箱を贈る。晩森を訪ひ，転じて東肥に至り，九時帰。
六月十日　晴。高雄艦長小倉鋲一郎来訪。夜藤森来訪。
六月十一日　午後雷雨。
六月十二日　朝雨，午晴。緒方来訪。晡時高雄の一水兵街上に酔倒せるを報ずる者あり。即ち人をして之を扶け来らしめ，直に軍艦に照会し，水兵数人をして伴ひ還らしむ。
六月十三日　晴。高橋謙に復書す。午後高雄の士官二人来訪。二時上海林の電報到る。安原金次上海にて予と会見を望み，予が上海に下ることを得るや否を問ふ。夜橘，藤森，井口来訪。
六月十四日　晴。上海林に致書し，此の数日内要務有るを以て上海行意の如くならざるを報ず。若安原氏の上海起程を二十五日迄延期するを得ば，必ず上海にて会見を得べし云々の意を致す。軍艦高雄士官一同より来る二十六日午後五時艦上にて晩餐会を催ふすに付き出席の案内有り。殖田，秋澤，内田三士官来訪。上海林の電報到り，昨電の着否を問ふ。商船会社より晩餐の案内あり，之に赴く。海軍士官三人来会。
六月十五日　陰。午前九時上海林正則に返電す。沙市永瀧，横田，岩越，上海松田の信到る。晩東肥に至る。緒方此夕軍艦愛宕に便乗し明朝沙市に赴く。
六月十六日　晴。午前主計某，並に商船会社員来訪。午後軍艦高雄の招邀に赴く。九時帰る。
六月十七日　晴。晩東肥を訪ふ。東京井手三郎，岡山土屋員安，赤石鳥居赫雄の信到る。
六月十八日　晴。午後井口来訪。余の東肥に寄存金四百の中二百元を私借せん事を請ふ。之を諾す。夜藤森，橘，市原，牛島等来訪。
六月十九日　晴。午前軍艦高雄を訪問し，先夜招飲の礼を述ぶ。
六月二十日　晴。蘇州より書生小林来る。上海松倉，小田桐，沙市野口，安慶楊子荃の信到る。昨日内人の信到る。病気未だ愈へず，其の肺患に変ぜしを報ず。篠原の信又到。是日東京安原に三十六号報告を送り，外に鳥居，井手，山田珠一，河口介雄，篠原，天津西村，上海村井並に内人に発信す。橘来訪。
六月二十一日　陰。夜東肥を訪ふ。
六月二十二日　朝晴，暮雨。午後柳原と軍艦高雄を訪ふ。商船会社に至り，軍艦へ寄贈品の割前を付清す。上海安原の信到る。本月三十日上海に会見を求め来る。牛荘小越平隆，上海河本磯平の信到る。小越は旅順より興京，吉林地方を遊歴せしもの也。
六月二十三日　大雨。是日清暦五月五日にて端陽の節たり。旧例に遵ひ館内上下二十余人小宴を催す。

午後柳原来会。小詩三首を賦す。
六月二十四日　晴。軍艦高雄航海長より菓子を贈り来る。夜藤森，井口来訪。
六月二十五日　晴。予是夕上海に下らんとす。行李を整頓す。午後美術学校員佐久間生来り訪ふ。午後東郷中尉来りて別を叙す。軍艦八島に転乗を命ぜられ，本日より出発する者也。七時半天龍川丸に搭ず。藤森茂一同行たり。商船会社，東肥洋行の諸氏来りて行を送る。八時半開船。上海領事小田切万寿之助の信到る。近日中漢口居留地談判の為め来漢すと云ふ。
六月二十六日　陰天。午前八時九江着。廬山煙雨の間に隠見し，真面知る可からず。九時翻陽湖口を過ぐ。細雨霏々，大姑の翠髪尤も艶絶。午後三時安慶を過ぐ。皖公山色如招人。夜十二時蕪湖着。此地天明にあらざれば客の上岸を許さず。旧例然る也。
六月二十七日　半晴。午前七時蕪湖発七時半，東西梁山の間を過ぐ。十時半南京着。早西門東辺の一山上砲台を新築せるを見る。蓋し三月以後の起工なり。午後二時十五分鎮江に達す。三山の景致状せんと欲すれども得ず。
六月二十八日　半晴。午前十一時上海着。豊陽館に投ず。呉淞砲台並に兵営已に撤裁し，殊に寂寥たり。開港場とならんが為に然る也。小田桐，松崎翠，勝木恒，對馬機等来訪。山根虎之助，安藤虎男，河本磯平等亦来訪。
六月二十九日　晴天。午前汪康年，姚文藻二氏，並に楽善堂を訪ふ。末永節，宮坂，甲斐，橋元，林，小田桐等来訪せりと云ふ。午後郵便局に至り，武昌木野村成徳より依托の金九十円を正金銀行より為替に付せしものを書留にて東京に郵送す。領事館に至り船津生を訪ひ，去て日清英学堂に至り，山根，安藤以下諸人を見る。安原金次天津より帰着せしを報ず。晩之を東和洋行に敲く。談話十二時に及んで帰る。
六月三十日　晴。午前石崎生熊本より来着。午後出て安原を東和に訪ひ，又た太田八十馬を敲く。同県人にして陸軍大尉たり。芝罘駐在を命ぜられ赴任する者也。三時帰る。太田来り訪ふ。小田桐又来談。晩藤森茂一郎の漢口に帰るを送る。
七月初一日　晴天。午前對馬来訪。午後太田八十馬来談。出て安原，東條二氏を東和に敲き，東條と共に林正則を訪ひ小談，帰る。東條来問。六時安原氏の饗に東和洋行に赴く。夜安原，太田，東條，林諸氏と英界に散歩して帰る。芝罘田結領事，並に高垣，越山諸人に致すの書を作り太田氏に托す。本日不在中汪康年来訪せりと云ふ。
七月二日　晴天。午前九時安原，東條二氏の帰国を送る。東京井手，大坂鳥居に発信す。橋元，田村二生来訪。午後小田桐来問。四時汪康年を時務報館に訪ひ，談時を移て帰る。夜友永，對馬，林，小田桐等を敲き，九時帰る。
七月三日　晴。苦熱。午後對馬，小田桐来談。六時汪康年，林正則，太田八十馬等を招き晩餐を饗す。十時散ず。多田，河本来訪。蘇州荒井の詩信到。
七月四日　微雨。熱甚。午前太田八十馬来訪。午後又来。晩太田を東和に敲き，十一時帰る。
七月五日　晴午前九時太田八十馬の芝罘行を怡和碼頭に送る。午後小林生来訪。晩吉田順蔵を訪ひ，十時帰る。
七月六日　晴。是日第三十七号を東京に郵送す。午後上山良吉を郵便局官舎に訪ひ，談話時を移し，去て日清英学堂に至り，暮時帰る。夜林，小田桐等を友永に敲く。
七月七日　晴。午前野中文雄，河本磯平等来訪。是夜俄に漢口に帰らんと擬す。行李を収拾す。晩食後林，小田桐，對馬，勝木等を訪ひ別を叙す。熊本山田珠一，篠原，留守宅，高橋謙の信到る。留守宅，並に内田岳父に発信す。十時半大井川丸に上る。林正則，小田桐，對馬，松倉，河本，勝木，米良，石崎諸人来り送る。十二時開船。
七月八日　雨。午十二時江陰を過ぐ。午後八時鎮江に達す。三山隠々，瓜歩洲頭星火両三，晩景甚妙。

七月九日　晴。早過東西梁山。八時半達蕪湖。午後四時半過大通。是日朝より喫煙を禁ず。
七月十日　晴。午前十時二十分達九江。廬山の晴色殊に佳矚たり。半壁山以上両岸風光頗好。
七月十一日　晴。午前六時漢口に達す。午後藤森，市原，小田切領事，船津書記生等来り訪ふ。柳原又熊是日此地を辞し熊本に帰らんとす。則ち留守宅並に山田に復するの書を作り之に托す。夜柳原を大井川丸に送る。
七月十二日　晴。
七月十三日　商船会社森常太来訪。
七月十四日　晴。夜緒方，井口，藤森，市原，橘諸人来訪。
七月十五日　晴。午後小田切，船津を波楼に訪ひ，談時を移て帰る。岩越生沙市より来着。夜河南光山の周彤勲（用一と号す），光州梁肇川の添書を携へ来り訪ふ。周は挙人にして会試の帰途なり。梁氏今北京に在り。今秋返南，道漢口に出で余と相見ん事を約す。其の近著時務策一冊を送り来る。
七月十六日　晴。午後小田切，船津を訪ふ。夜金島文四郎の帰国を送る。
七月十七日　晴。午後岩越，小田切，藤森等前後来訪。東京井手，熊本留守宅，京都成田錬，熊本樗木等の信到る。夜居屈臣氏薬房失火。
七月十八日　晴。井手三郎に復書し，同文会弁法の意に満たざる者を責む。午後北京梁太卿に復書し亜東時報一本を送る。上海小田桐の信到。近日中北京に赴くと云ふ。晩小田切を元和船上に送る。
七月十九日　晴。午前堺與三吉来訪。本日来着せりと云ふ。四川重慶領事館に赴任する者也。是日東京に第三十八号信を発す。午後周用一を堤口の豫豊謙に訪ひ，河南胡慶煥に致すの書信を托す。晩緒方二三，木野村成徳の帰国を鄱陽船上に送る。藤森，野中，井口市原等来談。
七月二十日　晴。商船会社より西瓜二個を贈り来る。晩東肥を訪ふ。
七月二十一日　晴。夜藤森来訪。
七月二十二日　晴。午後堺與三吉，武田二人来りて別を告ぐ。本夕より重慶に赴くと云ふ。五時其行を沙市輪船に送る。夜東肥を訪ふ。船津来訪，明晩上海に下ると云ふ。
七月二十三日　微雨，涼味可人。午後船津来り，別を告ぐ。夜船津生を江孚船上に送る。
七月二十四日　晴。熊本留守宅，大坂鳥居，東京橋元齋次郎の信到る。夜東肥を敲く。
七月二十五日　晴天。是日熊本留守宅並に安原に発信す。午後市原来訪。熊本松倉，上海石崎の信到る。夜井口，瀬上，宝妻，浅井等来訪。台湾岡本源次の信到る。
七月二十六日　陰。午後熊本留守宅，芝罘平島大尉の信到る。是日橘氏天龍川にて帰朝の途に就く。晡時之を東肥に訪ひ，上海河本磯平，石崎某に致すの書を托す。
七月二十七日　陰。気如秋。
七月二十八日　半晴。早起冷気深秋の如し。午後藤森来談。東京安原に発信す。夜東肥を訪ふ。
七月二十九日　雨。午後白岩龍平の信並に素麺一包を贈り来る。本月二十二日上海に来着せりと云ふ。白岩に復書す。
七月三十日　陰。夜東肥に至る。
七月三十一日　晴。晩東肥を訪ふ。
八月初一日　晴。上海小田切領事の信到る。午後河南光州の人程杏芳，胡書漁の信を携へ来り訪ふ。安慶楊の信到る。其の別信を河南光州梁氏に転□を乞ふ。即ち之を程杏芳に托す。午後岡子発病，苦甚。即ち医を招て之を診せしむ。
八月二日　晴，熱甚。岡病尚劇，再び医を延て之を治す。四川重慶本部生の信到る。近日帰朝の途に上ると云ふ。
八月三日　熱気殊甚。東京井手三郎の信到る。夜東肥を訪ふ。
八月四日　晴。本部岩彦重慶より来着。七月二十六日重慶を発せしもの也。夜藤森以下来訪。

八月五日　晴。熱甚。夜東肥を訪ふ。大日方工学士，上海小田切領事の添書を携へ来り訪ふ。盛宣懐の聘を受け馬鞍山の炭鉱に赴くもの，二年間の契約なりと云ふ。

八月六日　晴。上海船津，林二氏の信到る。林は帰朝を命ぜられたりと云ふ。芝罘越山，太田二大尉，北京小越，福州前田，中島，沙市永瀧，横田，野口，松平，重慶加藤，成田，上海船津等に寄書し帰国を報ず。夜本部の帰朝を送る。

八月七日　晴，炎熱甚酷。是日立秋たり。長崎橘三郎，上海河本等の信到る。

八月八日　東京井手，熊本山田，高木，柳原，福岡高橋謙，古島一雄，宮崎寅，熊本緒方，松倉，台湾七里列に致書し帰東を報知す。夜東肥を訪ふ。

八月九日　晴。蘇州片山敏，荒井益に致書す。武昌太原武慶氏より味噌を贈り来る。昨日来着の森哲蔵より梶川大尉の書信を転致し来る。

八月十日　微雨。午後藤森来訪。井戸川辰三亦来訪，本日来着せりと云ふ。陸軍大尉にして，四川重慶に赴く者也。東京井手，梶川，高山，宮嶋大八，京都根津一よりの添書を携へ来る。梶川より東部地図一面を井戸川に托し贈る。是日軍艦愛宕沙市より来着。行て之を訪問す。

八月十一日　晴。午前諸子と江を渡り武昌に至り，太原武慶等を武備学堂に訪ふ。井戸川亦在焉。中餐の饗を受け，三時辞帰。

八月十二日　晴。午前熊本留守宅の信到。妹田鶴新屋敷横田氏に出嫁の事確定し，本月五日婚礼を挙行せりと云ふ。東京井手三郎，熊本松倉善家，芝罘太田八十馬，上海汪康年，東京安原列の信到る。又た熊本柳原の信到。井戸川大尉，殖田海軍大尉来訪。晩餐を設けて知人と会食す。

八月十三日　晴。熱甚。井戸川大尉来り，前途の諸事を商量し，予の意見を敲く。且つ曰く，目下東京有志の士官民と無く皆君の一挙一動に注目す，帰京の日幸に自重せよ云々。東京橋元齋次郎より東西年表並に雑品数点を贈り来る。

八月十四日　晴。熱気如洪。午後理学博士吉田彦六郎来訪。農省務の嘱託を以て湖北建始県に赴き漆山を視察すと云ふ。愛宕艦長成川揆，並に軍医長来訪。夜吉田を訪ふ。上海実相寺の信到る。

八月十五日　陰天。熊本井手三郎に発信す。河南胡書漁，梁太卿，重慶楊子荃等に致すの信を発す。晩東肥を訪ふて別を叙す。

八月十六日　晴。是夜天龍川丸にて此地を辞し上海に下り，然後日本に帰らんとす。午後文科大学生中山久四郎来訪，清国の現勢を敲く。井口，濱崎亦来。井より金百元を返却し，晡時井戸川大尉来訪。七時上船。館中諸員並に井戸川，井口，藤森，中山，福島，神坂，今西，市原，岡等来り送る。九時半開船。夜熱甚。

八月十七日　晴。午前九時九江を過ぐ。廬山の晴色殊に佳矚たり。午後五時安慶府を過ぐ。

八月十八日　晴。七時蕪湖発，十一時半南京を過ぐ。午後三時二十分鎮江に達す。南洋兵船鏡清号此に碇泊す。夜雨。

八月十九日　雨。正午上海に達す。独逸に在りて定造せし北洋の新艦海籌号並に南洋の老船南瑞号碇泊す。豊陽館に投ず。夜石崎，對馬来訪。

八月二十日　晴。片山敏彦蘇州よりの来信に接す。直に之に復書し，其の上海に来るを促す。午後船津を訪ふ。熊本留守宅の信並に宮崎寅，平山周，土屋員安，江崎嘉蔵，仏蘭西福本誠，東京清浦奎吾，松平正直諸氏の書状来着。汪康年に晤す。晩白岩龍平，井上雅二，對島機，大学生五來欣造等来訪。

八月二十一日　陰。午前井上雅二，末永節，橋元祐蔵，田村忠一等来訪。午後姚文藻，牧巻次郎，安藤虎雄，香月梅外等来訪。仏国福本誠に復書す。晩寺田弘範，白岩龍平，河本磯平，山根虎之助等来談。

八月二十二日　晴。午前宮坂九郎，井上雅二来訪。是日五来の上漢に托し，岡幸七，東肥諸人に寄書す。甲斐寛中，田村忠一来訪。午時姚文藻，汪康年来訪。夜日清英学堂，並に對馬を訪ふ。東京安原

の信並に森井生の信到る。
八月二十三日　陰。朝実相寺貞彦来訪。下午白岩龍平，小林新六，船津辰，對馬機等来訪。夜学堂を訪ふ。汪康年より明晩万年春に招邀。
八月二十四日　晴天。午前上山良吉来訪。午後白岩龍平，牧巻次郎，中山久四郎来訪。白岩と出て郵船碼頭に至り人を迎ふ。留守中木野村成徳来訪せりと云ふ。是日宮崎寅三，平山周来着。
八月二十五日　晴。片山敏彦，荒井益蘇州より来る。末永節，宮崎寅三，平山周等亦来訪。酒を命て共に飲む。井上雅二，甲斐，田村，木野村，梅津，山根諸人亦来り訪ふ。是日井上，木野村等武漢の地に赴く。東肥，漢報館並に大原武慶に致書す。晩白岩，荒井，山根，梅津，片山諸人亦来訪。九時東和に宮崎，平山二人を訪ひ留宿す。
八月二十六日　晴。午前片山，宮崎，平山等と汪康年を訪ふ，在らず。帰途実相寺並に学堂諸氏を歴訪して帰る。午後領事館に至り船津，諸井，上山等を訪ひ辞別。晩汪康年の案内にて四馬路万年春に至り会飲す。会する者汪，姚，白岩，片山，宮崎，平山及び予也。十一時散ず。白岩，荒井，河本，牧，香月，對馬等諸人来り，別る。荒井送詩あり。
八月二十七日　土曜日。陰天。午前六時小汽船より呉淞に向ひ本船西京丸に搭ず。對馬，荒井，平山，宮崎，河本，石崎，吉田，牧，白岩，上山，諸井等来りて埠頭に送る。白，牧二人送りて呉淞に来り，別る。七時半開船。午後風狂浪怒暈気頗催。
八月二十八日　雨風濤益暴，船体掀盪。夜十二時長崎港口に入る。
八月二十九日　晴。午前三時上陸。土佐屋に投ず。是日東京宮嶋大八，京都根津一，田鍋，成田，大坂鳥居，台湾岡本，津山土屋，熊本緒方列，佐々友房，東京高山公通，梶川重太郎，齊藤力三郎，宇都宮太郎。鹿児島樗木成章，東京福島安正，安原金次等諸知人に発信す。又た東京中西正樹，井手三郎列に致書す。中知秀吉来訪。鎮西日報社長佐々澄治，同主筆岩永八之亟来訪。
　是日天未明船入崎陽口，占七絶一首
　南船北馬飽風霜，又趁秋涼帰故郷，十八長湾々一曲，萬千燈火是崎陽。
八月三十日　晴。午前笹澄治，岩永八之亟二氏を鎮西日報社に訪ふ。午後佐々，岩永，西田三氏来り別る。五時停車場に至り汽車に乗ず。薄暮大村湾を過ぎ大村駅に着す。
八月三十一日　晴。午前二時半鳥栖に達し，換車熊本に向ふ。夜来秋涼如水衣葛を襲ふ。五時熊本池田に達す。上車，千反畑の自宅に帰る。午前教育時論社辻武雄来訪。数日間来りて余の帰来を待てりと謂ふ。清国に歴遊の志あり，予に紹介を請ふ。即ち知人数名に与ふるの名片を附す。橘三郎，松倉善家来訪。午後佐々友房氏を訪ひ，談話時を移し，去て支那店に到り，黄昏帰宅。
九月一日　晴。午前橘三郎，午後齊藤国雄来談。午後鎮西館に至り二三子に面し，去て妹婿横田氏を安政橋に訪ひ，其の家族に面し茶話刻片，去て大江に到り晩餐の饗を受け，八時辞帰。山田，内藤，葉室等来訪せりと云ふ。
九月二日　雨午前兵学校生吉田幸雄来訪。午後緒方二三，勝木恒喜，藤本親信，松田満雄，多田亀毛等来訪。
九月三日　陰。午前井手三郎，橘三郎，葉室諶純，松倉善家，佐々友房，小倉之正諸氏来訪。晩一日支店の会に赴き，十一時帰宅。大坂鳥居赫雄の信到る。
九月四日　晴。隣家平井来訪。井手三郎，木下卯三郎，柴田常三郎，春日某等前後来訪。晩精養軒の会に赴く。佐々友房，井手，山田，安達，木下卯，井芹及び余の七人なり。十二時散ず。
九月五日　晴天。午前柴田某来訪。柳原又熊の留守宅を訪ひ，去て海軍省よりの送金を郵便局より受取て帰る。午後葉室来訪。橋本齋次郎，七里恭の信到る。河口宅の晩餐に赴く。毛利篤，太田千尋来訪せりと云ふ。夜緒方二三来訪，前借二百元を還して去る。
九月六日　晴天。午前兵学校生徒齊藤，上田，磯田，春日，太田五人来訪。皆他年有望の徒なり。午後

出て毛利，山田等を誘ひ去て支那店に至る。緒方，藤本等と開陽亭に至り晩餐す。八時帰る。是日東京安原，上海宮崎寅，平山周，白岩龍，福州前田彪，芝罘平原大尉，東京岡次郎等の信到る。

九月七日　晴天。午前牛島實吾，篠原由雄来訪。上海知人一同並に漢口知人一同に致書す。晩齊藤国雄，井芹経平来訪。

九月八日　晴天。荘村秀雄，佐々友房氏の添書を携へ来り訪ふ。葉室，片山（敏彦の弟）亦来談。午後上田仙太郎来訪，西伯里より帰来せる者也。東京中西正樹の信到る。松田満雄来訪。京都根津一，津山土屋員安，橘三郎の信到る。夜内人と大江に至り，九時帰る。留守中古城貞吉来訪せりと云ふ。

九月九日　晴。午前多田亀毛，毛利篤等来訪。佐々氏の信到る。午後毛利，佐々二氏を訪ひ，談話時を移し，去て白水館の旧友会に臨む。会する者二十八人，即ち浅山，宇野，葉室，毛利，米原，井手，野田，島田，古城亀，久野尉，永野金，池邊源，津野，古荘虎雄，狩野直次，伊佐，西才，門池，武藤虎，吉岡範，板井，平山岩，冨永九八，江藤修敬，松田満以下三人。十時帰る。是日漢口岡に発信す。

九月十日　晴。午前井手三郎来訪。午後北御門松二郎来訪。上田仙太郎の信到る。午後妹婿の初入り有り，客を宴す。主賓合せて十二人。九時散ず。平山岩彦来訪。

九月十一日　午前晴，午後微雨。鎮西館，支那店に抵る。夜九時帰る。高橋謙の信到る。

九月十二日　晴。漢口岡，芝罘平山，京都成田の信到る。

九月十三日　晴。福岡高橋謙，東京安原金次に発信す。徳田生来訪。夜大江に至る。

九月十四日　雨。兵学校生齊藤国男，陸軍大尉高山公通の信到る。晩米原を訪ひ，去て葉室を誘ひ，古城貞吉を京町に敲き，九時帰。

九月十五日　晴。荘村，奥村前後来訪。午後松倉善家，武藤栄亀来訪。

九月十六日　晴。午前九時宇土に至り，法華寺，城山の先塋に展し香花を供し，一里，城の浦の両親戚並に細川子爵邸に名刺を送り，帰途川野簾を訪ひ小談。二時藤本と共に同車帰熊，支那店にて晩食。九時帰る。東京上田仙太郎の信到る。

九月十七日　晴。東京中西，宇土篠原，島原橘，東京山内に発信す。山内には漢口商船会社支店長と為らん事を申送けり。外に上海白岩，石崎並に汪康年に致すの書を作り，明日多田氏入清の便に托せんとす。香港宮崎寅蔵の信到る。夜葉室を訪ふ。

九月十八日　晴。東京上田仙太郎より写真を送り来る。午前多田亀毛の清国行を池田駅に送る。是日宇土壮年会の定日たり。佐々氏より同行を促し来る。事を以て辞す。米原，池上来訪。晩内人と新屋敷横田氏の招邀に赴き，九時帰る。

九月十九日　晴。朝矢野老来談。午後井手三郎来訪。共に出て支那店に至り，夜九時帰る。留守中北御門等来訪。東京田鍋安之助の信到。

九月二十日　晴天。朝橘三郎来訪。午前東京福島安正，漢口岡幸七，台湾亀雄の信到る。晌午井手，松倉，橘等来り，水前寺の遊を誘ふ。即ち晌午橋より車を駆て水一方園に至り，画湖の鮮を割て飲み，夕陽帰る。帰途横田氏を訪ふ。徳田生の信到る。夜橘を訪ひ，去て支那店に至り井手，松倉等と談じ，九時帰る。

九月二十一日　晴。

九月二十二日　晴。鳥居赫雄の信到る。鳥居並に東京田鍋に返書す。夜米原繁蔵来談。

九月二十三日　晴。午前山田珠一，橘三郎，徳田廣等来訪。橘は本日動身漢口に赴くと云ふ。出て支那店に至り，山田夫，松倉善家を誘て中食す。山田本日起程，上海の大同訳書局に赴く者也。九時帰る。留守中古城貞吉，葉室等来訪せりと云ふ。

九月二十四日　晴，晩雨。午前毛利篤来訪。共に出て鎮西館，新聞社に至る。本日東京より電報あり。月の二十一日清国西太后再び万機を摂政するの上諭を発し，同時に皇帝の崩御を発表せり。帝は弑に

逢ひし者にて工部主事康有為が嫌疑者として逮捕令を発せられ，又た総理衙門大臣張蔭桓の職を免ぜられたり。上海白岩，東京安原，大坂鳥居，井手等に発信す。午後松倉善家，葉室諶純来訪。

九月二十五日　雨。午前国友重章来談。東京中西正樹，上田仙太郎の信到る。

九月二十六日　晴。重慶領事加藤，上海白岩，石崎，漢口岡，柳原，井口，宦，大坂緒方，京都根津，台湾本田等の新到る。大内暢三に致書其の大人の死を吊す。漢口岡，柳原に復書す。午後国友重章を白水館に訪ひ，去て支那店に至り，夜帰る。

九月二十七日　陰。朝葉室諶純，上田賢象来訪。午後井手，松倉，古城来訪。晩餐後井手，松倉と共に出て毛利，佐々二氏を訪ふ，皆在らず。支那店に至り，九時半帰宅。上海多田亀毛，東京高山大尉の信到る。

九月二十八日　雨天。午前井手と新聞社に会し，葉室朝鮮行の事に付き毛利等と交渉す。去て高木を訪ひ，支那店に至る。深水十八，松倉，勝木，藤本等在焉。四時帰る。九州日報社古島一雄，小倉高橋謙の信到る。古島が清国事変の起因並に将来の時局に関する質問に答ふるの書を作り，之を郵致す。外に高山公通，篠原由雄に致書す。

九月二十九日　陰天。午前佐々友房氏来訪。明日三四人会合の事に付き商量す。午後東京安原金次，福岡大内暢三の信到る。

九月三十日　雨。午前五時江口宅に至り，藤崎宮の御幸を見る。午前松倉，牧来訪。午後出て新聞社に至り，毛利，板井等と小談。五時半静養軒の会に赴く。佐々，国友，安達，井手及び予の五人なり。東方問題其他を商量し，十二時雨を衝て帰る。

十月一日　雨。香港宮崎寅蔵の信，東京中西，田鍋の電報到。中西等予の東上を促す。中西列に返信す。上田賢象，永原虎雄，津野一雄等前後来談。午後支那店に至り井手，松倉等と談じ，九時帰る。

十月二日　積陰，秋気頻催。朝北御門来訪。大坂鳥居赫雄の信到る。東京海軍々令部に支那政変に関する意見書を送る。夜池邊源太郎，嶋田数雄来訪。是日始て羽織を着く。

十月三日　陰天。午前矢野老来訪。午後井手三郎，樗木恒喜来訪。勝木は明日起程上海に赴くと云ふ。夜古城貞吉来談。大坂鳥居赫雄の信到る。

十月四日　陰天。午前毛利篤来訪。葉室朝鮮行旅費に付き毛利と予と両人借主となり金円を借入るゝ事の相談纏りしを告ぐ。山田珠一，葉室諶純，徳田弘等来訪。上海白岩より今回北京政変の詳報を送り来る。兵学校生齊藤の信到る。大坂鳥居，東京安原に上海の通信を転致す。午後六時大江に至り出水神社奉納の花火を見る。十時帰る。

十月五日　微雨。午前木下卯三郎来談。北京平山周，芝罘太田八十馬，上海山根虎之助の信到る。午後新聞社より支那店に抵る。松倉の東道にて山田九郎と三人出て鰻飯を食ふ。九時帰る。

十月六日　晴天。午前山田夬来訪。本日上海より来着せりと云ふ。牛嶋某，川野廉前後来訪。佐々友房氏の信到る。午後之に復書す。清国政変に関し質疑する所あり。直に書を作りて之を答ふ。津山土屋，東京高山，中西の信到る。武藤虎太を訪ふ，在らず。

十月七日　晴天。土屋員安に返書す。葉室，上田等来訪。晩葉室離杯の案内至る事を以て辞す。

十月八日　晴。横田五郎来訪。晩国友重章，武藤虎太，葉室諶純，松倉善家四人を招き晩餐を饗す。東京岸田吟香の信到る。予の上京を促す。

十月九日　晴天。朝毛利等を訪ひ，去て支那店に至る。井手亦来会。帰途大江に至り，五時帰る。中西正樹の電報到る。康有為を日本に保護するの可否を問ひ来る。夜安原に発信。康有為を保護するの対清政略に害有るを説き，宜く之を英人の手に委すべきを告ぐ。大江岳父，横田五郎を邀へ晩餐を共にす。

十月十日　晴天。朝福島安正，安原金次に致書，康有為を日本に引受け保護するの不利を詳論す。支那店に至り中西正樹に返電し，更に書を作りて言ふ所有り。松倉の為に牛荘領事田邊熊三郎，芝罘領事

田結，天津領事鄭及び越山，高垣，太田に致すの添書を作る。岸田吟香翁に復書す。別に北京平山周，小越平陸に致書す。午時井手の東道にて松倉と三人開陽亭に至り洋饌を吃す。夜一日会員の招きに応じ鎮西館に至り，一場の談話を為し，九時帰る。東京中西に復書し康有為保護の不可を論ず。東京安原金次，大坂鳥居，佐野，天津平山周，漢口井口等の信到る。安原報じて曰く，予が本月二日郵送の清国政　変に関する意見書，乙夜の覧に供せりと云ふ。

十月十一日　晴天。大坂鳥居，東京田鍋，漢口岡，上海白岩に致書す。安達謙造，松倉善家来訪。午後支那店に至る。松倉，井手，山田夬，平山諸人来会。夜十時松倉善家の支那行を送る。井手亦た此夕を以て京都に赴く。同車送りて池田駅に至り別る。十二時帰宅。角田海軍少将岡次郎の信到る。

十月十二日　晴。鳥居赫雄の信到る。午前上田，牛島，川野廉来訪。午後池畑来訪。三時出て精養軒の招待会に赴く。市長辛島格，岡崎唯雄，県参事安河内麻吉三人発起し，係はる会者徳久県知事，佐々友房，大畑純次，松山守善，古城弥一郎，犬飼真平，東爽　五郎，蔵山昌親，迫源治郎，下田耕三，山田珠一，高岡玄真以下八九人，予及び国友，安達来賓たり。国友，安達，予の三人各一場の談話を為す。了りて洋饌の饗有り。八時辞帰。商業学校生三人来訪。

十月十三日　晴天。午前野田正，井芹経平，荘村秀雄，葉室諶純来訪。葉室に釜山領事伊集院彦吉への添書，野田，廈門領事上野専一，沢村繁太郎への添書，並に商業学校生徒上海へ修学旅行を為すに付き小田切上海領事，白岩龍平，勝木等へ添書す。午後米原を訪ふ。夜柏木，中根，米山来談。東京中西より香港宮崎の信を転致し来る。

十月十四日　晴。午前支那店に至り，帰途鎮西館に山田，平山，安達等と会す。東京海軍軍令部より報酬五百二十円を送り来る（十月より来年正月に至る四ヶ月分）。

十月十五日　晴。午前野田正，上田，福岡人末永節及び山田夬等来訪。晌午緒方二三来談，本日来着せりと云ふ。東京中西の信到る。午後軍令部高橋副官並に安原に致書す。午後支那店に至り人に托し軍令部の送金五百二十元を銀行より受取り，福永の預金定期預とし，別に二百五十円を九州日々新聞社に預り，夜末永節，山田夬来訪。井手三郎京都の信到る。

十月十六日　晴天。午前河口，葉室，徳田来訪。東京福島安正の信到る。午後鎮西館に至る。安達，山田皆在らず。去て葉室に抵る。三時静養軒に至る。五時清韓曾遊会を開く。会する者高田露，佐々友房，岡崎唯雄，佐藤潤象，佐藤敬太，村上一郎，日下部正一，山田夬，山田珠一，末永節，古荘弘。古城貞吉，山田九郎，緒方二三，牧，赤峰，池畑，伊藤忠雄，国友重章，有吉虎若，相部直熊以下十余人。九時帰る。東京井上雅二の信到る。留守中井芹来訪。

明治三十一年十月

十月十七日　晴。朝井芹経平来訪。香港宮崎寅蔵，上海白岩龍平，漢口岡，柳原，北京小越平陸，東京田鍋安之助の報告到る。皆報ずるに清国形勢の急迫を以てす。午後山田珠一来訪。緒方二三，藤本親信来り，別る。東京安原に上海通信並に香港の通信を郵寄す。夜徳久知事より県属を使者とし名刺を送りて予の行を送る。書翰を作りて之に答ふ。是夜終列車にて上京せんとす。行李を整頓す。十時半池田駅に至り，十一時の汽車に乗ず。夜冷気身に逼り安眠すべからず。

十月十八日　晴。汽車に故障有り。進行甚緩。午前九時半漸く門司に達す。石田に投て休憩。午後三時山陽汽船の上等室に搭ず。夜八時船徳山に達す。九時の汽車に乗じ大坂に向ふ。

十月十九日　陰。零時三十分大坂に達す。深水氏の寓，南本町三丁目竹内方に投ず。鳥居，佐野，松田来訪。井手に京都に電報す。夜井手三郎，中島真雄前後来会。十一時深水氏を辞し井手と広小路鳥居の寓に到り宿す。雨。

十月二十日　雨。佐野，深水二氏来会。午後三時井手と深水氏の寓に到る。六時大坂朝日新聞社の招飲に平野町堺卯に赴く。社員久松，須崎，鳥居以下七人来会。八時辞して今橋二丁目紫雲楼に中嶋真雄

に会す。談話十一時半に及で帰る。

十月二十一日　陰。午前鳥居氏を辞し，深水氏の寓に抵る。井手十一時の汽車にて熊本に帰る。午後一時十二分大坂発の車に搭じ東京に向ふ。深水送りて駅に至り，周旋甚だ到る。

十月二十二日　陰。早起冨山を望む。白雪半峯，風趣言ふ可からず。八時四十五分新橋に達す。中西，井深，田鍋諸氏来り迎ふ。同文会に到り四人快談，晩に至る。土屋員安，橘三郎の信到る。熊本留守宅，並に古城貞吉，深水十八に発信す。夜近衛公爵を訪ひ，茶話時を移て帰る。途中平山を三橋に訪ふ，在らず。鄒殿書，孫文に致書す。

十月二十三日　晴。早朝安原を訪ひ，去て松平正直を敲き，談話時を移し清浦奎吾に抵る，在らず。名刺を留て帰る。岡次郎，中野二郎，井深仲卿，田鍋安之助，大内暢三，向野賢一等来訪。留守中宮島大八来訪せりと云ふ。晌午孫逸仙に三橋に会す。平山，可兒等在焉。午餐を共にし，二時帰る。晩中野の招邀に一旗亭に赴く。懽談八時に及で帰る。田鍋来宿。是夜会者中野，中西，田鍋，井深及び予也。

十月二十四日　陰天。午前八時田鍋と上車。淡路町万世倶楽部に赴き，東亜会員犬養毅，平岡浩太郎，池邊吉太郎，江藤新作，大原武剛，井上雅二, 三宅雄二郎，佐藤宏等と会し，我同文会並に東亜，東邦協会，亜細亜協会等の大合同を謀る。我党より出席する者中西，田鍋，井深，中野，及び余の五人なり。十時会散ず。銀座に岸田を訪ひ，去て軍令部に至り伊東軍令部長，諸岡次長，安原大佐等に面し，対清の方策に就き大に意見を陳す。午後西郷海軍大臣の約に赴く。清国経略に関する持論を説話す。大臣悦ぶこと甚し。曰く，去年来彼国の形勢皆貴説の如く推移し来る。軍国の為に得る所多し。謝する所を知らずと。余事有るを以て再会を約て去り，清国公使李盛鐸を訪ふ，在らず。故人鄒殿書を見る。倒履相迎へ歓談時を移す。鄒は江西の名士なり。平山周，田鍋安之助前後来訪。井上雅二，緒方二三の信到。河口介男に発信す。

十月二十五日　雨天。午前井深，田鍋来訪。午後近衛公爵来過。中野，大内等亦来会。議事時を移し，晩新橋浜の家に至り，近衛公以下中野，大内，中西，田鍋等と会飲。時事を暢談して三更に到る。十時半諸氏に別れ，田鍋と新橋に至り康有為の一行を迎ふ。宮崎寅蔵同く到る。十一時半帰寓。是日清国志士鄒凌瀚，並に公使館員廖宇春来り訪ふ。談時を移て去る。大隈総理大臣，明日午前十時外務にて会見の事を通牒し来る。

十月二十六日　晴天。朝荒井甲子之助来訪。昨夜上海より要事を齎らし帰着せる者なり。末永節，山田夬，山下稲三郎等来訪。十時大隈総理の約に赴く。是日大隈並に鳩山次官等と会見の筈なりしも，尾崎文部辞職問題の為め昨夜来憲政党内部に葛藤を生じ，内閣の動揺を来したるに因り大隈，鳩山共に主務省に出頭するを得ずとて，秘書官加藤常太郎をして違約を謝せらる。去て参謀本部に至り福島安正を訪ひ，十二時帰る。午後宮崎寅蔵，平山周，向野堅一等来訪。宮崎，平山と上車，早稲田に至り孫文に会す。予は柏原文太郎（専門校幹事）と共に鶴巻町四十番地に至り，亡命の客王照，梁啓超二人を見る。梁は予の故人なり。手を握て一笑，新を談じ旧を話し，時を移て別る。二人皆髪を断ち洋服を著く。薄暮帰寓。山下稲，平山周，宮崎寅，井上雅二，西田龍太，岡次郎等交も来訪。岡氏葡萄酒六本を贈る。中西，宮崎，平山等と談，十一時に及で散ず。是日黒田枢密院議長より照会あり。明日午前予と面談を求め来る。安原来訪。

十月二十七日　陰天。朝荒井，田鍋，安原大佐等来訪。十時上車，芝三田に黒田伯を訪ふ。容貞一野翁の如く，恭謙士に下り礼遇具さに至る。曰く，本日貴下の来駕を煩し清国の時事並に将来の帰向に付き高説を聞んと欲す。特に宮嶋誠一郎，道家秘書官をして坐に陪せしむと。質問頻りに起る。予現勢及び将来の変局と国家の之に応ずるの方法を挙て詳説す。黒田氏悉く秘書官をして筆記せしむ。十二時午餐の饗あり。談話午後三時に及で辞し帰る。田鍋，中野，宮崎，平山前後来訪。上海白岩の信到る。林市蔵の信到る。近衛公より松茸を贈り来る。

十月二十八日　雨天。朝大坂朝日新聞社吉村平造来訪。熊本留守宅より沙市松平の書信を転致し来る。井手三郎に発信，合同の顛末を報ず。遠藤留吉来訪。午前十時上車，海軍省に至り安原に面し，去て岸田吟香を銀座に訪ふ。中餐の饗を受け，転じて谷中初音町全生庵荒尾精の墓に展し，其の三回忌の法会に列す。香料五円を供す。会者小山秋作，中野，中西，佃，田鍋，杉山，原，川嶋，岡，井上等十六七人。畢て中西と共に帰る。清国全権公使李盛鐸並に鄒凌瀚等来り訪ふ。梁啓超の信到る。夜山下稲三郎，川島浪速来り訪ふ。八時麹町三橋に平山，宮崎，大原義剛，中西等と会す。大原福岡人有為の才也。

十月二十九日　晴天。荒井，山田夬等来訪。十時宮崎と横浜に至り孫文を訪ふ。午時孫の寓に於て楊衢雲，譚某等と洋饌を食す。午後孫，楊等と清国会館に至る。結構壮麗。茶話少時にして，黎煥垣を訪ふ。晩陳植臣主人と為り，孫，黎，譚兄弟と共に予を東印度商会の楼上に饗す。膳部は正式の広東料理にして，十二碟十六碗，山海の珍味悉く具はり，接待甚だ到る。快談七時半に及で辞し帰る。席上印度人二名有り。膳部の周旋を為す。二人能く邦語を解す。曰く，不日印度料理を備へて貴客を待たんと。九時汽車新橋に達す。途上大原武剛を信濃屋に訪ひ小談，帰る。

十月三十日　陰天。午前山田珠一，荒井，鄒凌瀚，田鍋，柏原等来訪。根津並に熊本留守宅に発信す。午後上車，麹町一丁目に至り橋本齊次郎を訪ひ小談，去て小山秋作を敲き，転じて神田連雀町に佐々友房，山田珠一を訪ひ，佐々氏の処にて三人会食し，談話深更に及んで宿す。宇都宮太郎の信十二時半に至る。

十月三十一日　晴。早朝山田と今戸に至り長岡護美子を訪ひ，談話時を移て帰る。山田の寓に小休し，早稲田鶴巻町に梁啓超，王照二人を訪ふ，在らず。名刺を留て別を為し，柏原文太郎と共に康有為を加賀町に訪ふ。湖南南学舎の代表書唐才常在焉。唐は湘中の志士義兵を挙んと欲するを以て日本に来り。兵を借り兼て声援を請ふ也。康有為頻に援助を乞ふ。予曰く，政府決して軽しく兵を出さず，只だ時会にして到らば求めざるも助けんのみ，独り我輩能く力を義軍に添へ諸君の志望をして全からしめんと期す云。康曰く，南学会員約一万二千名，皆上流の士子，前任湘撫陳宝箴之が会頭にして徐人鑄，黄公度，之が副たり，湖南の動力実に此会に在り，一旦事発せば直に進で官軍の能く戦ふ者は袁，聶，董の三軍，合計三万人に過ぎず，義軍進で湖北に入らば張之洞に応ずるの約有り云々。談話十一時より午後二時に及で帰る。池邊吉太郎，宇都宮太郎等来訪せりと云ふ。晩田鍋，岡，宮崎来訪。池田末雄の信到る。鄒凌瀚来談。

十一月一日　陰天，風大。朝遠藤生来訪。上車，出て宮島大八を訪ひ小談。去て近衛公を訪ふ，在らず。転て三橋に至り宮崎を敲き，九時軍令部に安原を訪ふ，在らず。午後松本正純来訪。晩渡邊魁来訪。続て池邊吉太郎，田鍋安之助，川島浪速，小山秋作，原聞一，佐藤宏，佐々木四方志，並に湖南人畢永年，唐才常等来訪。唐は湖南南学会の代表者にして義兵を湖南に挙んと欲し，我同志の助力を借らんが為に来れり。予之に懇諭し，暫く沈潜，時機を待ち此間専ら準備を為し予の渡清を待ちて方略を妥定せん事を約す。談話十時に及で散ず。林市蔵，池田末雄，白岩龍平に復書す。

十一月二日　陰天。朝荒井来訪。八時安原を麻布に訪ふ。途中之に逢ふ，立談片刻。去て清国公使館に至り公使李盛鐸を見る。暢談時を移す。李頻りに清国政変前後の情形を説く。恰も予の当時忖度する所の如し。李曰く，此次の政変を観測するの要点は，太后，皇帝を廃するの宿謀を以て観察の根幹と為せば，枝葉自ら分明ならん。康有為は間接に太后に致さん断髪易服を皇帝に奏請し，帝をして殆ど之に同せしめたるが，太后直に之を以て奇貨と為し，平素の素願たる皇帝を斥けて其政権を奪ひやる也，且つ太后の人を用ゆる，朝に信じて夕に之を疎んじ喜怒常無く，甚しきは最愛の宦官李蓮英の一言に聴て大臣を任免するに至る。又曰く，栄禄は皇帝保護に忠なる者なり，帝の無事至るは栄擁護の力なり，太后の権柄を以て栄を動かし能はざる所以の者は聶，董等の軍隊皆節制に帰し兵士の心を得る事深く，若し之を動かせば軍隊の内叛有らん事を懼るればなり。又曰く，守旧派の首領は徐桐，剛

毅等にして，皇太后，李鴻章は露国の勢に依頼し国事を料理せん事を期する者なり云々。鄒殿書，馮孔懐亦来り陪す。十一時辞帰。白須貞来訪。午後一時神田万世倶楽部の東亜同文会の大会に出席す。近衛，長岡，岸田，三宅，池邊，安東，中野，佐藤，井上，宮崎，中西，山田，末永，財部，原口，佐々木以下会する者三十余人。五時佐々木に佐々，山田二氏を訪ひ小談，帰る。晩田鍋，荒井，尾本，西田，駒澤，山下等来り訪ふ。熊本留守宅より芝罘平原の信を転致し来る。河口介男の信到る。安原を訪ひ小談，帰る。是日山田珠一に托し池田末雄に亀雄の食費不足六円余を送る。

十一月三日　雨天。天長節。朝亀井英三郎来訪。正午車を命じ風雨を衝て支那公使館に至り鄒殿書を訪ひ，西郷氏への添書を交付し，去て亀井を四谷に訪ひ小談。転て鶴巻町に赴き梁啓超，王照二人を見る。談論黄昏に至る。梁頻りに予に説くに湖南の急を以てし，速に援助の策を定めん事を乞ふ。予之を慰藉し暫く隠忍せしむ。二人に別を叙し，去て神田に至り佐々，山田二氏に会し晩餐を共にし，三人連床，夜話深更に至り寝に就く。

十一月四日　陰晴無定。午前岸田吟香，山田夬，田鍋安之助，池邊吉太郎来訪。正午池邊と出て一旗亭に至り中食を共にし，談話時を移て別る。漢口岡，上海白岩，宦，熊本留守宅並に井手三郎の信到る。夜荒井，田鍋，小川等来談。宮島大八来り，菓子一箱を贈る。京都根津，大坂深水に発信。

十一月五日　晴天。朝宮崎，西田等来訪。午後宮島大八来訪。岡次郎，中野二郎，中西重太郎等亦来訪。五時同文会を辞し，新橋六時発の汽車にて帰程に上る。中野二郎，宮崎寅蔵，中西正樹，宮島大八，孫文，平山周，中西重太郎，今田主税，小川某，大原某，　岡次郎，田鍋安之助等来り送る。

十一月六日　晴。午前九時京都に達す。上車，若王子に根津一を訪ふ。晌午辞し帰らんと欲す。根津苦留已まず，酒を命じて小酌す。午後一時半辞して，七条停車場に至り，二時半の汽車に乗ず。二時四十分大坂に達す。南本町深水氏の寓に投ず。晩松田，鳥居二氏来談。

十一月七日　晴天。是日深水氏と同伴，先考の曽て命ずる所を継承し能勢妙見社に謁せんとし，午前五時寓を出で梅田停車場に至り上車。伊丹を過ぎ池田駅にて下車。腕車を雇て発す。池田町を過ぎ池田川の左岸に沿ひ渓山の間を縫ひ行く。約一里半許平野村に至る。人家二十許山間に在り，有名なる平野礦泉は断崖の下に湧出す。又行く一里半，二軒茶屋に小休し，険絶甚しく歩履頗艱む坂道を登る。十八町頂上に達し，茶店に投じ小憩。妙見祠に展し，本道を取て下る。十二時半吉川村に達し，津の国屋に投じ中餐し，一時出発帰途に就く。二時半池田駅に着す。茶店に小休，汽車を待つ。三時三十五分の車に投じ大坂に帰る。晩鳥居の招邀に築地多景色楼に至る。松田，深水と四人なり。九時帰る。

十一月八日　雨天。朝鳥居，松田，佐野，横田安止等来訪。午前十一時二十五分梅田発の汽車に乗ず。佐方重慶，横田，鳥居，佐野，松田，深水等来り送る。神戸にて山陽の列車に換坐す。夜十二時徳山に達し，汽船春日丸に搭ず。

十一月九日　朝雨。午前六時船門司に達す。直に上陸，七時二十分の汽車に乗じ，午後三時十五分熊本着。

十一月十日　晴天。東京中西，中島井手に発信す。東京安原，山田，並に白須貞に発信。白須に為替錯誤金三十円を返却す。九州日々社に高木を訪ひ，去て支那店に至り小談，帰る。

十一月十一日　晴。午前平山岩彦来訪。午後出て古川権九郎を訪ひ，去て大江より横田に至り晩食し，帰途米原を敲き小談，帰る。東京中西の信到る。畢永年湖南よりの電報に接し，近日西帰の事を報ず。朝鮮葉室の信到る。井手三郎の手書に接す。

十一月十二日　晴天。上海白岩，漢口岡に発信し，湖南の動静並に張之洞の近状を問ふ。井手三郎より其の厳君古稀寿宴の案内状を送り来る。午後出て支那店に至る。深水十八大坂より帰来。中島裁之亦来会。晩食後帰宅。宇土奥村宅より反物を贈り来る。

十一月十三日　陰天。是日午前九時鎮西館にて毛利，高木，平山等に会し，中島井手宅古稀の寿宴に列

せんとし，支那店に至り中嶋裁之を誘ひ上車。高橋，小島を経て中島に達す。会する者三十余人。午後四時井手氏を辞し，高木，毛利，嶋田，中嶋，板井，池邊，平山等と白水の堤に沿ひ徒歩して帰る。両岸の紅葉甚だ佳矚たり。夜六時半千反畑の宅に着す。

十一月十四日　微雨。女児清子の誕生日たり。五時より親戚を招き小宴を開く。夜古川権九郎，津野一雄，上田，牛島等来談。

十一月十五日　陰天，風大。漢口岡幸七郎の信到る。弟亀雄台湾より名古屋に帰着し，電報を以て金員を要求し来る。

十一月十六日　陰天。午後古川権九郎を訪ひ，三時帰る。晩食後古川を誘ひ町野一清を訪ひ，帰途津野一雄を敲く，在らず。途中之に会ふ。東京白須より返戻金三十円の受取を送り来る。

十一月十七日　雨天。東京安原金次の信到る。是日亀雄に金五円を郵便為替にて千葉県佐倉に送致す。

十一月十八日　秋雨蕭条。東京中西正樹，田鍋安之助の信到る。

十一月十九日　晴。京都根津一，東京山田珠一の信到る。東京中西正樹に復書す。北京松倉善家の信到る。晩井手に発信し，松倉に芝罘に復書す。是日上田賢象，深水十八，篠原由雄来訪。

十一月二十日　晴天。午前支那店に至る。井手，深水亦到る。中食後井，深二氏を拉し家に帰り談ず。四時二人辞帰。留守中高木正雄来訪せりと云ふ。仏国に在る福本日南の信到る。夜米原来訪。

十一月二十一日　陰天。午前國友重章来訪。長崎中島真雄の電報到る。東京宮島大八に写真一枚を送る。午後古川を訪ふ。晩餐の饗を受け，共に出て池邊を訪ふ，在らず。夜微雨。

十一月二十二日　積陰，欲雨。上海白岩龍平の信並に亜東時報到来。夜深水十八来訪。本夜より大坂に赴くと云ふ。

十一月二十三日　晴天。午前古川より呂宋煙草一箱を贈り来る。午後池邊源太郎来訪。晩宮崎寅蔵の信到る。

十一月二十四日　晴天。京都根津一，中島真雄，東京中西，田鍋，山田珠一，宮崎寅蔵等に発信す。中西正樹の信到る。午後井手三郎，高木正雄来談。大江より晩餐の案内あり，内人と共に赴く。九時帰る。

十一月二十五日　陰天。午前井手三郎来訪。中食後共に出て古川権九郎を訪ひ，三時帰る。晩井手，古川を招て食事を共にす。津野一雄亦来訪。井手留宿す。夜雨。

十一月二十六日　雨。午前井手辞し帰る。東京古城貞吉の信到る。午時鎮西館平山より書信を以て高瀬壮年会員の請求を伝へ，予の該地出張，一場の支那談を為さん事を請ふ。余之を辞す。

十一月二十七日　雨天。去年是日予膠州の警を聞き，郷を辞し清国に遊ぶ。上海白岩，漢口岡，緒方，柳原諸人に致すの書を作り，之を深水十八の漢口に赴くに托す。午後六時出て支那店に至り深水十八の支那行を送る。十時五十分春日駅にて上車，池田にて深水に別れ，月を踏で帰る。山田九郎，荘村秀等来訪せりと云ふ。

十一月二十八日　晴。東京中西正樹，福岡大内暢三の信到る。井手に発信し中西の書札を転致す。晩大内を研屋支店に訪ふ。高木正雄在り。八時辞帰。夜十二時亀雄福岡より電報にて金五円を要求す。

十一月二十九日　晴。早起厳霜為雪。午前九時内人と池田駅に至り汽車に乗じ宇土に到る。城の浦叔母，水谷縁族を歴訪各銭物を贈り，法華寺の先塋に謁し，上車城山に至り，先人の墳に展し香花を捧げ，去て一里伯母氏を訪ひ，酒資若干を贈り中食の饗を受け，二時半の汽車にて熊本に帰る。漢口岡幸七郎，上海井口忠次郎，東京平原文三郎並に大内暢三の信到る。

十一月三十日　陰天。午前福岡亀雄の信到る。直に之に復す。晩内人と大江に到り，九時帰る。弟亀雄来着。是日済々黌井芹経平より同黌大兎狩矢開きの案内状到る。事故有て行かず。

十二月初一日　晴。午後古川を訪ふ。柴田亦来会。晩餐の饗を受けて帰る。夜雨。

十二月二日　雨天。井手三郎の信到る。東京佐々友房氏に致書す。

十二月三日　晴。東京田鍋安之助の信到る。直に之に答ふ。
十二月四日　晴。午後井芹経平来訪。夜牛島，荘村，古川，永原等前後来訪。福岡大内暢三の信到る。是日家宅大掃除を為す。
十二月五日　晴天。屋内外の大掃除を為す。午前山田九郎来訪。近日台湾に渡航すと云ふ。午後河口介男，北御松二郎来訪。夜古川，津野来談。津野の請に係り熊本講の株を本人に譲与す。
十二月六日　晴天。上海白岩龍平の信並に福岡大内暢三の電報到る。午後出て山田九郎を訪ふ，在らず。上海深水十八の信到る。
十二月七日　陰天，午後微雨。支那店を訪ひ，五時帰る。
十二月八日　晴。午前本妙寺に展し，去て北御門松二郎を島崎岳林寺に訪ひ小談。同人を誘て一小旗亭に投じ小飲，三時熊本に帰る。東京岡二郎の信到る。
十二月九日　晴。午前佐野直喜来訪。東京池田末雄，鳥居赫雄に発信す。午後柴田常三郎来訪。夜内人と横田氏を訪ふ。
十二月十日　晴。午前古川，永原来訪。共に出て佐野を敲く，在らず。去て歓聚館を縦覧し，転て佐野を訪ひ，相携て水前寺に至り小酌。午後三時秋山儀太郎に抵り其の厳君のを吊して帰る。古川の処に至り小坐，帰宅。夜心気不舒。
十二月十一日　陰。朝谷口長雄来訪。晩内人と大江の招邀に赴き，九時帰る。柴田に発信す。
十二月十二日　雨天山下稲三郎，久留米よりの電報到る。午後井手三郎，中島裁之来談。井深彦三郎，長崎よりの電報到る。
十二月十三日　雨天，強風。午後降雹。午前佐野直喜を訪ひ小談，帰る。上海白岩，漢口岡並に古城貞吉の信到る。晩白岩，古城，山下稲三郎三人へ復書す。
十二月十四日　陰。古城貞吉の信到る。晩親戚二三を招て小宴を開く。
十二月十五日　陰。山下稲三郎，齊藤国雄，樗木成章の信並に東亜同文会規則郵到。午時諸妹を招き亀雄の東帰を餞し旅費拾一円を贈る。東京小山秋作，宇都宮太郎，梶川重太郎等へ致すの信を亀雄に托す。
十二月十六日　晴天。午後北御門松二郎来訪。東京鳥居赫雄の信並に東亜時論第一号郵到。
十二月十七日　陰。年金三十円を受取る。午后手島，上田の両生来訪。晩米□氏を敲く。
十二月十八日　晴天。海軍々令部高橋副官の信到る。午后支那店に至り，四時帰る。晩河口氏を訪ふ。留守中古川，津野外一名来訪せりと云ふ。
十二月十九日　晴天。午前東京山田珠一に致書す。午後古川を訪ふ。三時帰る。牛島生来訪。漢口より帰来せる者なり。
十二月二十日　晴。午前北島某来り，亡弟光彦の負債五円を代償せん事を請ふ。予其の情を憐み之に二元を附す。夜十一時東京田鍋よりの電報到。
十二月二十一日　晴天。午后二時山田九郎氏，北堂の葬式に出町往生院に会す。序を以て藤本親信氏に托し，東京田鍋への返電を発す。留守中国友重章来訪せりと云ふ。夜内人と相携へて通町骨董店を観る。宇野七郎氏新聞社預金三口の利子合計二十三円九十五銭を持参す。
十二月二十二日　晴。去年是日独逸人膠州湾占領の情況視察の為め芝罘を発し膠州に向ふ。午前建町骨董店に至り，傢伙各種を購ふ。代価十二円五十銭。芝罘，仁川両地より松倉善家の信到る。
十二月二十三日　晴天。午前齊藤国雄，春日某来訪。
十二月二十四日　朝雪。午前古川，津野と出て塩屋町に至り，熊本講株券，津野一雄に譲渡しの名前替を服部文節の処にて済し，去て春月より午後二時車に投じ松橋に向ふ。永原の寓にて古川，津野の寓にて古川，津野，志水等と会飲す。夜転て志水の寓に至り，十時十二分の汽車にて熊本に帰る。家に到るの時十二時也。東亜同文会の信到る。

十二月二十五日　晴。上海白岩の信到る。井手三郎に発信す。毛利篤来訪。是日毛利と連名にて支那店より金五十元を借り，葉室の朝鮮行盤費，予と毛利の保証にて東某より借りし分を返済す。

十二月二十六日　雨天。東亜同文会に十一, 十二月分会費二円を小為替にて送る。

十二月二十七日　晴。午前久留米山下稲三郎来訪。其渡清の事に付き商量す。東京宮島大八より書籍数部を贈り来る。木下宇三郎来り別を告ぐ。来月二日より東京参謀本部に転任すと云ふ。漢口岡幸七郎の信到。午後出て支那店に至り，四時帰る。

十二月二十八日　晴。午後深水十八来訪。昨夜漢口より帰来せりと云ふ。漢口岡幸七郎，台湾木下賢良，横浜大同学校の信到る。久留米山下に電報を郵送す。夜船津辰一郎来訪。共に出て通町に至り鶏飯を食ふ。船津を留て宿せしむ。

十二月二十九日　陰晴無常。朝船津辰一郎辞し帰る。谷口長雄来談。井手三郎来訪。午後三時半帰る。徳久知事より晩餐の案内あり。予先約有るを以て之を辞す。晩海軍兵学校生齊藤国男，春日某並に牛島文弟，河口，上田，内田等を招き会食す。

十二月三十日　晴。朝松倉善家の信到る。出て高木，支那店を歴訪し，春日に松倉を訪ひ小談，帰る。芝罘領事田結切三郎の信到る。津野一雄より七円五十銭を送り来る。晩内田岳父，横田隠居，河口介男を招邀す。

十二月三十一日　陰天。去年是日膠州湾より帰途山東の鉄口駅に宿す。午前松倉善家来訪。蓮子糖一匣，朝鮮巾着，山東白菜等を贈る。午後横田五郎来訪。夜年内の事を料理し了はり迎年の準備を整へ，九時内人と出て通町に至り家什其他雑品数点を購ひ帰る。東京佐々友房氏の信到る。予と井手との東上を勧め来る。是夜明治三十一年盡日たり。短檠深坐夜を守りて四更に到る。除夜の詩を賦す。